

大正十年十月六日印刷  
大正十年十二月日發行

金船社發行

金船社  
ZS<sup>2</sup>-B88

# 金の星

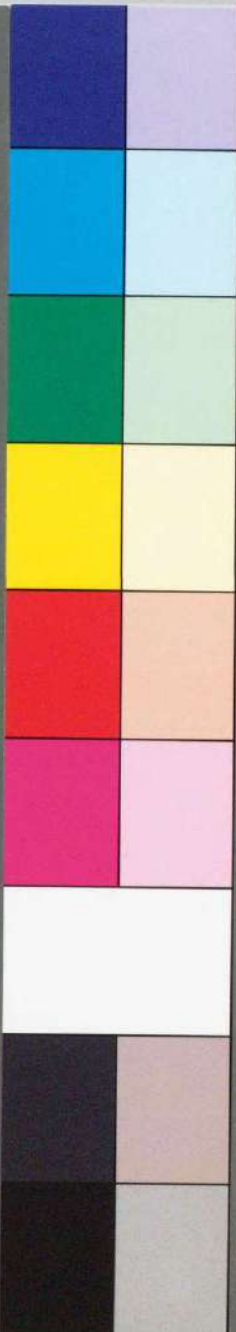
第二十号 二十月二號



cm 1 2 3 4 5 6 7 8  
Inches 1 2 3 4 5 6 7 8

## Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak 2007 TM, Kodak

◆四拾餘種類目錄送呈(押出金付式) 月狀形噴入式(安全装置イタク止式) 其他金銀飾付等  
 ◆弊所責任(一)本館は鉛筆の上質意に大特価五十銭以上 四七拾餘種類送呈に代金引替の寄託を各埠頭代送付す  
 ◆天下の人氣エキストラ一萬年筆に集中 出品の位階中故障若くは自然破損を止しては無料修理提供する  
 ◆トライ一萬年筆は使用其合の能きこと内外品は同一 地を扱けるものである 能き社女に送料 眞鍮で代金引替は送付商標につき一四拾餘  
 ◆クリンツ(一)本館若くは寄附者達の願を 萬年筆本館東京市小石川區原町一丁目二番地 電話小石川區四六三 明盛堂製作所  
 ◆代送付す(本館を見し皆御迷惑願ふ)

▲エキストラ一三號 安全装置イタク止式正十四金付エボナイト軸 正十四金ペン付(徑二分七厘丸)  
 市場價格 金貳圓四拾五(内外)  
 大特價 金壹圓四拾錢

▲エキストラ二號 安全装置イタク止式 正十金ペン付エボナイト軸 徑三分五厘丸  
 市場價格 金壹圓内外のもの(現圖通り)  
 大特價 金壹圓五拾錢

▲エキストラ一三號 安全装置イタク止式(正十四金付エボナイト軸破損防備装置) 正十四金ペン付(軸徑三分五厘丸)  
 市場價格 金壹圓五拾餘内外のもの(現圖通り)  
 大特價 金壹圓八拾錢

▲エキストラ一三號 押出式又はムア一式云々ペン先出入は繰出式と略と同様エボナイト軸正十四金ペン付  
 市場價格 金五六圓のもの(現圖通り)  
 大特價 金貳圓九拾五錢

カルメット

僕のすきなカルピス  
 お母さんと 飲んだ  
 兄さんと 飲んだ  
 僕のすきなカルピス  
 花子さんにあげよ

(一) 壺が八壺にふえる)  
 販賣所・酒店・食料品店・夢店  
 製造元・ラクトー株式会社

斯界の驚異異結果に於ては... 日本を以て... 製造者... 近時流行するシャープペンシルの製造者... 破産者... 依て之先立貨物廣告... 致し暴利を貪り奸商征伐七週年祝賀を兼ねて分間利益を及外視して萬年筆購買者トシャープペンシル一本宛無代進呈... 規定書并に進呈品購入寫真等御通知次第郵送此際希世所の微衷を諒は倍倍の御用命を願ふ

目次

温いコーヒー (表紙・原色版)	岡本 歸一
森の宴會 (口繪・三色版)	本居 長世
柱くゞり (曲譜・童話)	野口 雨情
頭と足たけの從五位様 (童話)	沖野岩三郎
私(ボチ)の生立 (少年自作童話)	二 岡田 興天
橋の上 (表紙なし)	三 舟橋 重一
家なき子 (名作童話)	六 三宅 房子
かくれんぼ (童話)	西 若山 牧水
ちんば雀 (推話)	天 土 橋 力
猫の仇討 (童話)	言 霜田 史光
不思議な塔 (童話)	六 林 信一
病氣のをちさん (童話)	四 新津 眞佐枝

白い帆か黒い帆か (童話)	奥 中島 孤島
時計御殿 (童話)	英 植松 壽松
お釜の歌 (童話)	三 藤澤 衛彦
ホントとウソ (童話)	六 小島政二郎
さらく時雨 (童話)	七 野口 雨情
田舎の馬 (幼年詩)	七 若山 牧水選
引越した友 (綴り方)	七 編 輯 部 選
初ちやん (自由童)	七 山 本 鼎選
私の學校 (童話)	八 野口 雨情選
鼻高さん (少女自作童話)	八 鈴木 さく子
金の星 講演部報告	八
通信	九

長篇 物語 父戀し (第十一回)	沖野岩三郎
人の噂	



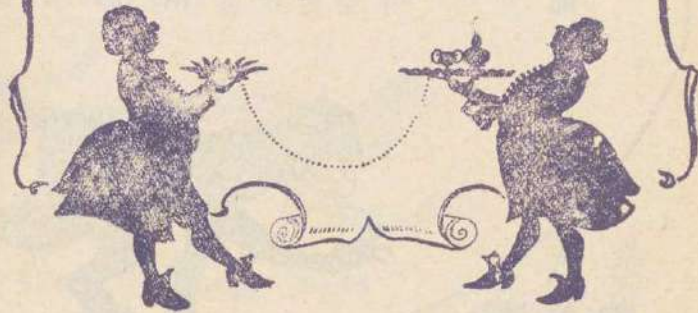


## 森の宴會

岡本錦一畫

木の下で聲が聞えました。よく聞き耳を立て、聞くと、それは熊と狼と狐と兎とが、この木の下へ秋祭りをしにやつて来たのでした。間もなく獸たちは宴會を始めました。食べたり飲んだり歌つたり大さわぎを始めました。やがてそれが済むと、狼が、  
 「一つみんなでお話をしようぢやないか。」と  
 云ひ出しました。

『オントとウ』の六十六頁を御覽下さい。



海軍中將 小笠原子爵閣下校閱

日清戰役當時一大尉として高千穂艦乗組員にして本書の推稿を以て鳴る名將軍なり

野崎著 愛國 童話 水兵と其母

美談 双書 第一編 四六版上製頗る美本 定價九十錢送料十錢

本書の出版されむことは既に屢各教育家諸名士より期待されたる處なれども小笠原中將閣下の外これを詳細に知るものなく遂に今日に及びたるもの也。

愛子を有せらる諸家 愛弟愛妹を持つ

諸兄姉は是非一書を彼等の机上に薦めらるべく無味杜撰なる童話集と同一に見給はれぬことを乞ふ

教職の要務にある教育家諸士の傳へ知

り註文申込れたるもの數百に及ぶ以て本書の眞價を知るに足る

猶本書には當時發表嚴禁の海戰記を極めて詳細に明記し文體は口語總假名付なれば小學生と雖も一讀血湧き肉鳴るの感を味ひ且つ古今の美談に知らず涙を催しむる誠に空前の好讀本として敢て推獎するに恥じず

東京市神田區 交 蘭 社 振替 〇四 口替 二七 座九 東九 京番

# 松波正明氏創作第一集

定價 金一圓八十錢

送料 金十錢

最新刊

童謡集

# 玉虫と人形

- ▽菊半截二百餘頁
- ▽上等印刷紙印刷
- ▽優麗無比紙函入
- ▽絹表紙天金別製
- ▽童謡樂譜十數頁
- ▽着色挿畫十數頁

- ◇野口雨情氏序文
- ◇本居長世氏作曲
- ◇山田耕作氏作曲
- ◇落谷虹兒氏裝幀

發行所

東京市小石川區  
宮下町三十六番地

日本童謡協會出版部

電話小石川五四二一番  
振替東京四三三五七番

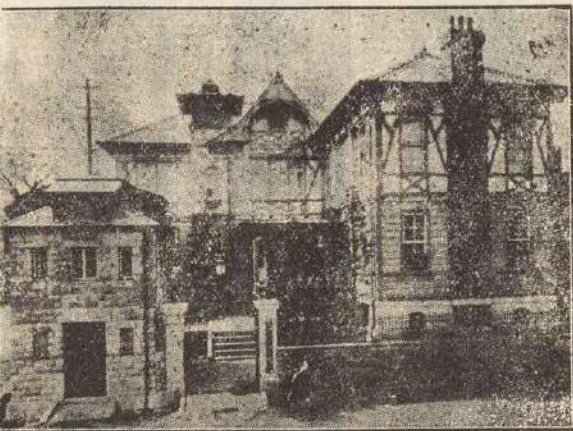
むかし、聖人中江藤樹先生を生んで、私達に人の子の道を教へて呉れた近江の國は、明治の世に、お伽のをちさん巖谷小波先生を生んで私達に人の子の光りと喜びと樂しみを與へて呉れた近江の國は、今また、この松波正明氏を出して、日本の子供達のために大なる力を注がうとしてゐる。見よ！ 比叡の山影紫に、水清き琵琶湖南に、突如旋風を起して一大兒童藝術運動の渦巻くを。而して、この中心こそ、最近の業を棄て、新に藝術に入つたわが松波正明氏その人である。本集は氏の創作第一集で、その純眞純情は、實に讀むものをして讚美敬仰措く能はざらしむるものがある。敢へて一本を座右に勸む。

# 天下の青年は大日本國民中學會に入會する乎

- 一 講義が新しいから
- 一 會費が廉いから
- 一 指導が良いから
- 一 學制が正しいから
- 一 基礎が固いから
- 一 講師が善いから
- 一 卒業が早いから
- 一 成功が慥だから

會長 尾崎 行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉  
山内繁雄  
新渡戸博士 三宅博士  
井上博士 浮田博士  
顧問 岡田博士 務大臣



一人前の男となるにはさうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はさうしても生存競争の勝利者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れない、中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンと出来てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗 ある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京 駿河臺(茗茶の水電車通り)

大日本國民中學會  
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇〇三  
神田三〇〇〇三 神田三〇〇〇三  
神田三〇〇〇三 神田三〇〇〇三

# 創立以來二十年

記念大特典提供  
目下新學期開講

# 入會の好機

講義録見本つき  
規則書無料進呈



柱くぐり

本居長世作曲

0 5 3 2 | 1 2 1 6 | 5 6 1 3 |

ならの だいのさんの うしろの  
 ならは ひながた ひとつひが

2. 1 6 5 | 0 5 1 3 | 2- 0 |

はしらは しらよ  
 くれろ こごもよ

0 3 5 6 | 3 3 2 1 | 2 3 5 6 |

ふたり こごもが はしらくぐり  
 おれも くぐろか こごもこ

3- 2 1 | 0 5 6 2 | 1- 0 ||

してる くぐれよ  
 こもに くぐろよ

金の星童謡曲譜集

本居長世先生作曲

野口雨情先生作  
 岡本歸一先生装幀

◆菊判型上等和紙  
 ◆表紙木版七度刷  
 ◆本文色刷十四頁  
 ◆定價各册六拾錢  
 (送料四錢)

人買ひ船

新刊 第一輯

内容 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん、

一つお星さん

新刊 第二輯

内容 一つお星さん、七つの子、鼯と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬、

青い空

近刊 第三輯

内容 青い空、つばめ、でんく、虫、雁來紅、呼子鳥、雀の酒盛り、

發行所

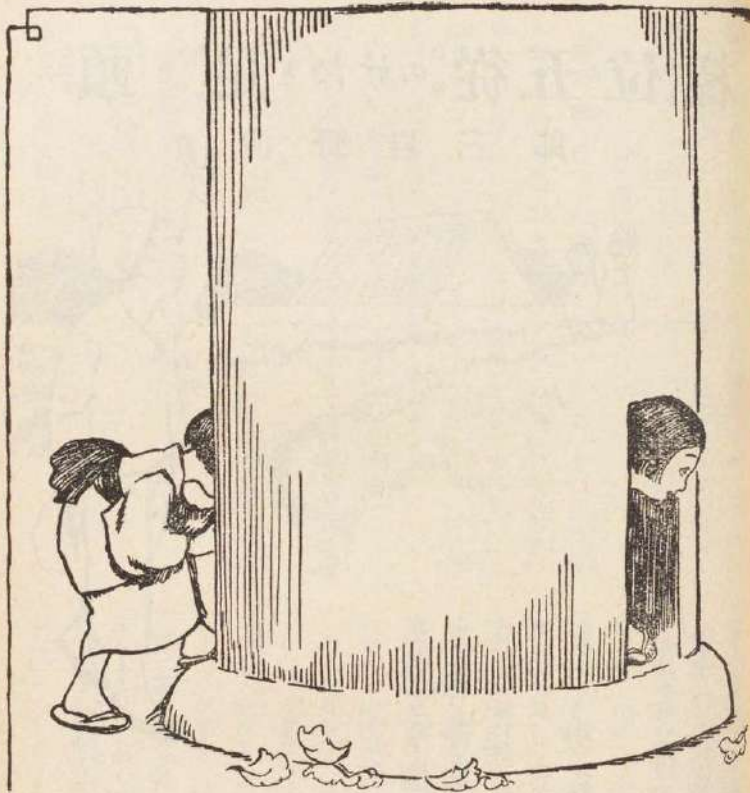
東京下谷上野  
 公園前三橋傍

金の星出版部  
 電話東京六二七〇三番  
 下谷上野六八二二三番

大書  
 次取店

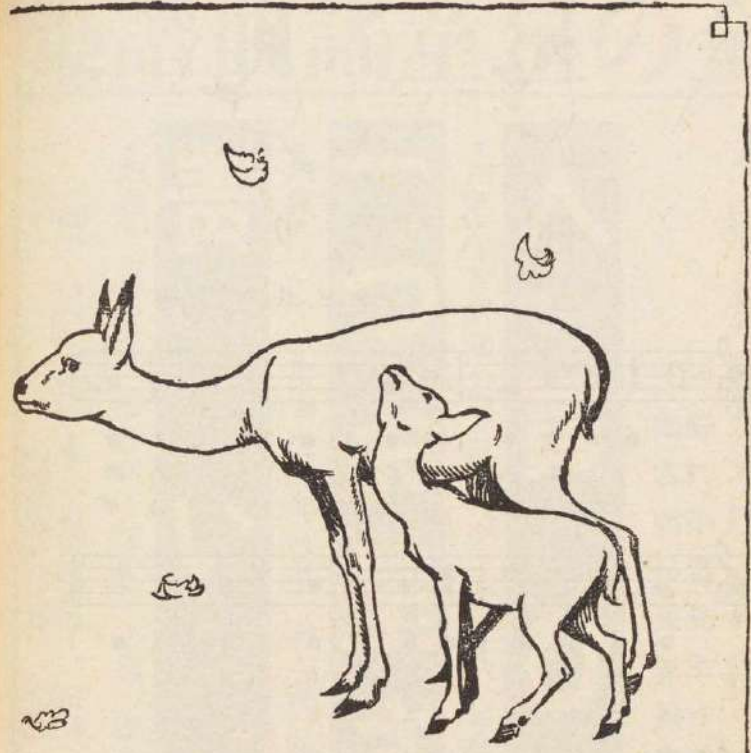
東京市外  
 下目黒四七八

白眉出版社  
 電話東京五四五九八番



奈良は日永だ  
 いつ日が暮れる  
 子供よー  
 おれも くぐろか  
 子供と共に  
 くぐろよー

(奈良大佛殿の圓柱に、長方形(高さ二尺位)の穴あり。これをくぐり得るものは佛ありとて、柱くぐりと名づく。)



柱くぐり  
 (名所めぐり童謡の二)  
 野口雨情  
 奈良の大佛さんの  
 うしろの柱  
 柱よー  
 二人子供が  
 柱くぐりしてる  
 くぐれよー



# 頭と足のけたの從五位様 沖野岩三郎



昔支那の或所に、鄭といふ男がありました。鄭は子供の頃から、「僕には從五位の資格があるんだぞ」と口癖のやうに言つて、威張つてゐました。けれども學問は出來ず、仕事は嫌ひといふので、お父様やお母様は鄭の行末が、どうなる事かと心配ばかりしてゐました。

或日の事、鄭は大變眞面目な顔付で、お父様とお母様の前に両手をついて、

「お父様、お母様、私も最う今年で満十八歳になりました。此のまゝ家に居ては、從五位は愚か從八位にもなる事は出來ませんから、これから都へ出て、本當の從五位になつて歸りますから、暫くお暇を頂戴致したうございます。」と、申しました。

それを聞いたお父様は、にこ／＼笑ひながら、「さうか、それは善い決心だ。本當の從五位になつて歸つたなら、此の家も、前の畑も、春月の山も、飼つてある二疋の

騾も、獣なお戯に興けるから、それを鄭みに、早く歸へ行つて、從五位様になつて、美しい從五位の位階服を着て歸つて来てお呉れ。」と申しました。

けれどもお母ア様は笑ひませんでした。

「鄭よ、都へ行つて從五位様にならうなんて、それは悪い考へだ。そんな馬鹿な事を考へてゐるやうな男は、屹度乞食のやうな、見すほらしい容になつて歸つて来るに相違ない。」と申しました。けれども鄭は、どうあつても都へ出ると言ひ張るので、已むを得ず、其の上京を許してやりました。

いよく鄭が都へ出立するといふので、お父様はにこ／＼笑ひながら、お母ア様はシク／＼泣きながら村堺まで見送つて行きました。

「左様なら、お父様、お母ア様、都へ行つて從五位様になつて歸ります……。」

鄭は元氣よく申しました。

「出世して歸つてお呉れよ。」

お父様はにこ／＼笑つてゐました。

「乞食になつて歸るなよ。」

お母ア様は泣きながら申しました。

智慧の足りない鄭も、別れは矢張り辛い見え、眼に涙を一杯溜めて、何度も何度も、後を振り返りながら、細い野路を、とほ／＼と歩いて行きました。

丘の所まで来て、振り返つて見ると、お父様もお母ア様も、最う見えませんでした。

鄭は坂路を降りる時、心の中でこんな事を考へました。

「僕は最う從五位の資格があるんだ。僕のお友達は皆、僕の事を從五位君、從五位君ッて言つてるぢや無いか。都へ行たなら、屹度本當の從五位にして呉れるに違ひない。」

そんな事を考へながら三日四日十日と長い旅を續けてゐるうちに、大きな河の流れてゐる所へ出て行きました。

「何と大變なものだ、これは河か知ら？ 海といふものか知ら？ 池か知ら？」

鄭は獨り語を言ひながら河の漕りに立つて水の流れを見てゐると、河の上から立派な立派なお舟が一艘下つて來ました。お舟には赤や紫の旗が十本ばかり立つてゐました。お舟の中からはヒュー／＼チン／＼ドン／＼と笛や鉦、太鼓の音が聞



えて来ました。

鄭は不思議に思つたので、河端まで降りて行つて、お舟の中を覗いてみました。お舟の中には従五位の位階服を着た立派な紳士が多勢の家來を伴れて坐つてゐました。

「もし、あなたは本當の従五位様ですか。」

鄭は羨ましそうに紳士の帽子や着物を眺めながら訊きました。すると其の紳士は、じろ／＼と鄭の顔を眺めてゐましたが、

「おう、お前は私の子の文清では無いか。」と申しました。

本當の従五位様に、私の子では無いかと問はれたので、鄭は偶々と思ひ心を起して、旨くあの偉い人の子になつてやうといふ考へを起しました。

「ね、さうだらう。お前は私の子供の文清に違ひない。お前は五歳の時に、家を出たつきり歸つて來なかつたのだ。しかし私には見覚えがある。其の額の黒子が何よりの證據だね、文清……文清……私をお父様だと言つてお呉れ、私は本當にお前のお父様だから……。」

紳士はほろ／＼涙を流しながら言いました。鄭は有りつた

けの智慧を凝つて、  
「僕は五歳の時に、悪漢に欺されて田舎へ伴れて行かれて、百姓の家へ賣られたのです。けれども僕を買つた百姓は、いつも僕を従五位様の子供だと言つて大事にして呉れました。僕は百姓の子供で一生を暮らす事が残念で堪らないから、本當のお父様に出會つて、立身出世をしたいと思います。遙々都まで出て来たのでございます。」と出たら目な嘘を言ひました。

すると、紳士は涙を流しながら、

「あア嬉しい、十四年目で私は尋ね／＼てゐた自分の息子に巡り逢ふ事が出来た。文清！私はお前の父の副大公といふ者で、今は嚴州の知事をして居るんだ。」と申しました。

鄭は躍り上る程喜びました。

「なアに立身出世して何でも無い事だ。もう僕は知事様の息子になつたんだ。今に従五位にも従四位にもなつて見せる。」

さう思ひながら舟の中に入つて、お顔を洗つたり着物を着更へたりしました。

五六日経つて、副知事は鄭を呼んで、

「文清、私も明日はお前へ伴れて嚴州の役所へ歸らねばなら

ないが、そんな服装では知事様の息子として相成りしない。今日はこれから呉服屋へ行つて、お前の着物を買つてあげよう。しかしお前の言葉は田舎言葉だから物を言つてはいけない。うっかり物を言ふと、あの知事様の令息は何といふ田舎ッペエだらう？と云つて笑はれるに決つてゐる。だから黙つてゐるんだよ。私が種々の美しい呉服を見せたなら、美しいとも善いとも悪いとも、何とも言はないで、唯頭を横に掉るんだよ。」と申しました。

鄭は黙つてゐて、頭掉を掉るんだから、何でも無い事だと思つて、

「はい、承知致しました。」と言ひました。

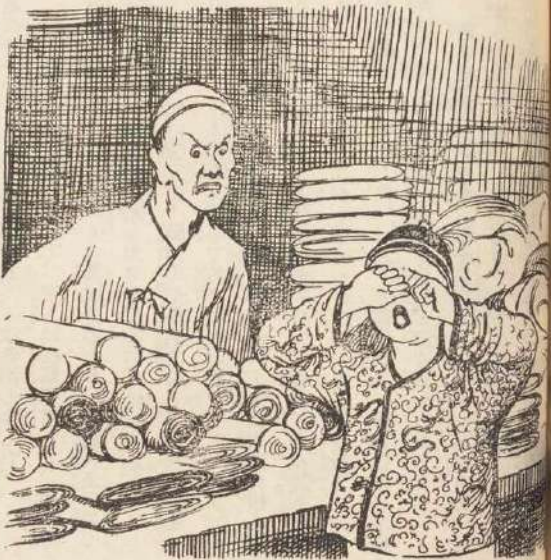
そこで知事様は、自分の着て居る従五位の位階服と同じものを出して来て、それを鄭に着せました。

従五位の位階服を着せられた鄭は、夢では無いかと思ふ程嬉しく思ひました。で、副知事と其の似而非息子とは二挺の輿に乗せられて、ゆら／＼と賑かな町に入つて行きました。暫くして輿は大きな呉服屋の前に停りました。

「許せよ主人、私は嚴州の知事だが、今日は息子と娘との衣

袋を買ひに来たんだ。上等のものを見せては呉れまいか。」  
劉知事は横柄にかう申しました。すると呉服屋の主人は、  
何度も何度も頭を下けて、  
「どうぞ御覽下さいませ。上等の品は澤山々々ございますか  
ら。」と申しました。

それから主人は番頭に言ひつけて、一番上等の品物を何十  
反も知事様に見せました。  
劉知事は、反物を一々鄭に見せて、



暫くすると番頭は、反物を舟に残し置いて歸つて來ました。  
そして、

「知事様、奥様とお嬢様とは、彼の五十反の中で四十反だけ  
買つてやらうと仰しやつて下さいましたが、残りの十反の中

「これは善いぢやないか、これは氣に入つたか。」と問ひまし  
た。けれども鄭は物を言はないで頭を横に掉れと厳しく咄咄  
けられて居るので、物を言ひかけられる度に、頭掉をふりま  
した。

劉知事は主人と番頭に對つて、

「息子は、どれもこれも氣に入らないといふから、今日は娘  
ののだけ買ひませう。娘は舟に居るから、此れを舟まで持  
つて行つて見せて來てお呉れ、娘の好きな分だけ買ひますか  
ら。」と申しました。

「左様でござりますか、では何反程持つて參つてお目につ  
ませうか。」と主人は尋ねました。

「さうだね、一反百圓ばかりのものを五十反ばかり持つて行  
つてお呉れ。」と知事様は申しました。

そこで主人は番頭に言ひつけて、舟まで五十反の反物を持  
たせてやりました。後に残つた劉知事は、又た二十反ばかり  
の反物を鄭に見せて、  
「これは善いだらう？ この模様は立派ぢやないか。」と申し  
ました。けれども鄭は矢張り黙つて頭掉をふつて居ました。

で、五反を天子様に献上しては御座せうと仰しやつてゐま  
した。就きましては、其の五反を何の品に致しますか、一々  
お歸りになつてお選り下さいと仰しやいました。」と頭を下け  
ながら申しました。

それを聞いて劉知事は、深く點頭いて、

「宜しい、では私が行つて天子様に差上げる品を選ぼう。」と  
言ひました。すると主人は又た極く上等の品々、更に十反出  
して見せました。

「では、これも借りて行く。息子の文清が残つてゐるから此  
店に有りつたけの品を見せてお呉れ。一反や二反は氣に入つ  
たのがあるかも知れない。」

知事様は然う言ひ置いて、また奥に乗つて舟へ歸りました。

後に残つた鄭は、呉服物を何百反も見せて貰ひました。け  
れども相變らず黙つて頭掉ばかり掉つてゐました。

日暮頃まで主人と番頭とは鄭に五百反程の反物を見せまし  
たが、餘り黙つてゐるので、主人も少々腹が立つて來ました。  
で、大きな聲で、

「知事様の御令息、從五位様、あなたは啞ですか。」と嗷鳴り

ました。

鄭は餘り頭掉ばかり掉つてゐたので、頸が痛くなつて來ました。それに其日はお晝御飯を食へなかつたので、お腹が空いて倒れさうになつて居ました。で、主人に嗚鳴られた時、思はず、わアッ！と聲を立て、泣き出しました。從五位様が泣き出したので、主人は喫驚仰天して、使を舟へ走らせてみましたが、もう其處らあたりに、劉大公の乗つてゐた舟は、影も形も見えませんでした。

舟は見えない筈です。嚴州の知事劉大公と言つたのは全くの嘘で、これは其頃支那中で名高い大泥棒だつたのです。

一萬圓ばかりの反物を、旨く騙られた主人は大變口惜しがりましたが、何とも仕様が無いので、從五位の位階服を着て、メソメソ泣きながらほんやり坐つてゐる鄭を散々に踏んだり蹴つたりしました。けれども鄭は何んにも言はないで家中の耳の聾れる程、大聲を出して泣くばかりでした。

種々と證議した結果、鄭が田舎から出て來たばかりの、智慧の足りない男だと知れたので、店の人達は、慈悲の爲めに、其の着てゐた位階服を脱がせて、ほろ／＼の襦袢を着せ

ました。そして、

「從五位様、乞食の從五位様、ほろ／＼の從五位様。」と言つて調戲しました。けれども襦袢を着せただけでは、從五位様に見えないと云ふので、立派な帽子と靴とだけを被せて町の役所へ引渡しました。役人も種々調べてみましたが、唯馬鹿だといふばかりで、別に悪い事をしたわけではありませんから鄭の産れた村まで送り返す事にしました。さうして鄭は、町の役人に伴られて、お父様や、お母ア様の居る村へ歸つて來ました。村の人達は皆な、

「頭と足とだけの從五位様！」と云つて笑ひました。けれども、お父様は、にこ／＼笑ひながら、

「其の帽子は立派だ。其の靴は見事だ。」と言ひました。

お母ア様はほろ／＼涙を流しながら、

「頭と足との外は、皆な乞食のやうだ。」と云つて泣きました。

鄭も始めて、自分には本當の從五位様になる資格が無いのだと知つて、それから一生懸命に百姓のお仕事をやるやうになりました。(をばり)



### 私(ボチ)の生立(後編)

朝鮮龍山漢口 朝日新聞 興夫

(十二才)

私(ボチ)は八匹兄弟で、けちんぼうな家に生れまして、母さんのお乳をしゃぶつて少し大きくなりました。ある静かな夜、家の中でこんな話が聞きました。

主人「犬の子が八匹も生れてうるさいから、良ちゃんにでも、二匹くらゐやらうぢやないか。」

奥さんの聲「え、三ちゃんもほしいといつてゐましたから、皆で四匹くらゐやらませうよ。」  
主人「うんそれがよからう。」  
私「思はずひやりとしました。この中の四

匹が賢くなるのをお望みと、寂しくてたまりませんでした。お母さんは、  
「さあもうこれでおわかれたから、わたしのおなかにおはひりさない」といつて涙をこぼされました。

翌日三ちゃん良ちゃん正ちゃんかきて、兄さんの三匹をもつて行つてしまひました。私にはあの時兄さんが私の手をなめて下さつた時が最後だと思ひました。私達はつくづくこの家がいやになつて逃げ出さうと決心して、十五夜お月様がまんまるく上つた頃、この家をおもく逃げ出しました。ほそいあぜ道を通つて山の麓につきました。ここで私達はその晩休むことになりました。

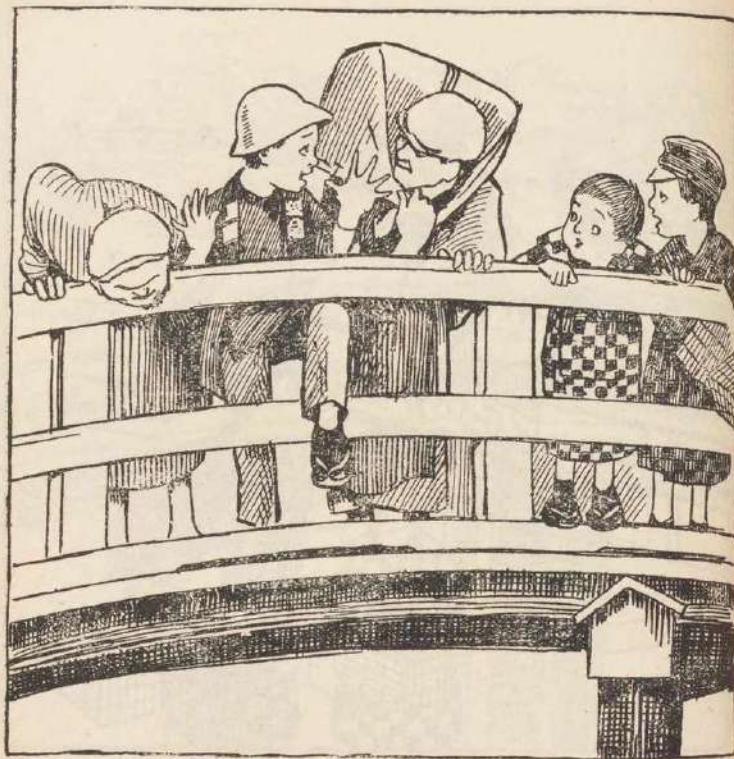
翌朝早く食べものをさがして里に出ました。初ばこみためなさがして食べて居ましたが、もうこんな物にはあきて、わるいと思ひながら、魚屋へしびこんでたいなくはへて逃げ出さうとしますと、戸口にかくれて居た小僧に、おしりをいやといふほどぶたれました。

それからちんばをひいて牛乳屋にはひり、牛乳の残りをはいて、そこらをはら／＼おそんで居ますと、小さな犬が生意氣に「ワッー」とうなりながら向つて來たので、私

は「ワン／＼」とおこつて見にかかつてきました。私は大得意でそばの木陰で眠つて居ますと、急に弟等の吠える聲がするので目をさまして見ると、こは如何に、犬ころしがこちをにらんでおつかけてくるではありませんか。

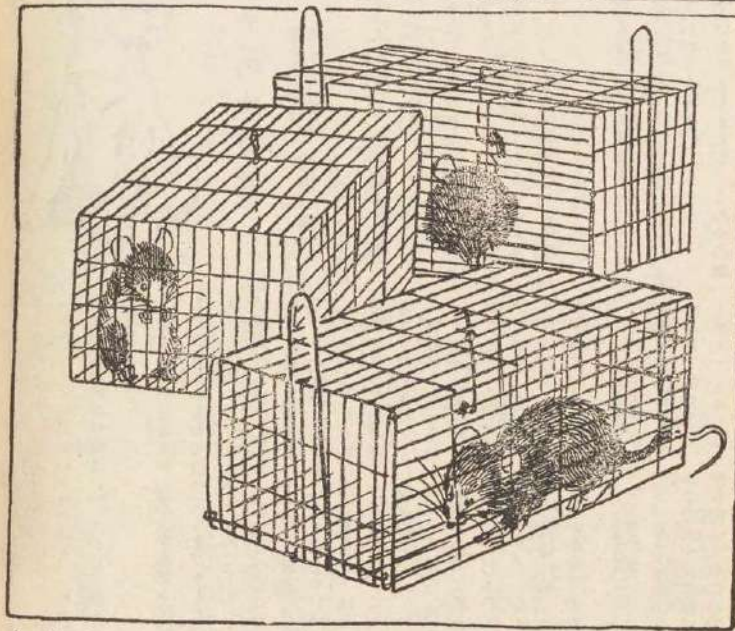
私ほもう夢中で足にまかせて逃げました。やがて後を見た時には誰も居ないので安心してそこらを見はわしました。すると、すぐ前にりつげな家があつて、お庭でこゝろのぼつちやんらしい方が面白さうに遊んで居たが、私を見てすぐとんできて私をだき上げ、御主人らしい方の前に私をつれて行き「父ちゃんこの犬をかつてちやうだい」といふと「あゝ、かつて上げよう」とおつしやつたが、こゝろの方もけちんぼうではないかと、心配をして居ると、やがてきれいなおわんに御飯を「はい盛り、みそ汁をかけたのを持つて來て下さつたので、これ神のめぐみと喜びました。

これからはこゝろのぼつちやんの言ふ事を聞いてつかへました。なと／＼とほろ／＼がはひりそこなつた所を、私がつかまへましたのでたいへんなおほめや、こちさうにあづかりました。私はこれからは、主人やぼつちやんのためにつくすつもりです。(をばり)

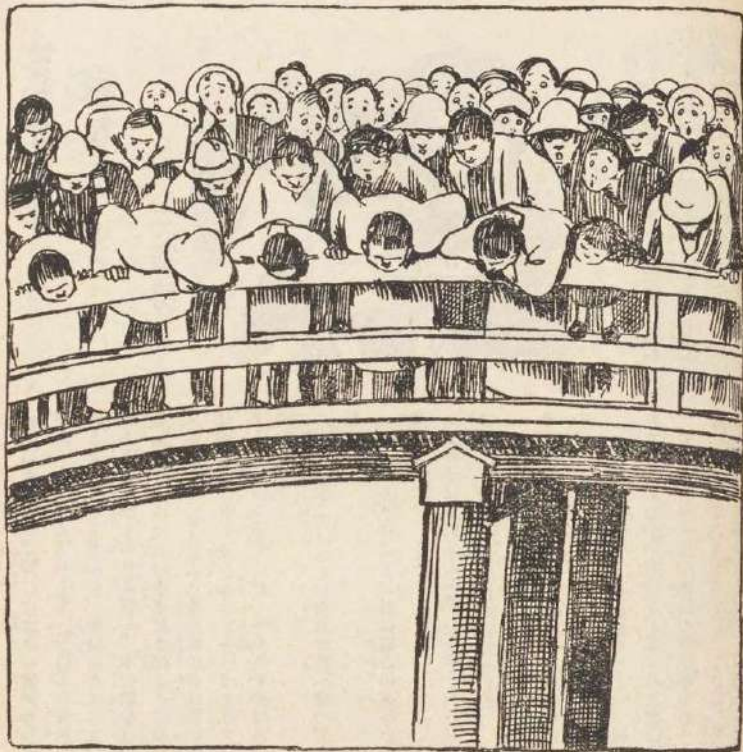


私達は金ちやんの後についてお家の欄の上まで来ますと金ちやんは一の籠を兩手で上下に思ひ切りふりとばしたので鼠の奴さん金細で鼻づらをぶつたか目がくらんだかふらふらしてゐるのを水の上へ籠をつき出して蓋をあけると、ほちやんと落ちてそれでも泳いでるましたが二三間泳ぐとぶく／＼とあはを出して沈んで了ひました。三匹とも同じ様に、私達に餘りあつけない氣がして鼠の沈んだ邊を暫く見てゐました。すると通がかりの人まで五六人一緒になつてのぞいて居ましたが、その内の一人が小僧に「どうしたんだい」と聞きますと金ちやんはいやに落ちついて「この下の處に大きなすつほんが首を出してゐるが上で騒いだので二三間あの邊まで泳いで行って沈んちやつたんです」と如何にも本當らしく云つてから私達の方を撲つたさうな顔をして見て黙つてゐると目で知らせました。

一重橋舟 上の橋 ふるば



もう随分以前の話ですが、私の家に鼠がふえて困つた事があります。臺所の棚からお鍋を落したり戸棚からお皿を落したり、天井でどたんばたん相撲をとつたり、マラソン競争をやつたり、毎晩寝られない位でした。昨日はお父さんの本が噛られた、今日はお人形さんの鼻が噛られたのと毎日々々それはいたづらをしました。蟲でさへ殺すのを嫌つてゐたさすがのお母さんもう／＼我慢が出来なくなつて臺所の隅や下水の口や三ヶ所へ鼠とりの籠がすゑられました。翌朝大きな鼠が取れたと云つて起され飛び起きて臺所へ行くと三つの籠に三つともそれ／＼大きな奴が入つてゐます。私達は仇でも打つ氣で棒でつゝいたりして殺さうとしましたがお母さんがどうしても許して下さいません。結局出入りの魚屋の小僧の金ちやんがお母さんから銀貨一つを買つて殺す役目を云ひつかりました。



それから一時間もたつてもう私達は鼠の事なんか忘れてゐた時金ちゃんが出来て「先刻の橋の上へ行つて御覽、今黒山の様に人がたかつてゐるア」と云ふので、今度は鼠とりも持つて来ませんし誰か私達を喰つきと思ふ人もないと思ふと面白くなつて馳けて行きました。来て見ると或程小僧の云つた通りえらい人で、私達も人中へもぐり込みました。するとその中の一人がさも知つてゐる様に「この橋の上から飛込んだんです。暫く首だけ出してあぶあぶやつてゐるがとうくぶくくと沈んぢやつたんですよ。書生つほですよ。氣狂でせうよ、多分」と得意さうに見てゐる様子が話してゐます。私達はこれは大變な事になつたものだと思つてゐる所へ巡査が來ましたので、もしもこれが鼠だつたとわかつたら私達は嘘つきで叱られると思ふと心配になつて家へ逃げて歸りました。その日はそれ切り家から出ませんでした。巡査も來ませんでした。



するとその人達は本氣になつて「へえ、そいつは素敵だ、大した物だ、どの邊だ、あの邊かい」と聞き乍ら首をつき出して水の上をのぞいてゐます。外の人達も一緒になつて覗き込んでゐます。金ちゃんはおまく人を欺したので得意氣に調子づいて「昨日も今頃浮き出してゐたよ、お濠の主かも知れない」と口から出まかせな偽をついては私達の方を見て皆なが本氣になつてゐるのが面白くて耐らないうな顔をしてゐます。所が私達は、此私私持つてゐる鼠とりの籠がその人達に見付ければでもしたら嘘を云つた事が知れるし、怒つたら金ちゃんがひどい目に會ふだらうと思つて一生懸命籠を隠しました。その中なんだか私までが一緒になつて皆を欺かしてゐると思ふと恥かしくなつて来て、籠をかゝへたまゝこそくくと逃出しましたが振り返つて橋の上を見ますと人が十四五人にふえてゐました。

家なき子 (つゞき)

三宅房子



前へ！

氷のやうな風の吹きさらす道端で、氣を失つたまま、私は何時間の間、そのまま倒れてゐたのでせうか。

の中にあつた。傍には大きな爐があつて火がカツカと燃えてゐます。私はこの部屋を見たこともありませんし、寢臺のそばに立つてゐる人達の顔も知りません。木の靴をはいた男の人と、三四人の子供が心配さうに私を見つてゐました。その中で、殊に私の目についたのは六つばかりの女の子でした。その子の素暗らしく大きな目が、今にも物をいひさうにしてゐました。

たでせう。皆な話によると、あの氣の毒な親方は死んだのでした。私達が倒れたところは植木屋さんの門前でした。植木屋さんの人達は、翌朝早く起きて私達を目つけたのでした。私達は一しよに霜の上にかたまつて、少しばかりの露をかぶつて眠つてゐたのですが、親方の方はもう死んでゐました。私も既に死ぬところでしたが、カビが胸のところへ入つて来て、私の心臓をあたまかにしてくれたばかりに、微かに息が残りつてゐたのです。植木屋さん達は、私を家の中に運び入れて、子供達の暖い寢床の中に入れて介抱してくれたのでした。

ふと氣がついて目を覺して見ると、私は床の隅を這つてゐる。思つてゐたあの大きな目の女の子は、親方が死んだと聞いて、私が如何にもがっかりしてゐるのを見て、お父さんのところへかけて行つて、私の方を指しながら何か話してゐました。しかし、話といつても普通の言葉ではなかつて、身振りや目付きで言つてゐるのですが、それが言葉でいふよりは、どんなに愛情深く見えたか、倒れませんでした。

「この子はお父さんを探してゐるんだね。」と總領らしい一人の子供がいひました。「いえ、お父さんではないのです。親方なんです。何處へ行きました。カビは何處にゐますか。」

私は六時間程まるで死んだ者のやうになつて寝てゐましたが、そのうちに血の巡りがついて、呼吸も強くなるやうになつて、漸く目を覺したのでした。

アルチユール少年と別れて以来、こんなに愛情のこもつた深切に出逢つたことがありませんでした。丁度、昔の養親の母さんに會つたやうな氣がするのです。親方が死んで、私は世の中になつた一人置き去りにされたのですが、でも、獨りぼつちではないといふ氣がしました。私を愛してくれる者が、まだ傍にゐるやうな氣がしたのです。

「さうだ、リーズのいふ通りだ。この子も聞くのが辛いだらうが、本當のことを言はなければならぬ。私達がいはなくても、巡査が話すだらうから。」

しかし、私が欲しいのは火ではなかつたのです。食物なのです。家の人達がスープをすつてゐる所を見てみると、だん／＼氣が遠くなるやうな氣がして來ました。その時でした。あの目の大きな女の子のリーズは私の向ふに腰をかけてゐて、何にもいはずに、ちつと私の方を見つめてゐましたが、ふと立上つてスチープの一杯入つてゐるお椀を私の所へ持つて來てくれたのです。もう物をいふことも出來ないので、私はたちよつと頭を下げてお禮をいひました。

「さア、お上り。リーズが持つて行ったのは優しい心でしたのだからね。もつと欲しければまだあるよ。」

私は一ぱいのスープを見る／＼すつてしまひました。前に立つて眺めてゐたリーズはさも満足さうに溜息をつきました。それからリーズは私の腕をとつて父親のところへまた一ぱい貰ひに行きました。

二杯目のスープもぢきに無くなつてしまひました。

「お前なかく／＼いけるね。」お父さんは驚いていひました。私は恥しい氣がしました。しかし、食卓と思はれるよりは本當の話をした方がいゝと思つて、實は昨晚御飯を食へなかつたと話しました。

「それではお晝は。」

「お晝もやつぱり食へませんでした。」

「では親方もかい。」

「え、親方も食へなかつたのです。」

「それではあの人は、寒さばかりでなく、餓ゑて死んだのだね。」

熱いスープを食べたのですつかり元氣がでました。私は立つて出かけようと思つてました。

「お前、どこへ行くの。」と植木屋のお父さんがいひました。

「お暇をいただきます。」

「お前は矢張り藝人でやつて行く積りかね。」

「しかし、外にする事がないのです。」

「旅でかせぐのは辛いだらうね。」

「でも、私には家がないのですもの。」

「それはさうだらうけれども、夜が辛いだらうね。」

「私だつて、寒室にも寝たいし、火にも焼きたいと思ひます。」

「ではお前どうだね、この家にあて働く氣はないかね。朝は早くから起きて、一日働かなければならないのだから、なか／＼楽な仕事ではないが、お前が昨夜出會つたやうな目には決してあふ氣遣ひはない。それで、お前が本當にいゝ子供なら、私はお前を家の者と同様にして、一しよに暮して行きたいと思つてゐるのだよ。」

「お前、どうするのだ。」お父さんが、尋ねました。

「お暇いたします。」

「どこへ行くのだね。」

「わからないのです。」

「パリに友達か親類でもあるのかね。」

「いえ、ありません。」

「家はどこだね。」

「私には家がありません。つい昨日この町へ来たばかりなんですから。」

「では何をしようといふのだね。」

「歌をうたつたりして少しはお金を貰ひます。」

「パリでかい。しかし、それよりか田舎のお父さんやお母さんのところへ歸つた方がいいだらうに。両親はどこに住んでゐるのだね。」

「私にはお父さんもお母さんもありません。」

「でも、あの髯の白いお爺さんはお父さんではないといふぢやないか。」

「しかし、外にもお父さんはいないのです。」

「お母さんはい？」

「母さんもありません。」

「伯父さんか伯母さんか、それとも親類は。」

「この時、リーズが私の方を無愛想で、涙の中からニツクリました。しかし、私は今の植木屋のお父さんの言葉を、本當と思ふことが出来ませんでした。私はたゞお父さんを眺めてゐました。すると、リーズが飛んで来て、私の手をとりました。」

「ねエ、どうだね、お前。」とお父さんはもう一度いひました。

私はどんなに嬉しかつたでせう。私に家族が出来るのです。もう私は一人ぼっちではなくなるのです。あゝ、このいゝ夢よ、どうか消えずにゐてくれるやうに。」

私は早速堅琴を肩からはづしました。

「お、それでこの子の返事がわかつた。」とお父さんが笑ひながらいひました。「私はお前の顔つきでお前がどんなに喜んでゐるか解るもう何もいふことはない。その琴を壁におかけ。いつかお前がこゝにあきたら、またそれを下して好きな方へ行くがよろしい。けれども、お前も燕のやうに、飛んで行く季節を選ばなくてはいけない。まア、冬の間は出て行くのをお止し。」

私は全くこの家に落付く事になりました。

「何もありません。」

「では何處から来たのだね。」

「親方は養母の手から私を買つたのです。皆さんは私に深切にして下さつて本當にうれしく思つてゐます。ですから、おいやでなかつたら、私は日曜日に此處へ戻つて来て、あなた方の踊りに合せて堅琴をひいてあげます。」

かういひながら私が扉口の方へ行きかけようとして二歩三歩も行くと、すぐ後からついて来たリーズが私の手をとつて堅琴を指さしました。

「今、弾いてもらひたいの。」と私は笑ひながらさきました。リーズは頷きました。お父さんも傍から、

「うん、弾いてやつておくれ。」といひました。

私には琴を弾く元氣がなかつたのです。でも、この可愛らしい女の子のために弾いてやらなければならぬので、踊りの曲を一曲弾きました。

リーズは、始めは大きな目をして、私の方を見ながら聞いてゐるだけでしたが、やがて足で拍子を合せはじめました。その内に、とんとととと食卓の中を踊りはじめました。

この家の裏は植木屋で、お父さんの名はピエールといひました。二人の男の子と、エチエネットといふ女の子と、外に一番小さいリーズの五人暮でした。

リーズは啞でした。生つきの啞ではありませんでした。が、四度目のお誕生を迎へる少し前から病氣で物をいふ力がなくなつてしまつたのです。しかし、仕合せと智慧の力をなくすやうなことはありませんでした。それどころか反對に、並外れて智慧が発達してゐました。ですから、何でも解るやうでした。その愛らしい活潑な氣質が家中の者に好かれてゐました。

母親がなくなつてからは、姉さんのエチエネットが家中の事を取りしきつてやつてゐました。また十四だといふのに、お料理を拵らへたり、裁縫をしたりして、母親にもなつたり女中にもなつたりして働いてゐました。朝はまだ暗い内に起きて、父親の朝飯をこしらへ、夜は遅くまで皿を洗つたりしてゐたのです。

私は堅琴を壁にかけてから、昨夜出會つた出来事をぼつ／＼皆なに話しました。石切場へ行つて眠らうとして失敗した事や、その後





「カビだ、カビだ。」と私は叫んですぐにとび上りました。

けれども、リーズの方が私よりも早やかっただけです。リーズは扉を出して行って扉をあけました。

カビは私に飛びかかって来ました。私は

「お前の親方の所へ行かうといふのだよ。」とお父さんはいひました。お父さんの話によると、巡査が私の正氣づくのを待って訊きたい事があるといつて来たさうです。しかし、巡査はいつ来るか、わからないのでした。私は早く報告を聞きたいと思ひました。多分親方は死んでゐるのではない、きつと生きて歸れるのだといふ氣がしてならないのでした。

私の心算さうな事を見て、お父さんは私を

「お前の親方の所へ行かうといふのだよ。」とお父さんはいひました。お父さんの話によると、巡査が私の正氣づくのを待って訊きたい事があるといつて来たさうです。しかし、巡査はいつ来るか、わからないのでした。私は早く報告を聞きたいと思ひました。多分親方は死んでゐるのではない、きつと生きて歸れるのだといふ氣がしてならないのでした。

私の心算さうな事を見て、お父さんは私を

「お前は、早く行つて、この事は隠してゐようと思ひましたが、事件になれてゐる警察官の前では隠しておほせるものではありません。たうとうすつかり言はせられてしまひました。署長は早速部下に『この子をガロフオリといふ奴のところへ連れて行つて、その男に就て取調べてくれ。』と命令をしました。巡査と私とお父さんと三人で、其處へ出かけて行きました。

ガロフオリの家はちぎりにわかりました。しかし、もうマツチヤは見えませんでした。私と巡査が一しよに来たのを見て、ガロフオリはぎよつとして著くなりましたが、死んだ親方の事で訊きに來たことがわかると、初めて安心したやうに、

「やれ、爺さん死にましたか。」といひました。

「お前はその老人を知つてゐるだらう。」と巡査がいひました。

「はい。」

「では、あの老人について知つてゐることを残らず話してくれ。」

「何でもない事でございます。あの男の名前

「お前の親方の所へ行かうといふのだよ。」とお父さんはいひました。お父さんの話によると、巡査が私の正氣づくのを待って訊きたい事があるといつて来たさうです。しかし、巡査はいつ来るか、わからないのでした。私は早く報告を聞きたいと思ひました。多分親方は死んでゐるのではない、きつと生きて歸れるのだといふ氣がしてならないのでした。

私の心算さうな事を見て、お父さんは私を

「お前の親方の所へ行かうといふのだよ。」とお父さんはいひました。お父さんの話によると、巡査が私の正氣づくのを待って訊きたい事があるといつて来たさうです。しかし、巡査はいつ来るか、わからないのでした。私は早く報告を聞きたいと思ひました。多分親方は死んでゐるのではない、きつと生きて歸れるのだといふ氣がしてならないのでした。

私の心算さうな事を見て、お父さんは私を

お醫者は丁寧に診察をした後で、すぐに私を病院に送ったが、いよいよひきました。しかしお父さんは、

「この子は私の家の門の前で倒れたのですから、病院へはやらすに私どもが看病しなければなりません。」と言ひ張りました。そして、たうとう言ひ通して、忙しい中を看病してくれました。エチエンネット姉さんは、あり餘る仕事のあるところを私のために尼さんがして下さるやうに、深切に、しかも規則正しく看護してくれて、痼癩一つ起したことがありませんでした。

姉さんの忙しい時には、リースが代つて看護してくれました。私の病氣は長かつたし、それに重かつたのでした。快くなくても、度々後戻りをしたので、本當の両親でも厭氣がさしたかも知れません。でも、エチエンネット姉さんは何處までも我慢強く深切をつくしてくれました。幾晩も、肺が痛んで息がつまるやうな氣がして、眠れないことがありましたが、家の人が代りばんに、寢臺の傍につききりについてゐてくれました。

お父さんをなくしてしまつた後の家の中は、もうどうすることも出来ませんでした。四人の子供達は、てん／＼に別れて遠く離れてゐる叔父さんや叔母さんのところへ引とられて行く事になりました。私も、もう厄介者として皆なについて行く譯には行きません。

しかし、私は元氣でした。この深切な人達のために何か盡してあげなければならぬ、と思ひました。私にも出来、一つの事がありました。それは別れ／＼に暮してゐる兄妹たちの處を廻つて、皆なの便りな次から次へと持つて廻ることでした。

私はその役を引受けました。皆なは私の計畫を聞いてどんなに喜んでやうです。ある日のこと、兄妹達は一臺の馬車に乗つて、住みなれた家去ることになりました。「さようなら。」皆なは私の方を見て叫びました。馬車は動き出しました。霧の中でリースが窓の外に身體を出して、私に手を振つてゐるのが見えま

お蔭でやう／＼少しづつ癒かけて來ましたでも、長い間の重病の後でしたから、少しも家の外に出るのには、牧場が青くなつて暖かな風が吹くまで待たなければなりません。いつも用のないリースが河のある方まで私を散歩につれて行つてくれました。私達は家を出ると、カピを先きに立て、手を組みながらそろ／＼歩いて行きました。その年の春は暖かで、日和がつまきました。

やがて、私も皆なと一しよに働けるだけ丈夫になる日が來ました。私は此の日の來るのをどんなに待ち兼ねたでせう。こんなに深切にしてくれる人達のために何うかして盡さなければならぬと思つたからです。私は朝早くから皆なと一しよになつて、温室の蓋を開けたり、花の世話をしたりして一生懸命に働きました。

二年の間、こんな風にして過きました。しかし、私といふものはいつになつても幸福に暮せないやうに生れついてゐるのでせうか。この植木屋のお父さんの家が、思ひがけない不幸がもつて一家が散り／＼になるやうな目にあつたのです。

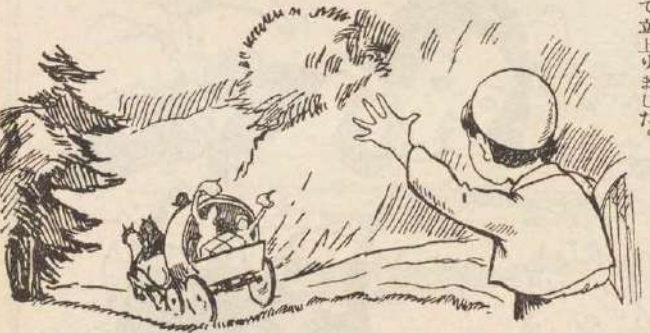
したが、間もなく病を曲つてしまつて、たゞ砂煙だけがいっせも見えてゐました。私は聲の細い肩にかけました。カピもすぐ氣がついて立上りました。

ある日のこと、一家そろつて遊びに出たことがありました。その留守の間に大きな電気が降つて、温室のガラスが一枚残らずめちやめちやに壊れてしまつたのです。その爲めに折角賣出さうと思つて當てにしてゐた花はすつかり傷められてしまひました。

植木屋のお父さんは十年前にこの花園を買つた時、この土地を賣つた男からお金を借りてゐました。それを十五年間になしくづしに返す事になつてゐて、もう十年分だけは返してしまつてありましたが、今年も丁度返す時機になつてゐたので、お父さんは温室の花を賣つてそれで返すことに豫算を立てゝゐました。ところが番のためにすつかり當てが外れてしまつたのです。

約束の期限の切れた翌日、眞黒な着物を着た役人が來て、印を捺した紙を渡して行ききました。お父さんの財産は、これですつかり、金を貸した男に取られてしまふ事になつたのです。

お父さんは心配して辯護士の家へ行つたりして騒ぎましたが、もうどうすることも出来ませんでした。そればかりか、財産を取られ



「さア行かう、カピ。」日はもう高く上つてゐました。空は青々と晴れて、氣候は暖かでした。氣の毒な親方と私が疲れ切つて倒れたあの寒い晩とは大へんな違ひでした。あゝ、この二年間はほんの休息であつたのです。私は又自分の道を進まなければならぬと決心しました。けれどもこの休息は私のためには大變役に立ちました。それが私に力を與へてくれました。やさしい友達もつくつてくれました。

私はもう世界に一人ぼつちではないのです。私は世の中に目宛てを持つやうになりました。私を愛し、また私も愛してゐる人達のために役に立ち慰めになる爲めに生きなければならぬと思ひました。

新しい生涯が私の目の前に開けました。前へ。(をばり)

皆様から長い間御愛讀を受けました「家なき子」はこれで一と先づ完結にいたすことになりました。まだあとに後篇がありますが、餘り長くなりすから前篇だけで終へて、またよい折に書かせて戴きます。作者より

かくれんぼ

若山 牧水

まアだだよ  
まアだだよ  
石の蔭にはとかげがゐるし  
椎の木蔭は蜘蛛の巣だらけ

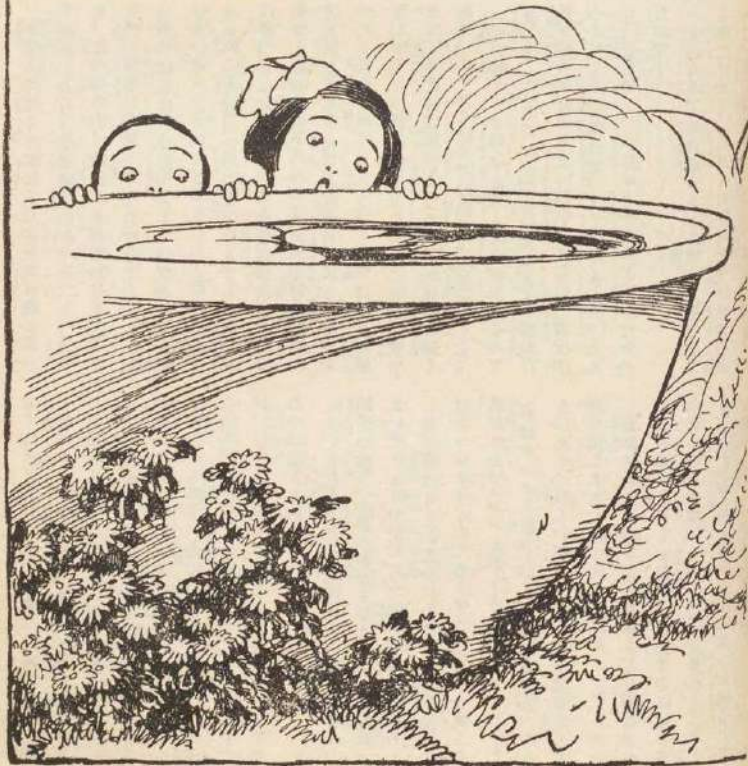


もういゝか  
もういゝか

門の横には車があるし  
堀のこちらは花ばたけ

もういゝか  
もういゝか

まアだだよ  
まアだだよ



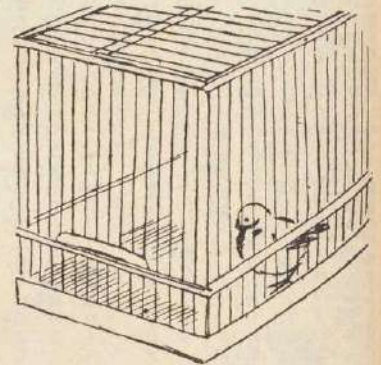
ちんばの雀 (推薦)

土橋 力



春雄はお正月に叔父さんから空気を買った。頂きました。早速裏庭へかつき出して見ると、梅や柿の木に、澤山の雀が面白さうに枝から枝へ飛廻りながら鳴っていました。先づ試しに一番澤山かたまつてゐる處を狙つて一發バツと放して見ました。銃丸はパチンと枝に中つて、雀は皆びつくりして梅の木に移つてしまひました。春雄は仰向きながらそつと梅の木の下行つて、又一發今度こそはと放しました。併し今度は枝にも中らなかつたと見えて何にも音もなく、雀は知らぬ顔をして今度ば二階へ上つて障子をほんの細くあけ、そこから銃先だけ出して又狙ひました。梅の枝がすぐ障子の近く迄のびてゐるので、雀がすぐ目の前をたび歩いてゐます。春雄は胸を躍らせながら又一發放しました。雀はびつくりして皆舞ひ立つてしまひました。あんなに近くでも、春雄が下手なので中らなかつたのです。

こんな風で毎日起きるから寝る迄追ひ廻すもので、三日もたない中に、春雄の家へは、梅の木へも柿の木へも雀がつかつてしまひました。春雄は雀の影がうしろに、たまたま来て、春雄がすぐ恐い物をかつき出すので、今では雀は春雄の影さへ見ればすぐに逃げて行つてしまひます。今日も春雄は二階へ上つて障子のすきから覗いてゐました。雀に見つけられたらおしまひだからです。冬の日が淡くさして障子の蔭で、春雄は一生懸命にのぞいてゐました。が、いくら待つても雀の子一匹来ないので、中に飽きて来ました。と、その時です。チツ／＼と雀の聲がして障子を斜に小鳥の影がとびました。春雄はうまいぞ／＼といひながら急いで狙ひを定めました。雀はうまい工合にのびたすぐ先の枝にヒヨコン／＼とんでゐます。春雄は「今度こそ逃がさぬ」とバツと放しました。おやッ、まあ、雀はコロツと落ちたやありませぬか。しかしほんとは情しい事に、またすぐ起き直つて舞ひ出しました。



かきせたりしながらやつと文書の間に這ひ込んで押へました。見ると可哀さうに片足をアラリと下げてゐます。きつと足を撃つたのです。それが痛くて落ちて来たのでせう。春雄に握られて、痛さと恐さでアル／＼慄へてゐます。『うつた／＼』と春雄は大威張りで皆に見せびらかしました。そしてお婆あさんが、可哀さうだから放しておやりと云はれるのも聞かずに、去年眼白を刺つた籠に押し込んで、お米と水を入れてやりました。雀も初めの中は恐くて籠の隅に慄へてゐましたが、お腹がすいて来ると、ちんばをひきききとんで来てはお米を食べました。よいあんなばいに雀は死にませんでしたけれど、ちんばの足はいつ迄たつても治りませんでした。春雄は珍らしがつて毎日のぞいて見たり、薬を入れてやつたりして飼つてゐましたが、その中にだん／＼飽きて来て、お米や水も二日に一度、三日に一度位しかとりかへてやらなくなりしました。おまけに毎日籠の目から棒を突つこんで、

意気だ。と棒で雀を突いたり、叩いたりしていぢめました。可哀さうな雀は毎日籠の隅つこでちつと眼を閉ぢたまふ今にも死にさうでした。誰か籠の前を通ると恐しさうにちよつと眼をあいて見ますが、すぐあきらめた様にまた眼を閉ぢてしまひます。お婆あさんなぞが、「毎日あんなにいぢめて可哀さうだから逃がしておやり」と幾度云はれるか分らないのに、春雄は些とも云ふ事を聞きませんでした。今迄丸くふくらんでゐた雀はすつかりやせ

なりました。たまたま来て、春雄がすぐ恐い物をかつき出すので、今では雀は春雄の影さへ見ればすぐに逃げて行つてしまひます。今日も春雄は二階へ上つて障子のすきから覗いてゐました。雀に見つけられたらおしまひだからです。冬の日が淡くさして障子の蔭で、春雄は一生懸命にのぞいてゐました。が、いくら待つても雀の子一匹来ないので、中に飽きて来ました。と、その時です。チツ／＼と雀の聲がして障子を斜に小鳥の影がとびました。春雄はうまいぞ／＼といひながら急いで狙ひを定めました。雀はうまい工合にのびたすぐ先の枝にヒヨコン／＼とんでゐます。春雄は「今度こそ逃がさぬ」とバツと放しました。おやッ、まあ、雀はコロツと落ちたやありませぬか。しかしほんとは情しい事に、またすぐ起き直つて舞ひ出しました。



てかけ出しますと、急に身が軽くなってスウと舞ひ上つてしまひました。とう／＼ほんとの雀になつてしまつたのです。

来た雀が来た」と云ひ乍ら奥へとんで行きましたが、すぐに春雄の空氣銃をかつき出して来ました。兄さんがゐないので、誰も時り手がないからです。

「おい、繁、冗談しちやいけない。己だ／＼兄さんだよ。」と云ぼうとしましたが、どうしてもたゞチウ／＼としか云へません。その中に弟はかまはず狙ひました。銃丸がピユツと頬つべたなかすめて通りすぎました。春雄の雀は氣が遠くなつたやうな氣がしました。恐くて恐くて震へながら、急いで逃げ出しました。仕方なしに今度はお勝手の方に行つて見ました。すると母さんが「朝からまあ、春雄はどこへ行つたのだらう。」と云ひ／＼お支度をしてゐられました。

「母さん私はここに居ますよ。」と云つて見ましたが、やはりチウ／＼としか聞えませんが、いくらたつても春雄が歸らないので、お家では大騒ぎを始めました。近所の人達やお巡りさんや、みんな来て探してくれました。しかしとても見つからず管がありません。お母さんやおばあさんはもう泣きさうなお顔をして駈れて居られます。春雄は初めてすまないと云つて泣いて居られました。

やうな氣がしました。

「私はここにゐますよ」と探して居る人達所へ行つても、すぐ追ひ捕はれて誰も見向きもせずにはばり一生懸命に探してゐます。春雄は悲しくなつて来ました。その中にお腹がすいてたまらないやうになりました。それで道に下りて餌を拾つて居りますと、友達の子や、お水や次郎さんが見て「やあ、いへろ／＼、雀」と云つて石を投げつけました。僕だよ／＼と云つてもきいてはくれませんが、姉さんの所へ行つても誰の所へ行つて見向きもしません。雀は泣き／＼毎日お家の周囲を飛でゐました。その中に雪が降るやうになりました。いくら冷くてもあたりはたゞ眞白で休む所さへもありません。お蔵の軒で休んでゐると、いつの間にか弟が降子のすきから銃の先を向けてゐます。雀は驚いてあわて、逃げ出しました。お勝手へ行つて見ると、女中がどなりながらお湯をぶつかけてます。そして食べる物もなく一日中雪の中泣いて暮しました。

その中にお母さんが病氣になりました。そして「春雄、春雄」と呼びながら今にも死にさうになりました。おばあさんがふとおおけに



なつた雀から、驚くやせたお母さんのお顔が見えました。春雄の雀は毎日窓の所へ来て涙を流しておわびしました。すぐそばに居ながら母さんにはそれが少しも分らないのです。で「春雄、春雄」と呼び續けながらとう／＼なくなられてしまひました。

まふし」と云つて泣いて居られました。春雄はまたたきまらなくなつて、「おばあさん、堪忍して下さい。みんな私があなたの方の云ふ事をきかなかつたからです。」と、窓の近くの梅の枝に止つてちつと泣いてゐました。

するとそのとたん、ピユウツと勢よく銃丸がとんで来て、胸に中りました。

春雄はかう云つて籠の蓋をあけました。雀はもう逃げる元氣もありませんでした。春雄が籠をゆすぶると、今日も又いちめに来たとも思つたのでせう。雀は鬼にでもあつたやうあわて、逃げ出しました。フラ／＼と舞ひ上つて行く雀の姿を見送つて、春雄は廣い明るい心になりました。



うなだれでちつと泣いてゐました。その中に葬式が来ました。長い行列の上を春雄は悲しい顔をしてついて行くのでした。人々は皆「春雄も不孝者だ」と云ひあひました。春雄はたまらなくなつて新しいお墓の上で一夜中泣きあかしました。そして明日の朝もう一度お家へ行つて見た時、おばあさんが火燈で、「春雄も可哀さうに。今頃はどこにゐるだらう。母さんも死んでし

「かんに入んておくれ。」

春雄はかう云つて籠の蓋をあけました。雀はもう逃げる元氣もありませんでした。春雄が籠をゆすぶると、今日も又いちめに来たとも思つたのでせう。雀は鬼にでもあつたやうあわて、逃げ出しました。フラ／＼と舞ひ上つて行く雀の姿を見送つて、春雄は廣い明るい心になりました。

春雄の家の周囲の梅の木にも柿の木にも雀が来て、又もとの様に楽しく歌つてくれました。春雄は雀を見る度にあの可哀さうなちんぼの雀の事が思はれてなりません。けれどいくら探しても、あの雀は二度と見つかりませんでした。(をばり)

# 猫の仇討

霜田史光



幸助は貧しい百姓の子でした。生れつき情深く、殊に叔父の家から貰った三毛猫は、まるで眼の中へでも入れたい位に可愛がりました。ですから三毛も幸助によくなつて、夏でも冬でも幸助に抱かれたり脊を撫でられたりすることが何よりの楽しみらしく見えました。

幸助はお寺の和尚さんの所へ手習に行つてゐましたが、家が貧しいので、それも休んで父母の野良仕事を手傳ふことが多くありました。

幸助が和尚さんの所から歸つて来る時や、野良から糠を肩にして歸つて来る時に、唄でも歌つて来ようものなら、三毛はすぐその聲を聞きつけて街道まで迎へに出るのでした。そんな時いつでも幸助は三毛を抱き上げて、

「三毛か、よく迎ひに出してくれたね。」と云つてその脊の美しい毛並を撫でてやるのでした。

こんな風に可愛がるのですから、他から見たら訝しい位です。近所の子供は幸助の歩いてゐるのを見ると、

「あれ、猫のお父さんがやつて来る。」などと云つて笑つたり父の八太郎はまた悪い奴が来た、困つたものだと思ひましたけれども、對手が侍のことですから叮嚀に頭を下けて、

「武藤先生でございますか、お早うございます。今朝は何か御用でも——」と八太郎のいひ切らないうちに破鐘のやうな聲で、

「用があるから来たのだ。お前の所の猫を貰ひに来た。俺は彌持だから猫を喰ふと體の爲めにいゝさうだ。さア、お前の所の三毛猫を呉れろ。」

これを傍で聞いてゐた幸助は、まるで自分の首でも貰ひに來られたかのやうにビクリとしました。

「それは呉れると仰言れば差し上げないこともございませぬが、何しろ家の三毛猫はこの子が大變可愛がつてゐますので、若し貴方様に差し上げてしまつたら、この子がどんなに喚くことか知れませぬ。どうぞこの事はかりはこの子に免じましてお赦しを願ひたく存じます。」

と幸助の父は頭を疊に擦りつけるやうにして云ひました。

「己はたゞ呉れると云ふのぢやない。この猫が己れの家へ來て悪いことをしたから呉れると云ふんだ。本當なら貴様達を

しました。けれども幸助はそんなことは少しも氣にせず、相變らず三毛や三毛やと云つて可愛がつてゐました。

所が、幸助の家の隣に先頃から家を構へて村の若い者に劍術を教へてゐる一人の浪人者の侍がありました。この侍は武藤無理之助と云つて、噂によると西の國のさる大名の家來でしたが、何か悪いことがあつて追ひ出されてしまつたとのことでした。

無理之助は幸助とは違つて生物を殺すことが何より好きだったので、ですから顔付を見たゞけでも悪者のやうな、何處か凄い所がありました。その上大酒飲みで酔ふとよく人に難題を吹き掛けては困らすのが癖でした。無理之助とは如何にもよく氣質に似合つた名前だと、誰もいふ位でした。

無理之助はいつも家の中へ酒樽を据ゑ込んで、毎日毎晩暇さへあれば大酒を飲んでゐました。

或朝のこと、無理之助は起き抜けに幸助の家へやつて來ました。少しお酒の匂ひがして寝巻姿に大小の脇差を差し込んで威張つて這入つて來ました。

「八太郎はゐるか。」といきなり大聲で喚鳴りました。幸助の

斬り殺して、もやらなければ腹の蟲が納まらないのだけれども、今日は猫さへ呉れ、ば勘辨してやる、さつさと出せ。」

「武藤先生、家の三毛がどんな悪いことをしたのですか。」

「幸助は黙つても居られなくなつて、侍にかう訊ねました。」

「うむ、お前が幸助だな。お前の可愛がつてゐる三毛猫奴が、昨夜己の家へ来て、酒樽の呑口を抜いてしまつたのぢや。その爲めに一杯はひつてゐた酒が臺所中に流れ出してしまつた。悪い畜生だ。己れが連れて行つて殺して喰つてしまふからさう思ふがよい。」と申しました。幸助は三毛がそんな悪戯をしようとはどうしても思へませんでしたけれども、確かにさうだと云ふのをどうすることも出来ませんでした。

「どうだ、呉れるか。呉れないと云へば、此方にも覺悟があるぞ。」

侍はさう云つて、呉れないと云へば斬つてしまふと云はぬばかりに身構へました。幸助の父は、

「幸助悪戯をしたと云ふのだから差し上げることにするがよい。」と申しましたので、幸助も止むなく、

「では三毛は差上げます。然し私のお願ひも聞いて下さい。」

るやうにして風は寒くあたります。幸助は三毛を懐中の中へ入れて温めてやり、手を入れて脊を撫でてやりながら、  
「三毛や、お前は本當に武藤先生の家の酒樽の呑口を抜いたのかえ。」と獨り言とも問ひかひるともつかずに申しました。



すると猫はニヤーと泣聲を立てます。

「お前が悪戯をしたのかどうかわからないけれども、あの悪戯者が来てお前を殺して喰べてしまふと云つて來たのだよ。」  
幸助がかう云ふと、猫はまたニヤーと泣聲を立てました。

それは今日一日だけ家へ置いて頂きたいのでございます。無理之助はそれを聞いて、然も幸助が涙をほろ／＼こぼしながら頭を下けてゐるのを見て可哀さうに思つたのか、  
「それでは今日一日だけは預けて置く。明朝になつたら早速連れてくるがよい。もし約束を違へるとひどい目に遭はせるぞ。」と云ひ残してすた／＼と行つてしまひました。

幸助は飛んでもないことになつたと思つて落膽してしまひました。本當に三毛がそんな悪戯をしたのならうかと幸助は幾度も怪しみました。然も酒樽の呑口を抜くなんて猫に出来ることだらうかと思ひましたが、いつもの無理之助のことで

すから理窟を云へばどんな目に遭ふかも知れないのでそれも出来ませんでした。然し、あんな悪侍に喰はれてしまふと云ふことは如何にも残念で堪りませんでしたので、いつその事

川へ流してしまはうと思ひました。可愛がつて育て、やつた自分の手で、自分が情をこめて流してやつたら、猫もあの悪侍に喰はれてしまふよりはましであらう、と決心した幸助

は父母にも知らせずにそつと三毛を抱いて外へ出ました。外は寒い風が吹いてゐました。三毛の美しい毛並を渡して

「だが私はお前をあの悪侍に殺させるのに忍びないのだよ。それかと云つてお前を渡さないと云へばどんな目に遭されるかも知れやしない。仕方がないからお前は死んでおくれ。私は可哀さうだけれどもお前を川に流すから、どうかあきらめておくれ。決して私を恨んでくれるなよ。」

幸助はよく／＼三毛に云ひ聞かせて藁に包み

兩端を出られないやうに縄で縛つて、それを抱へて荒川の岸に行きました。

三毛はもうすつかり覺悟をきめたものか、泣聲一つ立てません。

川岸の崖の上に立つた幸助は、流石に投げ込み兼ねて、ほろ／＼と涙を流したまゝ暫らくは立つてゐました。崖の下には荒川の流が急ぐことなくゆる／＼と下へ／＼と流れてゆきま

す。それを見ながら幸助の心は、張り裂けるやうだつたでせう。

然し、いつまで躊躇つてゐたとして仕方がありませんので、幸助は思ひ切つてそれを投げ込みました。藁に包まれた生き

た猫が、水の中へドブーン！と落ち込んで行つた時、幸助はどんなに可哀さうに思ひ、自分の心もつらかつたこととせう。蘆包の三毛猫は一度沈んでまた浮上つて、その儘川下の方へふわり／＼と流れてゆきました。そしてそれから三町ばかり離れた川岸にある豆腐屋の側あたりまで行つた時はもうその蘆包は見えなくなつてしまひました。それで、幸助は悲しい顔をしてほんやりと家に歸つてきました。

その事を父母の前で幸助が話した時、父の八太郎は大層心配いたしました。それは勝手に川へ流したことを無理之助は怒つて、何をすることも知れないと思つたからです。

その晩のこと、幸助は淋しくて悲しくて堪りませんでしたので、床へ入つてもどうしても眠られせん。今頃三毛は水に溺れて死んでしまつたら、かと思ふと、なんだか、自分のしたことが無慈悲であつたやうに思はれてなりませんでした。

その時ふと耳に入つたのは猫の泣聲です。それは如何にも悲しさうな、そして強い泣聲です。

「おや。」と云つて幸助ははね起きました。けれども猫らしい

聲が起きてその事を父母に話した時、父は、

「それでは矢張り武藤先生の所へ連れて行くより外はあるまい。」と申しましたので、幸助は、

「ではお父さんが連れて行つて下さい。私は可哀さうで歸つ



三回  
姿は何處にも見えません。あんまり三毛のことを考へてゐたので、氣の爲であんな聲が聞えたのか知らと思つて、幸助はまた床の中へ入りよした。するとまた泣聲が聞えましたのでまたはね起きました。今度はどうもそれが三毛の聲のやうに思はれたのです。

幸助はやつとこのこと行燈に火を入れて部屋中を隅から隅まで探しましたが、矢張りそれらしい姿は見えません。「はてな、儘に聞えたやうに思つたがな。」と腕を組んで考へてゐますと、また泣聲が聞えました。それは儘に家の外らしいので、幸助はすぐ襦袢戸口を開けて見ました。するとすぐに飛んで来て幸助の足に纏つたものがありました。驚いて見ればそれは晝間確かに川の中へ投げ込んだ三毛猫だつたのです。三毛は自分が投げ込まれたことも恨まずに、幸助の足の廻りに纏ひついては泣聲を立てました。

「三毛や、お前はとうして歸つて來られたのだえ。」と云つた切り、追の幸助も聲がでませんでした。

假令捨てたとは云ひながら歸つて來られて見れば可愛いので、幸助はその夜は三毛を抱いて寝ました。

て來られないといけませんから。」と申しました。

幸助の父はやがて三毛猫をカバン袋へ入れて、無理之助の家へ持つて行きました。

「武藤先生、お約束の通り猫を持つて參りました。」と云つてそれを出した時無理之助は悪黨面を崩してにこ／＼笑つて、「うむ、よく持つて來た。よし／＼。これを食ふと爛の藥になると云ふのでな、は、は、は。」と笑ひました。八太郎は何んがか馬鹿にされたやうな氣がしてその儘家に歸りました。

幸助はその話を聞いて、それでは矢張り三毛が悪戯をしたと云ふのは嘘だつたのだらう、屹度あれは猫が欲しかつたのであんなことを云つて來たのだらうと思ひました。そして可愛い猫をとられてしまつたかと思ふと、残念でなりませんでした。

「いつかこの敵はとつてやりたい。」といふ考へは、幸助の頭に深く／＼刻みつけられました。

その夕方幸助は心配でありませんでしたので、そつと忍んで無理之助の家へ行つて見ました。そして垣根の間から覗いて見ますと、無理之助は三人の門弟を對手に酒盛をしてゐま



した。その前の皿に盛つてあるのは確かに三毛の肉らしく思はれました。幸助は、

「あ、もう食はれてゐるのか。」と思つて落膽いたしました。そしてふと気が付いて見ると、軒下に吊してあるのは三毛の皮らしく見えました。

「えい、畜生奴！ よくも可愛い三毛を嗜して食つてしまつたな。」と云つて、幸助は暗い所で拳骨を振り上げて口惜しがりました。然し、對手は大人のことであるし、その上劍術の上手な侍のことですから、幸助などが飛び出して行つて向つたとて、とても勝てる見込みはありませんので、残念ながらその儘家へ歸りました。

「さうだ己はこれから劍術を習はう、そして無理之助を打ち据ゑて三毛の恨を晴らしてやらなければならぬ。」

さう決心した幸助は、早速父母にその事を話して、やつと許して貰ひ、三年の間劍術の修行に出掛けました。

幸助は江戸へ出て来て立派な先生の教へを受けましたので三年たつた時には立派な腕前になることが出来ました。

「これならば無理之助と試合をしても負けることはあるま

い。」と思つたので、三年目に幸助は自分の生れた村へ歸つて来ました。

幸助が大人のやうに丈も大きくなり立派な様子になつて歸つて来たのを見て、父母は大層喜びました。

二三日家で過した幸助は、或日無理之助の家へ行つて、劍術の試合を申し込みました。

「うむ、誰かと思つたらお前は幸助ぢやないか、何處で劍術を覚えて来た。それにしてもまだ子供のくせに、己に試合を申し込むとは生意氣だ。よし、それならばうんと打ち込んで懲しめてやる。」と云つて、無理之助は竹刀をとつて道場へ出ました。

幸助は、

「武藤先生、只では面白くありません。勝負に賭をいたしませう。私が負けましたら私の首を差し上げます。先生が負けましたら先生の首を私に下さい。」と幸助はキツと心を決めて云ひました。

「宜しい、如何にも承知した。だが氣の毒だがお前の首は三毛猫同様己が貰ふぞ。」



無理之助はかう云つて新助に打つてかゝりました。けれど三年間一心こめて習つた幸助の腕前はすばらしいものでした。忽ちの間に無理之助は打ち負かされてしまひました。その時幸助は、

「あなたはよくも私を嗜して三毛猫を取つて食ひましたね。今日はその敵打に來たのです。然し、若しもあなたが両手をついて私に謝るならば赦して上げませう。」

すると柄に似合はず弱態だつた無理之助は、たうとう子供の幸助の前へ手をついて、「己が悪かつた。赦してくれ。」と謝罪しました。(をばり)

# 不思議な塔

林 信 一



或る國に、それはそれは美しい賢い王女が  
ありました。母様と二人で、大ぜいの家來に  
かしづかれながら何不自由なく暮して居られ  
ました。大きなお城の立派なお部屋で、王女  
は毎日母様から、時日お経のお話しや、めで  
つたのに、此頃は部屋に閉ぢ籠つて、ちつと  
庭の方を眺めながら時々重い吐息をついて居  
られました。王女のお部屋の前からは一面に  
廣いお庭が見渡されました。お庭のすつとは  
づれの方に、先祖が建てられたといふ古い塔  
がありました。王女は寂しくなるとちつとこ  
の古い塔に見入りました。

らしいお話しを聞かされながら、本當に幸福  
な見る目も羨ましい程の暮しをして居られま  
した。けれども人間の暮しといふものは外側  
だけでは解らないものです。この幸福さうな  
王女の胸の中にも、いつといふ事なしに、な  
やましい寂しさがあつたのです。どうしたの  
か母をとるにつれて、王女は次第に此小庭に  
來遊の話しを聞いてから餘計に不思議に思は  
れて來たのです。或日王女は、とうとう母様  
にその事を訊ねました。

「いゝえ、別段悪くは御座いませぬ。」  
『ではどうしてそんなに元気がなくなつたの  
でせう。何か心配の事でもあるのでありま  
せんか。』  
『いゝえ別に御座いませぬ。』  
『ではどうしたのです。』  
王女は黙つて母様の顔を見つめて居られる  
だけでした。  
王女はあれ程お庭を散歩するのがお好きだ  
思ひましたのに、母様は何も話して下さらな  
いので、がっかりしてしまひました。

『あの古塔の中には何があるのだらう。』  
王女は時々こんな事を考へました。是非一  
處あの古い塔に昇つて見たいと思ひました。  
けれども何故か、あの古い塔に昇る事は堅く  
禁じられておました。ですから多くの家來も、  
この古い塔に昇る事が出来なかつたのでし  
た。王女はある時、家來達がこんな事を話し  
合つてゐるのを聞いた事がありました。

『わたしは長い間この御殿にゐるのだが、いま  
だにあの古い塔に昇つて見たことがない。わ  
しが不思議に思ふのは、何故あの古い塔に昇  
る事が禁じられてゐるのか、何があの中にあ  
るのか不思議でならないのだ。』  
『わしもいつも不思議に思つてゐるのだ。』  
家來達はこんな話しをしてゐたのです。王  
女も前から不思議に思つてゐたので、この家  
來達の話しを聞いてから餘計に不思議に思は  
れて來たのです。或日王女は、とうとう母様  
にその事を訊ねました。

『母様、わたし不思議で、不思議でならない  
事が御座いますが、教へて下さいますか?』  
『何です。不思議な事つて?』  
『わたしは前から不思議で、不思議でならな  
い事があるのです。』  
『話して御覽なさい。わたしに解る事なら聞  
かせて上げるから。』  
『あの、お庭のはづれにある古い塔の中には  
どうして入る事が出来ないのですか?』  
『古い塔?』  
母様はかう叫んで、突然眞青な顔をして、  
恐ろしい眼で王女の顔を御覽になりました。

『母さま、父様は何故家出をなすつたのでせ  
ました。』  
三九

うか、私や、母様や、この立派なお城を捨てて……」

『それにはいろ／＼な事があるのです。それはあなたが大きくなりさへすれば、ひとりでも解る事なのです。あなたは此頃どうしてそんな事ばかり考へてゐるのです。もつと小供らしくしてゐるやうにしなければなりません。』

母様はかう云つて、何故か眞青な顔なさいました。王女は不思議で、不思議でなりませんでした。



した。不思議な事には、その灯火らしい影が、その時に消えてしまひました。

翌日になつて王女は、朝目を醒すと、一番先に母様の部屋へ飛んでゆきました。

『母さま、私昨夜不思議なものを見ました。』

『何を見たのです。』

母様は不安らしく眼を輝かせながら、早口にかうおつしやいました。

『昨夜、私はどうしたのか少しもれむれないので遅くまで起きてゐました。餘り寂しいのでお庭を見てゐると、ふと古塔の上の窓が、ぼつとまるで灯火がついてゐるやうに見えたのです。』

『灯火が。それはあなたの見あやまりです。人も住んでゐないあの塔に灯火がついてゐる譯はありません。』

母様はかう言つて、恐ろしい眼で王女の顔を御覧になりました。

『母さま、けれどそれは本當なのです。』

『そんな事はありません。』

母様はかう言つて、何か用事でもあるらしく部屋を出てゆかれました。仕方がありませんので、王女はすこ／＼と自分の部屋に歸つて來ました。王女は机の前に坐りながら、又してもかう獨語をいひました。

『矢張り私が考へてゐた通りなのだ。お父さまの家出と、あの古い塔とばかりと深い關係があるのだ。』

王女は重い吐息をつきました。父のない寂しさがしん／＼と身に迫つて來るやうな気がしました。

『私は何も不仕合な事は無いが、唯一つ父縁がないといふ事だけは、どんなに考へて見ても不幸な事だ。それに私の外にはこの國を繼ぐべき者は唯の一人もないのだ。けれども私は悲しい事には女だ。』

いろいろ考へた末、こゝまで考へて來ると、王女はどうしてよいのか解らないやうな深い悲しみを感ぜました。

或る朝、王女は久し振りでお庭を散歩しました。部屋の中に坐つてゐると、無暗にいろんな事が考へられて仕方がないので、ふと庭を散歩して見る氣になつたのでした。

廣い大きな庭には、いろんな草花が、美しく咲きみだれて、四邊には何ともいへない高い香りがみちみちてゐました。

せんでした。母様は何故あんなにおつしやるのだらう、私に何故すつかり話して下さらないのだらう。王女はかう思つて、いつまでも子供あつかひにされる母様を恨めしく思ひました。

三

或る夜、それは非常に月の明るい夜更けでした。王女はいろ／＼な事が無暗に考へられてどうしても眠ることが出来ないで、庭に向つた窓の障子をあげ放して、何といふ事なみに古い塔の方を眺めてゐました。青白い月の光が、樹立や、御殿の屋根に流れて、遠くに見える古い塔は、黒々と月の光の下に響えてゐました。王女は寂しさに、ちつと塔の方を眺めてゐました。すると塔の一番上の窓にその時、ふと灯火らしいものがついてゐるのが見えました。王女は思はず、

『おや、……』と小さな叫び聲をあげました。王女はもしかすると何かのあやまりではないかと思つて、再びその窓を見ました。けれどもたしかに其處には灯火らしい影が見えて、その窓だけが、暗い闇の中にはつきりと見えま

『まあ、いふ訳だ。知事殿を散歩すると頭が軽くなつたやうな気がする。』

大きな池の傍の甕子にもたれて、王女はかう言つて、ちつと池の水に眺め入りました。

池の中には、一面に水草の花が咲いて、金魚が勢よく泳ぎまはつてゐました。

その時突然後の方から軽い足音がしたので、王女はふと後を振り返りました。其處には、御殿で一番年をとつた家來が恭しく頭をさげてゐました。

『おゝあなたか、誰かと思つた。』

『お驚かせて申し譯ありません。』

『いゝえ少しもかまひません。餘り氣がくさくさするので、今こゝに出て來たのです。』

『左様で御座いますか、御氣分が御悪いので御座いますか？』

『少し／＼さくさする事があるので……』

『とおつしやいますか？』

年とつた家來がかう言つて、不思議さうに王女の顔を眺めました。

『少し考へ事があるのです。あなたに少し訊きたい事があるのだが、聞かせてくれますか？』



「ハイ、私の存じてゐます事なら、何んでも申し上げます。」  
 「私前が不思議で、不思議でならない事があるのです。と云ふのは、父様の突然の家の事に就いてなのです。父様は本當に家出をなすつたのですか？」

「ハイ、さやうで御座います。少しわけが御座りになつて、突然家出なすつたので御座います。けれども私達にはどうして家出をなさいましたか、委しくは存じないので御座います。」  
 「私は父様はとも家出をなすつたものではないうやうな気がするので、」  
 「とおつしやいますと……」  
 「私ばかりはし事は解らないけれども、どうもそんな気がされてならないのです。それに不思議なのは、あの古い塔です。あなたは知つてゐるでせう。あの塔に昇る事は、どうして禁じられてゐるのか……」  
 「私にもそれは解りませぬ。」

「それは父様の家出前が禁じられてゐたのですか？」  
 「確かさやうに存じてゐます。」  
 「不思議なのはあの塔です。この間の夜私はどうしても眠れないので、部屋の窓をあけて、見るともなくあの塔を見つめてゐたので、」

四

その夜も、王女は眠れないので、夜更けてから、窓をあけて、古い塔の方を眺めてゐました。王女は塔の事が氣になつて、なつて仕方がありませんでした。月のない夜は、ひっそりとして、暗い闇の中に、塔の影が、まるで魔物の様に、あやしげに舞つてゐました。けれども今夜は灯火の影も何も見えませんでした。王女はもしかすると、こんどは何にか塔に驚事もあるやうな気がされて、いつまでも、いつまでも眺め入つてゐました。その

時、突然闇の空の方から、大聲で何事かを叫んでゐる人の聲らしいものが聞えて來ました。王女はギョッとして思はず、塔の方を眺めました。すると何といふ不思議な事です。塔の一番高い窓は開かれて、明るい灯火が、輝いてゐるのでした。叫ぶやうな人聲は、其處から聞えて來るのでした。やがて窓の處に人影らしいものが現はれて、地上を見下し乍らしきりに大聲で何か叫び出しました。けれどもそれは何を言つてゐるのかわかりませんでした。王女はあわただしく部屋を飛び出しました。そして世君の部屋へ飛びこむと同時に、

「本當ですと……」  
 「母様と、王女は、あわただしく廊に出て見ました。そして高い塔を仰ぎました。けれども灯火の影も消えて、どこからも人聲らしいものは聞えて來ませんでした。」  
 「まあ不思議なこと、今まで人影が見えたのに……」  
 「きつとあなたの見違ひですよ。」  
 「母さま、それは本當なのです。」  
 「王女は仕方がありませんので自分の部屋へ歸つて來ました。やがて疲れが出てうとうと眠つてしまひました。」

五

古い塔の中には、五年近く王様が囚へられたやうに押し籠められてゐました。一寸した熱病が原因で、王様はたうとう發狂されてしまつたのです。刀を持つて奥方を追ひまはしたり、何の罪もない家來を殺したりするので、奥方は里方の父君と相談の上この古い塔の一番高い部屋に押し籠めてしまつたのです。夜人が寝静まつてから奥方は、そつとこの塔へ食物や、水を運んでをられたのでした。奥方

「母さま、大聲……」  
 と叫びながら眞青になつてそこに立ちました。眠つてをられる母様は、驚いて起上られました。  
 「あの大聲です。あの塔の上に人がゐて、何か大聲で叫んでゐるのです。」  
 「人が？」  
 「母様はかう言つて、急に顔を眞青にするはしなから立ち上りました。」  
 「お前それは本當ですか？」

四二

す。すると不思議な事には、あの塔の一番高い窓の處に灯火の影らしいものが見えたのです。そして暫くすると、その灯火らしい影は消えてしまつたのです。」

「ほう、灯火が見えましたが。何んでもあの塔の中にはいるんな怪物が住つてゐると申しますから、きつと怪物の仕業かと存ぜられます。それにしても不思議な事で御座います。」  
 「年老いた家來は、本當に驚いたらしくかう言つて、しみじみと王女の顔を眺め入りました。」

はその事に就いて、多くの家來はいふに及ばず、王女にも全く秘密にして居られました。古い塔の古い部屋には、古いベットと、古い卓子とが置かれて、幾年も鬚髯を刺つた事のない王様の顔はまるで鬼のやうに物凄く見えました。青ざめた顔、血走つた眼、長く延びた髪、まるで王様の顔はこの世の人間とは思はれないやうな傷ましい顔容になつてゐました。

一日中刀を持つて、部屋のベットを切りつたり、大聲に叫びながら部屋中を躍り歩いたり、王女の名を悲しうに呼んだりして、暮して居りました。けれども此頃は、いくらかおとなしくなつて、ベットにもたれながら、シクシク泣いて居られるやうな日が多くなりました。どんなにあはれる時でも、奥方だけはおとなしくして居られました。

時々奥方に、  
 「王女は生きてゐるか、定めし大きくなつただらう。一度逢はせてくれないか。わしも早く御殿に歸りたい。わしは病人ではないのだ。どうかわしをにつれて歸つてくれ。」などと仰る事もありました。



六

「或夜、奥方は王女を御自分の部屋にお呼びになりました。そしてたうとう古い塔の父君の事を王女にお話しになりました。」

「今まで、悪い事とは知りながら、あなたを悲しませたくないうために隠して来たが、もう大分しつかりして来たから何も彼も話してしまひます。實は父君が家出なすつたといふのは嘘なのです。あなたが

四四

「これまで語つた時、奥方はさめざめと聲をふるはせながら泣き入りました。偷りの事に王女はぼんやりしてしまひました。『何も彼も私が想像してゐる通りだつたのだ。矢張りさうだつたのか。』」

「王女はかと思つて、悲しうに母様の姿に見入りました。王女の眼から熱い涙がとめどもなく流れ落ちました。」

「あゝ何んて不幸な人間だらう。」

「王女はかう獨語のやうにいへれました。そして延び上るやうにして塔の方を眺め入りました。けれども父君はどうしてゐられるのか、窓には灯火の光さへ見えませんでした。月もない空には、星が細かく輝いて、古い塔の姿が、思ひなしかさびしく思ひ憫んでゐるやうに見えました。」

「母さま、私ばもう一生父様にはお目にかゝれないのですか？」

「そんな事はないでせう。御病氣さへよくおなりましたら……」

「私一度でもいふから父様にお逢ひしたい。」

「王女はかう言つて、泣き出してしまひました。(なほり)」

「いゝえ、貴下は御病人なのです。御病氣さへよくおなりになれば、いつでも喜んでおつれ申します。」

「不思議がつてゐたあの古塔に、今でもいつしやるのです。けれども、父様は五年前から、發狂なすつて、いまだにうは言ばかり言つてゐられるのです。刀を持つて家來を追ひまはしたりなされるので、仕方なくあの塔に押し籠めてしまつたので、時々、あなたの事を心配してをられるし、あなたもお父さまに逢ひたからうが、そんな譯だからあきらめておくれ。」

病氣のをちさん(幼年詩)

東京府豊多摩郡戸塚校尋四

新津眞佐枝

秋(幼年詩)

東京市 草區練成校尋五

關好一



じふしまつのかごを庭になけたをちさん  
なう病むんをにけてから  
どうして居るだら

秋が来た  
僕は何となく  
秋が好きだ  
のんびりとして  
鈴蟲や松蟲の  
なくのをきくのが  
好きだ

# 帆ほい黒くろか帆ほい白しろ

## 島孤島中



(一)

寒い淋しい冬が過ぎて、春の彼岸が近づいて来ると、全市の空気が何となくそははして、逢ふ人々の顔に悲みの雲がかつて来るのでした。

それはこのアテネの國王の子テセウスが

と出て来ることは出来ません。その上そこには牡牛の頭と人間の鬣と獅子の齒をもつた怖しい怪物が閉籠めてあります。この國から送られた少年少女は、そこへ投込まれて、みんなこの怪物の餌食になるのです。その貢物を受け取りにミノス王の使が来る時が、もう近づいたのです。私どもはまたあの黒い帆を張つた船が、十四人の子供をのせて、この港を出て行くのを涙の目で見送らなければならないのです。」

かういつて、その人は悲しさうにちつと地面を見つめて、黙つて行つてしまひました。

春の彼岸が来ると、果してミノス大王の使者をのせた船が港へ着きました。アテネの市では、どこへ行つても、女や子供の泣き叫ぶ聲が聞かれました。王子はこの有様を見ると、腹のうちでかう誓ひました。

「この怖しい災難から國民を救ひ出さなくてはならない。若し救へなかつたら、自分も死ぬばかりだ！」

かう思つて、王子は父の前へ進みました。

「わたくしをあの少年や少女と同じ船で、島へ遣つて下さい。」

王宮へ来て、父の王と親子の名乗をした最初の年でした。王子は不思議に思つて、ある日市の人に向つて、その理由を尋ねると、その人は深い嘆息をして、かう答へました。

「もうクレテの島のミノス大王から貢物の使の来る時が近づいたのです。その譯を申しますと、先年ミノス王子が、この國へ渡つて、この國の勇士に競技を申込んで、あつぱれ武勇の名を顯したことがありましたが、其時王子は、その頃この國を荒らしてをりました牡牛を退治しようとして、悲愴な最期を遂げられました。ミノス大王は、王子の死んだのは、アテネ人が王子の武勇を嫉んで、わざと殺したに違ひないと思つて、その仇を報ひるために、大艦隊を率ゐてこの國へ攻め寄せました。その時あなたのお父さまの王は、ミノス大王の言ふ通りになつて、一つの約束をなさいました。それは毎年七人の少年と七人の少女を、貢物としてクレテの島へ送るといふのです。クレテの島には、ラピリンスといふ迷宮があつて、一度その中へ入つた者は、二度

と王子は王の前へせつて願ひました。「わたくしはその怪物を退治して、この國の人々を救はなければなりません。」

「お前はやれない！」と王は顔色をかへていひました。「お前はわしの光だ。わしの亡い後に、この國民をたのむのはお前ばかりだ。お前はあんなところへ行つて、あの少年や少女等と同じやうな淺ましい死にざまをしてはならない。ミノス王はあの子供らを怖しい迷宮の中へ投げこむのだ。今まであの迷宮へ入つたもので、無事に出来たものは一人もない。あすこには數限りのない道が蜘蛛の手のやうに洞から洞へ通じてゐて、造つた人でさへ出口が見つからなかつたといふ話だ。その蜘蛛の手になつた道に迷ひ込んで行くうちに、人の肉を餌食にする怪物にあつて、皆な食はれてしまふのだ。」かう言つて王は悲しさうに王子の顔を見て深い嘆息をつきました。

聞かうちに王子の顔は眞赤になり、耳がはてり、胸の動悸が昂まつて來ました。暫くの間は、物も言はずに立つてゐましたが、最後に口を開いてかう叫びました。

「それですからなほのこと行かすにはゐられません。わたくしはどうしても一しよに行つて、その憎らしい獸類を退治し

て来ます。わたくしは、これまじあらゆる悪人や怪物を殺して、この國を救つたではありませんか？ その怪物だつて同じことです。ミノス大王にしても、若し強つてわたくしの邪魔をするやうでしたら、同じ道へ向けてやるばかりです。」

「けれどもお前は どうしてあの怪物を殺すつもりか？」と王は心配さうに尋ねました。

「武器も持たず、鎧も著ずに、ほかの子供らと同じやうに、裸體で、無手で、怪物の前へ投げこまなければならないのだが。」

「その洞穴にだつて石ぐらゐはあるでせう。」と王子は平氣で答へました。「若し石がないとしても、わたくしには拳もあれば齒もあります。」

王はどうかして王子に思ひとませようと思つて、なほいろいろに説得しました。

しまひには王子の膝へ縋りついて、涙を流して引留めても見ましたが、王子の決心はどうしても動かなくつたので、王も泣く泣くその願ひを許しました。

「たゞ一つその眼に結束をしてもらひたいことがある。」と王ながめました。

「もし、あなたは自分の行くところを知つてゐますか？」

「知つてゐる。さうわたしを、黒い帆の船へ連れて行つて下さい。」

そこで、王子テセウスは七人の少年と七人の少女の眞先に立つて、港の方へ下つて行きました。その後からは少年や少女の親兄弟が、泣聲を立て、ゾロ／＼と續きました。



は王子の顔をちつと見て言ひました。「若し無事に歸れたら――そんなことは萬に一つもむづかしいが――歸りには、黒い帆をおろして、その代りに白い帆をあげて、お前の無事であつたことが、遠方から分るやうにしてもらひたい。わしは今日から毎日この崖の上へ出て、海の方を眺めてゐるから。」

「かしこまりました。」と王子は元氣よく答へました。「わたくしはきつと白い帆を張つて歸つてまいります。」

王子テセウスは父の前を退いて、元氣よく市場の方へ下つて行きました。そこでは市中の人が鬨を引いて、船へ乗せてやる少年と少女を選んではる側に、ミノス王の使者はいかめしく立つてゐました。

鬨の當るたびに、大勢の人々が泣いたり、叫んだりしてゐます。今恰度その群衆の中へ、大股に歩み寄つた王子は、大聲をあげてかう言ひました。

「こゝに鬨のいゝよい少年が一人あるぞ。わたしをその七人の中へ入れてくれ！」

かう聞いて、ミノス王の使者は、びつくりして王子の顔をその邊々で王子は折々後をふりかへつて、人々にかう囁きました。

「力を落すには及ばない。どんな怪物だつて死ぬ時がある。萬事わたしの胸にあるから、安心して待つてゐなさい！」

かう言はれて、人々も幾分か心丈夫になりましたが、それでも子供らが船へ乗せられた時には、みんながわつと聲を立て、泣きました。そして黒い帆を張つた船が、クレテの島を指して靜かな波の上をすべつて行く姿を見送つた時には、海のあらゆる島々から、人々の泣き聲が一度に起つて、天も海も鳴り響くばかりでした。

(二)

七人の少年と七人の少女を乗せた船は、とう／＼クレテの島に着いて、ミノス大王の王宮へ連れて行かれました。ミノス大王は、神様のゼウスから法律を授けられたと傳へられるほどの賢明な王で一代の間にエーゲ海の島々を残らず征服し

て、威勢を海上に振ひ、その港には幾百艘の船が、海の鳥のやうに群がってをりました。

大王は、その時、大理石の圓柱のつらりと列んだ王宮の廣間の中で、黄金の玉座にすわつてをりました。そしてその周圍には、喋舌つたり、動いたりする不思議な影像が、立並んでをりました。大王のそばには、美しい王女のアリアドネが坐つてゐましたが、アテネから来たこの可憐な少年少女の姿を見ると、王女はもう可哀想で可哀想でたまらなくなりました。そのうちにも王子テセウスの若い、凛々しい姿は、一同の目を引かずにはゐませんでした。

大王は自分の前へ並んだ少年少女の姿を見渡した後、家來に向つて、いつもの通りみんなを牢屋へ入れておいて、夜が明けたら舳々に迷宮へ迫込んで、怪物の餌食にするやうに命令しました。

その時王子テセウスは、一歩進んで、大王に向つて叫び出しました。

「大王に一つのお願ひがあります。わたくしを一番さきに怪物の前へ行かせて下さい。わたくしはさうしたいばかりに、



の命を向いてかう命じました。この狂人をあつちへ連れて行け。」

そこで王子テセウスはほかの少年少女と一しよに、王の前を退つて、牢屋へ引立てられて行きました。

併しテセウスの男らしい言葉は、その時父のそばにゐた王女アリアドネの柔かな胸に、深くも刻みこまれたのでした。「あゝ、いふ人を怪物

自分から志願して、やつて来たのですから。」  
「お前は誰か？」と大王はテセウスの顔を見て尋ねました。  
「わたくしはあなたが誰よりも憎んでゐる、アテネの子です。」と王子は臆する色もなく答へました。「そしてこの問題をかたづけるために来たのです。」

この答を聞くと、聰明な大王は、すぐに「この青年は自分の命を棄て、父の罪を贖はうといふのだな！」と、思ひました。

ミノス王はちつとテセウスの顔を眺めながら穩かにかう言ひました。

「このまゝお歸りなさい。お前のやうな勇士を殺すのは、わしの本意でない。」

「いゝえ、歸りません。」と王子はきつぱりと答へました。「わたくしは怪物を見ないうちは、決して歸るまいと誓つて来たのですから。」

この言葉を聞くと、大王は急に顔色をかへて、自分の好意を無にしたのに腹を立てながら、荒々しく叫びました。

「見なければ、勝手に見て行きなさい！」と言つたが、家來の餌食にするといふのは人間の恥辱だ！」

かう思つて、王女はその晩をそつと牢屋に忍んで行きました。

「あなたはどうぞ船へ乗つて歸つて下さい！」と王女は王子に向つて言ひました。「あなたのお友達も一しよにつれて、すぐにごゝをお逃げなさい。あとはわたくしがよいやうに取計らひますから。」

かう言はれて、王子は少時無言で立つてゐましたが、

「いゝえ、それは出来ません。」と王子はきつぱりと答へました。「わたくしはどうしても怪物を殺して、子供らの仇を報ひなくてはならないのです。」

「そんならあなたはあの迷宮の怪物を殺すつもりなのですか？」と王女は驚いて王子の顔を見ました。「全體まあどうして殺すおつもりです？」

「どうして殺すといふことは考へてもゐませんし、又考へる必要もありません。」と王子が答へました。「どんなに強くても殺せないことはないでせう。」

「けれども怪物を殺したとしても、どうしてもあの迷宮を出るお考へです？」と、王女は尋ねました。



「それも考へてはをりません、又考へる必要もありません。」と王子が答へました。「どんな不思議な道でも、出られないといふことはないでせう。」

王女はこの大膽な決心を聞いて、いよくこの王子が慕はしくなりました。

「あなたは怖ろしい方です。あなたの御決心をうかつた上は、だまつて見てをる譯にはまりません。」と王女は決心の色を見せて、懐から一振の劔と一つの絛毬を出しました。

「こゝに劔と絛毬があります。この劔であの怪物をお殺しなさい。そして歸りには、この絛毬をたくつて出ていらつしやい！ たゞ一つわたくしに約束して下さい。若しあなたが無事に出て来られたら、わたくしもギリシヤへ連れて行くといふ堅い約束を。——わたくしのした事が父に知れば、わたくしの命はないのですから。」

それを聞いてテセウスはカラ／＼と笑ひました。

「もう無事に出られるにきまつてゐるではありませんか？」かう言つて、絛毬を手の中で轉がしながら王女の顔をぢつと見てゐましたが、必す一しよにギリシヤへ連れて行くとい



ふ誓を立てました。

次の日の夕方になると、牢屋の番人が入つて来て、第一番に王子テセウスを迷宮へ案内しました。

王子は洞穴の入口まで来ると、王女から貰つた絛毬の一端をそつと入口の石へ結びつけて、右の手には劔を握り、左の手には絛毬をつかんで、弓形になつた岩をくゞつて行きました。道はだん／＼と暗い底の方へ降つて行つて、ある時は狭い廊下のやうなところを抜けたり、又ある時は崩れ落ちた石の上を踏み越えたりしながら、右へ曲り、左へ折れ、或は上り、或は下りうねりくねつて進むうちに、頭の中はもうごちやごちやになつて、どこをどう来たのか分らなくなつてしまふのでした。

そのうちに王子は、ぎくりと曲つた岩の裂目へ辿りつきました。その時漆のやうな闇の中に、二つの目を火のやうに光らせてゐる怪物に出會ひました。それが噂に聞いた怪物でした。闇をすかしてよく／＼見ると、噂に違はず、身體は人間の通りですが、首から上は牛の頭で、その口には獅子のやうな鋭い歯が並んでゐて、此の歯で餌食を食ひ裂くのです。

怪物は王子の姿を見るや否や、怖しい聲を立て、跳びかゝつて来ましたが、王子はすばやく跳びのいて、怪物をやりすごしながら劔を揮つて急所を刺したので、さすがの怪物もとう／＼怖しい吼え聲を立て、穴の奥へ逃げ込んで行きました。

王子は左の手に絛毬をしつかりと握りながら、怪物の後から追つて行きました。そして奈落の底に蜘蛛の巣のやうに、入違つてゐる眞暗な道を、息もつかせず追ひ追つて行くうちに、とう／＼一つの洞のどんづまりへ追ひ詰めて、怪物の角をつかむや否や、石の壁へ押しつけながら、一刀のもとに首をかき切りました。

王子テセウスは怪物の首を握んで、暫時は息を喘ませて立つてゐましたが、そのうちに

左の手に持った繻の絲をたぐりながら、そろそろと迷宮の口へ引返すのでした。

王子は繻のたすけで、これまでまだ一人も出たことのないこの迷宮の中から逃れることが出来ました。そしてやうやう元の入口まで戻った時、そこには王女アリアドネが、たった一人で、心配さうに待つてをりました。

王女は、王子のがっかりした姿を見ると、いきなり駆け寄つて、

「どうでしたか？」  
と、きましました。

「大丈夫です。やつつけて来ました。」  
かう言つて、王子は、さけて来た怪物の首を地面へ投げつけました。

すると王女は自分の唇へ指を當て、何も言はずに半屋の方へ歩き出しました。そして牢番らが酒に酔ひたふれて、ぐつぐつと寝こんでゐる様子を見定めて、扉をあけて十三人の子供らをもつと外へ曳出しました。

一同は、大急ぎで港へ下りて、そこにつないであつた船へ

張つたまゝで島を出發したのでした。

アテネの老王は、王子を立てた日から、毎日崖の上へ立つて、一心に港へ入つて来る船を眺めてゐましたが、その日遙かの海上にそれらしい船が見えたと思つて、だんぐと近



跳び乗るや否や、帆を一ぱいに張つて、すぐに港を出發しました。

その晩は恰度月のない闇の夜でしたから、アテネの船はまんまとクレテ島の見張番の目をかすめて、無事に途中の島まで逃げのびました。そこで一まづ上陸して、王子テセウスは王女アリアドネと夫婦になり、一日二日を夢のやうに遊つてゐましたが、さういつまでも途中で遊んでゐる譯にはゆかないので、いよいよアテネに向つて出帆の用意をして、一同船へ乗込みました。

しかしその時になつて、急に王女の姿が見えなくなつたことに気がついて、一同が大騒ぎをして島中を捜しましたが、つひに見つからなかつたのでした。

王子テセウスは餘儀なく王女を置きざりにして船を出しましたが、そんなことに氣を取られてゐるために、うっかり父との約束を忘れてしまひました。

「白い帆をあげて、自分の無事なことを知らせよう。」  
と約束したことは、すつかり忘れてアテネの船は黒い帆を

づくのを目もはなまず見てゐました。するとそれには白い帆ではなくて、墨のやうな帆が張つてあるのが見分けられました。

老王はそれを見ると、王子はもう死んだものと思ひこんでもしやと思つてゐた望みも全く盡きて失望の餘り、眞逆様に海の中へ落ちて死んでしまひました。

王子テセウスと十三人の子供らはアテネの港へ着いて市民の歡喜の聲に迎へられました。

けれどもこの時になつて、王子は初めて父との約束を忘れてゐたことに氣がついたばかりでなく、それがために大切な父を殺してしまつたことを知つて、重ねぬぐの不幸に深く胸を痛めたのでした。

併しアテネ人はこの時からもうミノス大王に、怖い血の貢物を出さなくてもよいやうになつたのですから、國民は残らず王子テセウスの徳を慕つて「この國の救主」とあがめました。

そこで王子テセウスは父の位を繼いでアテネの王となり、永い間平和にこの國を治めました。(をばり)



# 時計御殿

植松壽樹

時計の殿様と紳名のついた殿様が  
ありました。紳名の通り、時計が大好き  
で、風変わりな、珍しい時計があると  
聞くと、どんな遠方迄でも家來をやつ  
て買入ると云ふ程でした。それです  
から、御殿の中は廊下と云はず、座敷  
と云はず、荷も場所さへあれば時計が

飾つてあります。一寸殿様のお居間を  
覗いて見ても、床の間の置物が二尺ば  
かりの五重塔で、よくよく見ると瓦が  
一枚々々皆時計で出来て居ました。壁  
に掛つて居るのは顔の形をした時計で  
振子の代りに長い舌をペロリペロリと  
出したり、引こめたりして居るのでし  
た。長押しには色々な懐中時計が額立  
になつて掛つて居ります。これは世界  
各國から集めたもので、一つ一つ、日  
く因縁のついた珍しいものばかりで  
した。

殿様の日課といふと、朝は起きぬけ  
から御殿中の時計をぐる／＼と見て廻  
つて、時間の狂つたのを直したり、油  
を注したりするのです。其の中に、時  
計屋が、やれ新發明だとか、やれ掘出  
物だとか云つて賣込にやつて來ます。  
大抵のお客は家來が代理で面會するに  
も係はらず、時計屋にばかりは必ず御  
自分で會ふのでした。さうして一寸で

も形の變つた時計とか、珍しい因縁  
のあるものとか云ふと、即座に値段に  
構はず買取つてしまふのでした。時計  
屋は時計屋で、直ぐそこに付けこんで、  
「これは源義經が持つて居た時計で御  
座います。」  
などと云ふと、殿様はもう涎を流さ  
んばかりになつて、

「さうか、成程さう云へば如何にも古  
ほけて居る。この錆び工合が何とも云  
へんな。」  
「は、左様で御座います。例の宇治川  
の戦に、佐々木と梶原とが先陣を争ひ  
ましたが、義經は、その時、此時計を  
見ながら、二人のタイムを計つたので  
御座います。結局、御承知の通り、佐々  
木の方が、二艇身程負けまして御座い  
ます。」  
「成程。」  
「それから星島の戦に、義經は海の中  
へ弓を流してしまひました。御承知で

「發明家がお目通りを願ひたいと申し  
て居りますが、如何致しませう。」  
「發明家？ それは珍らしい。直ぐに  
通せ。」

何か新發明の時計でも持つて來たに  
相違ないと思ふと、殿様はもう、好奇  
心で胸が躍るやうでした。で、應接の  
間にはひつて來た發明家の顔を見るや  
否や問ひかけました。

「珍らしい時計でも出來たのかな。」  
「はつ。」と云つて發明家は、殿様が直  
接にお會ひになるのを非常に有がたい  
と云ふ様に、そこへ平伏致しました。  
「はつ、仰せの通り珍らしい時計を發  
明致しましてございます。」と云ひなが  
ら忝しく抱へて來た箱の中から小さな  
時計を出して殿様に渡しました。

殿様はその時計を受取る、  
「おやッ。」と思ひました。さうして不  
思議さうな顔をして二三度裏や表を檢  
べてから、

も御座いませうが、義經はその弓を楯  
ひに自身で海へはひつたもので御座い  
ます。其の爲めに時計がすつかり錆び  
ついてしまひました。機械もまるで動  
かなくなりましたのを、種々手入れ致  
しまして、漸く此の通り元通りになり  
まして御座います。」  
殿様は、時計屋の出鱈目ですつかり  
煙に巻かれながら、これはとんだ掘出  
物だ、と内心ほく／＼もので、實はお  
血程の大きな舊式な懐中時計をまん  
まと、賣付けられてしまふ、と云つた  
様なわけでした。

大勢の役人が時計専門にかゝり切り  
で、手入れやら、見廻りやら、人手が  
足りない位忙がしい上に、有りつたけ  
の時計が、一分一秒の違ひもないやう  
にピタリと合つて居ないと、殿様の御  
機嫌が悪いのですから大變です。  
殿様は別に肌身はなさず持つて居る  
懐中時計がありました。別段、どこと  
云つて變つたところのない、見かけは  
當り前の時計でしたが、時間の確かな  
ことは無類で、毎日見廻る時には、此  
の時計を片手に持ちつきり、時間を  
見くらべて歩くのでした。さうして、  
少しでも間違つたのがあつたら、係の役  
人を叱りつけて、自分で丁寧に直し  
になるのが例でした。  
或る日のこと、何時ものやうに一廻  
り廻つてから、例の通り賣込に來て居  
る時計屋を、應接の間に通して、持つ  
て來た時計を見て居ますと、役人の一  
人がはひつて來ました。

「何だこれは。こんな時計があるか愚奴。」

殿様は何時にもない鋭い眼付をしてその時計を發明家に投げ付けようとするのでした。

「まあお待ち下さいませ。」發明家はあわて、押し止めました。

「確かに時計で御座います。お耳に一寸お當て下さいませ。確かに動いて居るのがおわかりになりますから。」

殿様は、さうかと思つて、云はれた通りに耳のところへ當てがつて見ました。コチ／＼と時計の音が聞えました。

「成程、動いては居るな。」殿様は少し御機嫌を直して、もう一度その時計を見直しました。

これが時計だとすれば何といふ變な時計でせう。長針もなければ、短針もありません。プレートの中には、時間を表した数字が書いてありません。忙がしく動いて居る筈の秒針さへ付いて

た。不意に家來を呼びとめて、

「これ／＼、其方の時計は何時か。」と聞いて、新發明の時計と照し合せて見ながら「ナニ、三時五分だぞ。たはけ奴三時九分が正しい。直して置け。」などと叱るのではなくて、實は殿様の戯談の一つになつてしまひました。

新發明の時計は、いつ照らし合しても持ち古した懐中時計とビタリと合つて居ました。しまひには一々照らし合して見る必要もなくなつて、古い時計は肌身離さず持つては居ても、ろくに出して見ることはないやうになりました。

その中に殿様は旅行をしなければならぬ事になりました。

旅行に二つも時計を持つて歩くのは邪魔でもあり、それに奇抜な新發明の時計が、時間は正確と來てゐるので、見かけの平凡な懐中時計など持

居ないので。のつべらばうな時計、謂はゞ人間の顔に眼鼻がないやうなものでした。これで、どうして時間が分りませう。

「然し、音ばかりでは時間が分らない。」

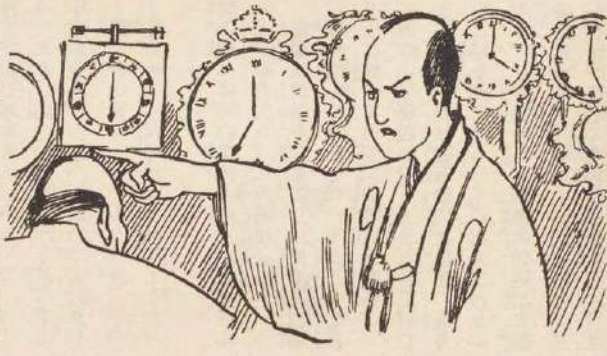
殿様は腑に落ちない顔容でお聞きになりました。

「なる程御尤もで御座います。然しそれは別に造作は御座いません。その時計をぢつと見詰めながら、今は何時かなア、と心の中で考へますと、獨りで分るので御座います。」

これは餘程妙だぞ、と思ひながら、殿様は云はれた通りに、時計の面をぢつと見詰めながら、今は何時かなア、と考へて見ました。

「十時四十二分」と云ふ氣持が頭の中にすうつと浮んで來ました。殿様は大急ぎで、肌身離さず持つて居る懐中時計を出して見ました。確かに十時四十

つて歩くには及びませんでした。殿様は永年持ち續けた時計を、珍らしく机



の抽斗に放りこんで、その儘旅行に出してしまひました。

二分です。殿様はすつかり感心してしまひました。數へきれない位持つて居る時計の中にも、これ程變つたのは流石にありません。

「これは大した發明だ。偉いものだ。早速買上げてとらせる。價は何程でも其方の望み通り遣はずぞ。」

殿様のお喜びは一方ではありませぬ。早速役人に云ひ付けて、澤山のお金を發明家に下さいました。その上にお晝の食事まで一緒に戴いたので、發明家は重ね／＼と面目を施して御殿を退出致しました。

さあ、それからは、殿様は此の時計が面白くて堪らなくなりました。用もないのに出して見て、もう何時かな? 「は、あ、二時十七分か、おつと待てよ。」などと獨言を言ひながら、懐中時計を引き出して見て、

「二時十七分、合つてる／＼。」と子供みた様に喜んでニコニコするのでし

學生仕事といふ程の仕事を持たない殿様にとつては、忙がし過ぎる位忙がしい旅行でした。朝はまだ眼のさめ切らぬうちに起こされて、橋の工事を見に行つたり、米の出来ばえを檢べたり、學校の生徒の勉強ぶりや、役所の役人の勤めぶりなども見に行きました。行く先々で毎日こんなことを繰り返すので飽き／＼して、へと／＼になつて十日目の夕方漸く御殿にお歸りになりました。

先觸もあることだから正装した家來共が門の前に並んで、靜かにお歸りを待つて居るだらうと思つた殿様は、意外にもお歸りと聞いて、家來共があわてまくつて居るのに氣が付きました。

「其方達のあわて方は一體何だ。氣持を悪くした殿様は怒つて尋ねました。「いえ、それはその……」と家來はどぎまぎしながら漸くのことと返事をしました。

「今日正六時にお歸りといふお知らせでございましたから、その積りに致して居りましたので……。」

「それだから六時に歸つたではないか。先觸までしてあるのに、ろくに迎へず致さぬとは怪しからぬ。俺は腹を空かして歸つて来たのだぞ。だが其の様子ではまだ食事の用意も出来ては居るまい、たはけ者奴が。」

殿様はむしやくしやまぎれに嗚鳴り散らすのでした。

「でも御座いませうが、何分にも六時にはまだ大分間が御座いますので……。」

「何？まだ六時にならんと申すのか。」

此のたはけ奴と、もう一度云はうとしたのですが、不圖氣が付きますと、旅行中の忙がしさにまぎれて、此の十日間は時計を見ることをすっかり忘れて居たのでした。

殿様は例の新發明を出して見ました。さうして何時か知らと思ひました。

時四十二分を指して居ります。

「さうだ。これが本當だ。もう此位の時間になつて居る筈だ。これ、よく見ろ。六時といふ先觸なのが、七時を過ぎて居るではないか。」

殿様は清々したやうな氣持で嗚鳴りつけました。

「いえ、よく御覽下さいまし。此時計は止つて居ります。」

家來は、今度は、どんなに叱られるかと思つてビク／＼しながら答へました。なる程時計は止つて居りました。然も日附を見ると、もう四日も前に止つたのです。果して殿様は大變に怒り出しました。

「俺が留守だと云つて此の様は何だ。係の役人は一體何をして居たのだ。」

外の時計もどうなつて居るか分らないと思ふと、その不安も一緒になつて益々激しく怒り出しました。さうして、ブリ／＼しながら時計を一つ／＼檢べ

「……………」どうしたわけか、いつまで見詰めて居ても、頭の中に何の氣持も浮んで来ません。

「ハテナ、止つたか知ら」と思つて、耳に當てて見ると、たしかにコチ／＼と動く音が聞えます。もう一度、ぢつと見詰めて、何時かなと考へました。

「……………」

頭の中へは何の氣持も浮んで来ません

「どうかしたな。こん畜生。」

殿様は痲痺を起して二三度減茶善茶に振り廻して見ました。すると、恰度そこに飾つてあつた掛時計が突然、

「四時。午後四時」と大きな聲で叫びました。これは審音器の仕掛で、獨りで時を知らせるやうに出来て居るのです。殿様は又、新發明の時計に眼を移しました。

「四時」といふ氣持が頭の中にさうと浮んで来ました。

「なんだ、矢張り四時か。然し俺は非

にかゝりました。どの時計も／＼皆違つて居ました。一つとして同じ時を指して居るものはありません。殿様はもう怒るところか呆れてしまひました。かうなつて見る



と、唯珍らしいといふだけの時計がいくつあつても、今の殿様にとつては何の役にも立たないことになつてしまひました。のみならず、今が今迄頼みにして、信用しきつて居た新發明の時計

六〇 常に腹が空いて居るのだぞ。」

殿様は少しがっかりしてつぶやきました。すると又恰度其の時に、すぐ其の隣の時計にバツと電燈が付きました。この時計は五時から先は、長針と短針との先に豆電氣がついて暗闇でも分るやうな仕掛になつて居るのでした

「五時？ どうしたのだ、これは。」

殿様は口を突らして家來を睨みつけました。さうして、直ぐに其眼を新發明の時計の上に落しました。

「五時」といふ氣持がさうと浮んで来ました。おや、と今度は驚いてしまひました。まるで狐にでもつまゝ、れた様な氣持です。

その隣に並んで居る時計は大きな時計でした。これは時間の外に、三百六十五日の日附が刻んであつて、今日は何月何日の何時といふところまで分るやうに出来て居りました。殿様の眼は自然とその時計に移つて行きました。七

が、實はそばにある時計の通りになつて居たのだと初めて分つて、殿様はしよけてしまひました。

「確かな時計だと思つたのは、實は俺が確かな時計を持つて居たからだ。見かけはつまらなくても、矢つ張り確かな方が好いな。」

殿様はつく／＼と考へました。さうすると今まで矢筈に怒り散らしたのが少し極り悪くなつて来て、兎に角確かな時間を知りたいものだ、と大急ぎで自分の部屋に行つて、机の抽斗を開けて見ました。そこには、旅行の前に入れて置いた懐中時計がはひつて居ります。肌身離さず持つて居た一番確かな時計！

然し、その時計を手に取り上げた時に、殿様はもう一度がっかりしてしまひました。十日間忘れられて居たその時計は、十二時を指したきりで見事に止つて居るのでした。(なはり)



### 傳 お釜の歌 (岩代の話)

藤澤衛彦

ある冬の日の朝、一右衛門さんが、野良へ出かけようと、脚絆の紐を結んでなりましたら、すぐその處にかけてあつたお釜が、突如歌をうたひ出しました。

大寒小寒をスタコラス、  
むかうのお山へ行つて来い、  
新道新坂スタコラス、  
でつかい熊の木一廻り、

んで来たので、二右衛門さんは、飛びあがるほどに驚かして、

『お釜の歌を聞いたか』と申しました。

『うん、聞いたけど駄目だ、掴つて見たけれど無かつた。』と一右衛門さんが言ひました。『どこを掴つたんだ。』と、二右衛門が聞きました。

『むつくりこつくり古塚の、真中ほつたが無アかつた。』と、一右衛門さんが答へました。『それぢやアない筈だ。』と言ふなり、二右衛門さんが飛び出して行くので、どうした事かと、一右衛門さんは驚いて、二右衛門さんの後を追ひかけて行きました。

二右衛門さんが、飛びがやうにやつて来たしたのは、村でも有名な大芝の古畑でした。大芝の古畑は、昔から、播かす畑と言はれて、此處へは、何を播いても生えないといふ傳説があります。二右衛門さんは、その畑へ行つて、めつたやたらに掘りかへし出したのでした。それで、漸く、一右衛門さんが追ひつた時分には、もう大抵すつかり掘りかへされてゐるところでした。さうして、最後の銀を

大寒小寒をスタコラス、  
流か渡つて行つて来い、  
古道古坂スタコラス、  
ちいぢやな腰り沼一渡り、  
大岩小岩の岩かげに、  
むつくりこつくり古塚の、  
真中ほつたらザツクザツク、  
實が出てから一昔。

一右衛門さんは、たまげて其歌を聞いてゐりましたが、  
『これは大變な事を聞いたぞ。』と、脚絆の紐を結ぶか結ばないかに大寒小寒の冬の日をスタコラススタコラ向のお山として駆け出して行きました。新道新坂スタコラスとどんどん行きますと、大きな熊の木がありました。それを一廻りして、向を見ますと、大藪があります。そこを抜けて行くと小藪がある。小藪を通り抜けると小川の流がありました。それを渡りきると、そこからは、道とつかない古道になります。古道古坂すたこらさと、一右衛門さんが駆け下りて行きますと、なるほど小さな腰り沼がありました。向を見ると、大岩が

入れると、カチと何か手懸へがして、案の定大きな壺を掘り出したので、二右衛門さん、すつかり有頂天になり、喜びに踊り狂ふばかりのところでした。で、一右衛門さんの顔な



見ますと、  
『どうだえ、實は此處なんだ。』と、得意さうに申しました。それで、二右衛門さんが、  
『もう開けて見たのか。』と申しますので、開

『なるほど、お釜のうたつた通りだ。』と、大岩小岩の岩かげを探しますと、むつくりとした古塚がありました。『こゝなんだ。』と、一右衛門さんは思つて、その真中を一所懸命に掘つてみました。すると、カチンと、何やら掘りあてたやうなので、真中ほつたらザツクザツク、きつと實物だらうと、胸をどきどきさせながら開けて見ましたら、なアんだ、實が出てから一昔、今では空っぽのがらんどでした。

それで、一右衛門さんは、大しよげになつて、二右衛門さんのところへやつてきました。二右衛門さんは、今、畑に出かけようと思つて、脚絆の紐を結ぼうとしてゐたところ、急に、その處のお釜が歌をうたひ出したので、全くたまげきつてゐるところでした。そのお釜は、こんな歌をうたつたのでした。

むかう大芝古畑、  
千年たつたら行つて見な、  
萬年たつたら掘つて見な、  
實はお主を待つてゐるか、  
そんな話も一昔。

それを聞いて、二右衛門さんが全くあわて出してゐたところへ、一右衛門さんが飛びあがって、見ましたところ、やつぱり、熊もありません。『そんな話も一昔なんだ。』と、二右衛門さんは口惜しさうに申しました。

二人は、さうした失敗話をしながら、三右衛門さんの家へやつて来ました。すると、三右衛門さんは、座敷一杯小判をぶちまけて、大にこゝで勘定してをりますので、二人はおつたまげて、

『それ、あじにじしたか。』と聞きました。『ふん、これか、家の釜がに詰つたところを掘つたら出たんだ。』と三右衛門さんが申しました。

『何にうたつたか。』と、二人が訊ねますと、  
『裏の小藪を掘つて見な、小藪の小石をどけて見な、實が、と歌やがるから、他人に聞かれたら大變と、其時、釜を押へつけて、紐でもう話へない様に結びつけて、裏の小藪から、今實を掘つて来たところだ。』と答へました。  
それで、お釜が歌をうたふ時は、直に紐で結へると、實が来るといふ言ひ傳へが今でもあります。(なほり)

# ホントとウソ 小島政二郎



六回  
昔、双児の兄弟がありました。一人の方はどんな場合にも嘘といふものをいつたことがないので、人がホントと呼んでゐました。ところが、もう一人の方は、しじゅう嘘ばかりつくので、ウソといふ名を附けられてゐました。

二人にはお父さんがありませんでした。お母さんとたつた三人きりで、貧しく暮らしてゐました。お母さんは、二人が大きくなるのを待つて、町へ奉公に出すことに極めました。二人は袋へ食べ物を入れて貰つて、

『では、お母さん、行つてまゐります。』と暇乞ひをして出て行きました。

二人はテタテテタテ歩いて行きました。やがて夕方になると、二人はお腹がペコペコに透いて、どうにもかうにも仕方がなくなりまして。で、そこに倒れてゐた大木の上に腰をおろして、お辨當を開きました。

その時、ウソの方が  
「ね、ホント。二人で一時に兩方のお辨當を食べてしまふのは勿體ないから、まづ初めに君のお辨當を一人で食べないか。さうしてそれが無くなつたら、今度は僕のを食べることにしないか。」と云ひました。

すると、ホントは  
「成程、それはいい考へだ。ぢやアさうしよう。」と云つて、快く自分のお辨當を開いてウソの前へ出しました。すると、ウソは旨いものだけ手早く先きへ食べてしまつて、ホントにはまづいものばかり残して置きました。

明くる朝も、ホントの分のお辨當で二人は朝御飯をすませました。お晝御飯を食べてしまふと、ホントの分のお辨當はみんなカラになつてしまひました。晩にはウソのお辨當を食べる番でした。ところが、一日歩き疲れて夕方になつた時、ウソは自分のお辨當をホントに分けてやりませんでした。

「これは私のお辨當だよ。私一人分しかありません。」と云つて、どうしても分けてやりませんでした。

ホントはおこつて

「まあ、お前はなんている奴だらう。兄弟を欺すなんて……。」  
「ふんだ。欺される奴が馬鹿なのさ。まあ、そこに坐つて飢ゑ死にするのも待つがいゝさ。」

「よし、覺えてをれ。名がウソと云ふだけあつて、性質まで嘘つきに出来てゐる。」

かう云つたホントの言葉を聞くと、今度はウソが眞赤になつておこつて、ホントに飛びかゝつて行つたかと思ふと、兩方の目玉を掴み出しました。

「やあい、めくら蝙蝠め。それでも、あの人間は嘘つきだ。この人間は正直だ、と見分けが附くか。附くなら附けて見ろ。」と悪口を浴せかけたまゝ、どどん行つてしまひました。

可哀さうに、ホントは、生まれもつかぬ盲になつてしまひました。立ち上つては見ましたが、俄盲のことゝて、どつちへ行つたらいいのか、道がどう曲つてゐるのか、さつぱり分りませんでした。それでも、手さぐりでノロノロと歩いて行くと、バツタリ大きな樫の木にぶつかりました。その時、ふと「こゝら邊には人を食ふ獸が出るかも知れない」と思つたので、急いでその木に攀ち昇りました。

「なあに、目が見えなくなつたつて構ふものか。鳥が啼き出したら朝だと思へば間違はない。さうしたら、また手さぐり足さぐりで歩いて行けばいい。」

こんなことを思つてゐるホントの耳に、遠くから木の下へやつて来るらしい何かの足音が聞えて來ました。やがて附近まで來たと思ふと、木の下で聲が聞えました。よく聞き耳を立て、聞くと、それは熊と狼と兎とが、この木の下へ秋祭りをしてやつて來たのでした。

間もなく、獸たちは宴會を始めました。食べたり飲んだり歌つたり大さわぎを始めました。やがてそれが濟むと、狼が「二つみんなでお話をしようぢやないか。」と云ひ出ししました。

「うん、そりやアい、思ひつきだ。」と、みんなが賛成をしたので、まづ獸の王様であるところの熊が一番始めにお話をすることになりました。

「ねえ、諸君。君たちはイギリスの王さまがお目が悪くつて入らつしやることを知つてゐるだらう。」と始めました。「イギリス中のお醫者といふお醫者に見せてもどうしても直らない

ることを知つてゐれば、あんなに飲む水でお困りになりはしないのだ。

あのお庭の真中に、ホラ、大きな石があるのをみんな知つてゐるだらう。あの石の下に、それはくはい、泉があるのだがね、王さまは一向御存じないのだ。そして外のところばかり掘らせてゐるのだから、いゝ水が出よう譯がないぢやアないか。」

「成程ね。」と、兎が受けて、「實は私も一つ知つてゐることがあるんですがね。それはあの御殿のうしろにある島ですよ。あんな大きな、あれ程大仕掛けの、島であるながら、毎年毎年ロクなものが出來ない、その譯をあなた方は御存じですか。いゝえ、あれはね、金の鎖があの島のまはりに切れなく埋まつてゐるからなんです。しかも、三まはり取り巻いてゐるんですよ。その鎖さへ掘り出してしまへば、世界ぢゆうで一番いゝ島になるんですがね。」

こんな自慢話をめい／＼がしたあとで、もう今夜は遅いからといふので、みんなは揃つて歸つて行きました。すぐ頭の上の木の梢ですつかり話を聞いてしまつたホント

と云つて國中の者が悲しんでゐる。しかし、あのくらのお目を直すのは造作はない。朝早く、まだ木々の葉に露が玉を結んでゐる時分にこの木の下へ來て、露で目を洗ひさへすればいいのだ。きれいなつばりに直つて、水晶の玉のやうなお目になること請け合ひだ。」

「さうとも、なんの造作もありやアしない。」と、狼が合ひ槌を打ちました。「イギリスの王さまと云へば、あの王さまのお姫様は、可哀さうなことに、鼻で啞だ。しかし、あれだつて、直さうと思へば譯はないのだ。お姫さまがもつとお小さい頃お教會でパンを召し上つた時に、ホロ／＼おこほしになつた。

ところが、お姫さまの椅子の下に大きな蟻塚がゐるで、そのこほれを拾つて食べたのだが、どうしたことか喉につかへて飲み込めない。いまだに飯み込むことも吐き出すことも出來ずに、椅子の下の地の中に苦しんでゐる。あれを早く掘り出して、喉から取つてやればいゝのだ。さうすれば、お姫さまの耳も口も人間並に使へるのになあ……。」

「さうとも、その通りだ。しかし、まだある。」と、今度は狐が話を引き取りました。「イギリスの王さまが、私の知つてゐる

は、喜んだの喜ばないの段ではありませんでした。その夜はまんじりともしずくに、夜の明けるのを待ちました。やがて、小鳥がチヨキ／＼啼き出しました。ホントは急いで木の葉の露を揃ひ集めて、目を洗つて見ました。すると、不思議なことに、バツと目の前が明るくなつて、素のやうに見えるやうになりました。

その時の嬉しさはどんだつたでせう。

やがて、ホントは王さまの御殿へ辿つて行つて、下男に使つて下さいと申し出ました。すると、丁度明きがあつたのですぐお庭番に雇はれました。

或日、ホントがお庭の掃除をしてゐると、ふいに王さまがお出ましになつて、きれいな花の咲き亂れた廣いお庭の中を、あちらこちらと散歩をなさつて入らつしやいました。やがて

「あゝ喉が乾いた。水が飲みたい。」と仰やいました。しかし御殿中の泉といふ泉の水がみんな赤く濁つてゐることをお思ひ出しになつて「あゝ、わし位水に苦しまされてゐる者は世界ぢゆうにあるまい。」とお憎きになりました。





「陛下。」と、その時ホントは王さまの前へ膝まづきました。「さうお愼きになるには及びませぬ。どうか力強い家來にお命じになつて、あすこの、あの大きな石をお取り退け遊ばしませ。さうすれば、お望みのまゝに水が得られませう。」と申し上げました。

王さまはお喜びになつて、早速大勢の御家來をお集めになつて、うんすくと大きな石をおどかせになりました。すると、ホントの言葉通りに、寶石のやうに光り輝いた水がまるで太い柱のやうにシユウと勢よく吹き出しました。

「こんな綺麗な透き通つた水は、イギリスのどこを掘つたつて出はせぬ。」

王さまはじめ皆の者が口を揃へて喜び合ひました。

その明るる日のことでした。静かに晴れた青空に、大きな鷹が一羽飛んで来ました。それを見つけた御殿の人達は、大さわぎをしてみんなお庭へ出て来ました。その賑かな聲をお聞きになつて、王さまもお庭へ出て入らつしやいました。が、急いで鐵砲をお取り上げになると、肩に當て、狙ひをおつけにならうとすると、日の光りが激しくお目を射たので、

「陛下、それはかういふ譯でございます。」

かう云つて、ホントは金の鎖の話を申し上げました。王さまは早速御家來を三人お呼び出しになつて、島のまはりを掘らせて御覽になりました。すると、成程金の鎖がズル／＼ズル／＼跡から／＼と出て来ました。王さまはその金の鎖を御褒美としてホントにお遣しになりました。不思議なことに、その年から、島の木といふ木が、どれもこれも實をつけて、あんなり實が付き過ぎて枝がしなつて地面に着きさうな程になりました。

また外の日のことでした。王さまはホントをお部屋にお呼び寄せになつて、いろいろお話をして入らつしやいました。その時、二人の前をお姫様が静かにお通りになりました。お姫様の姿を御覽になると、王さまは急に悲しくなりました。「ね、ホントや。あんな可愛らしい娘であるながら、喋ることもお聞かぬことも出来ないなんて、なんといふ可哀さうなことだらう。」と、しみ／＼とした口調で仰やいました。

「はい、いかにもお氣の毒に存じます。しかし陛下、直す方法がないではございません。」と、ホントは申しました。

「あ、いたゞ……。」と仰やつたまゝ、その場へ倒れておしまひになりました。「あ、誰かわしの目を直してくれる者はなにか。このまゝで居るやうものなら、二三年のうちに盲になつてしまふに違ひない。」と、お悲しみになりました。

「陛下、左様にお愼きになるには當りませぬ。」

この時も、ホントがそばからお慰め申しました。さうして自分の目の直つた時のお話をしました。その明るる朝早く王さまは馬に乗りホントをお供につれて、例の櫻の木の下へ行きました。さうして云はれるまゝに、木の葉の露で目を洗つたところが、これが自分の目かと疑はれる位ハッキリ遠くのもの近くのものが見えるやうになりました。

王さまは、これ以來、大層ホントをお可愛がりになつて、どこへ行かれるにも、必ずホントをお供につれてお歩きになりました。或日、二人は御殿のうしろにある島へ足を踏み入れました。すると、王さまはホントをかへり見て

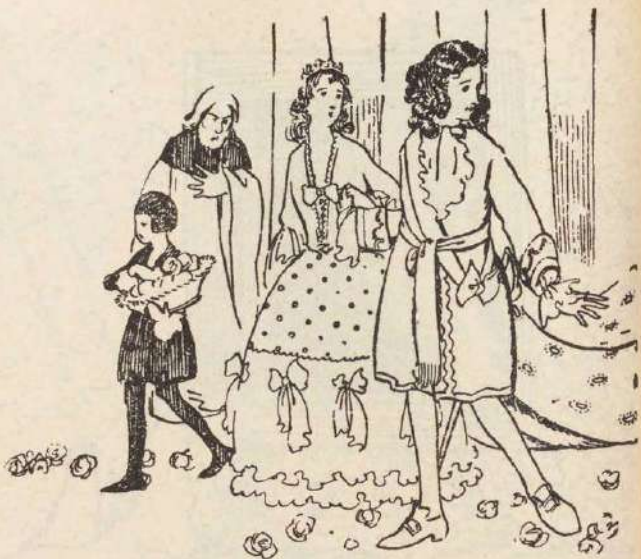
「この島へは、わしも随分お金をそぎ込んだが、一向ものが實らぬ。どういふ譯かわしにも分らぬので、不思議に思つてゐる。」と仰やいました。

それをお聞きになつた王さまは、もし本當にお姫さまを直すことが出来たら、お姫さまをホントにやらう、その上イギリスの國半分をお前に分けてやらう、とまで仰やいました。ホントは早速鑿や金槌を持つて、教會へ出かけて行きました。さうしてお姫さまの椅子の下に石だたみをこはして、蟻を掘り出しました。見ると、喉にパン屑がつかへてゐました。それを指先でつまみ出してお姫さまに渡すと、それと同時に、お姫さまは自由に話すことも聞くことも出来るやうになりました。



王さまのお喜びと云つたらありませんでした。早速その日のうちに、ホントとお姫さまとの御婚禮の式が挙げられることになりました。大ぜいの人民たちが、御殿へお祝ひに集まつて来てダンスに踊り狂つてゐる中へ、一人のみすほらしい乞食がヒョロ／＼はひつて来ました。「どうかお残りを頂かして下さい」と、哀れな聲を出して云ひました。この乞食を一目見るなり、ホントは、それが、あの自分を盲にしたウソであることをすぐ見分けました。「お前はわしを見知つてゐるであらうな。」と、ホントは乞食の前へ立ちました。

すると、乞食は「いえ、どう致しまして……。あなた様のやうな立派な御身の方を、どうして私が存じ上げませう。」と云ひました。「いや、たしかに知つてゐる筈ぢや。一年前のことであつた。お前はわしの目の玉を二つ潰してしまつた。お前は名をウソと云ふ筈ぢや。性質まで嘘つきに出来てをる。しかし、それでもわしの兄弟ぢや。今、食べるものを上げる。それを食べ



たら、すぐ林の中へ行くがよい。さうしてわしの昇つた樫の木へ同じやうに昇つて、何かいふことを聞くかも知れないから、

それを待つがよい。さうして出世の縁口を見つづけるがよい。」ウソは大よろこびで、急いで林の中の樫の木へ攀ち昇つて待つてゐました。

「俺の兄弟は、この木の上で一夜を明かしたばつかりに、イギリスの半分の王さまになつた。して見ると、俺だつてどんな出世をするか分らない。」

こんなことを考へながら待つてゐました。

すると、間もなく、例の獸が四匹揃つてやつて来ました。

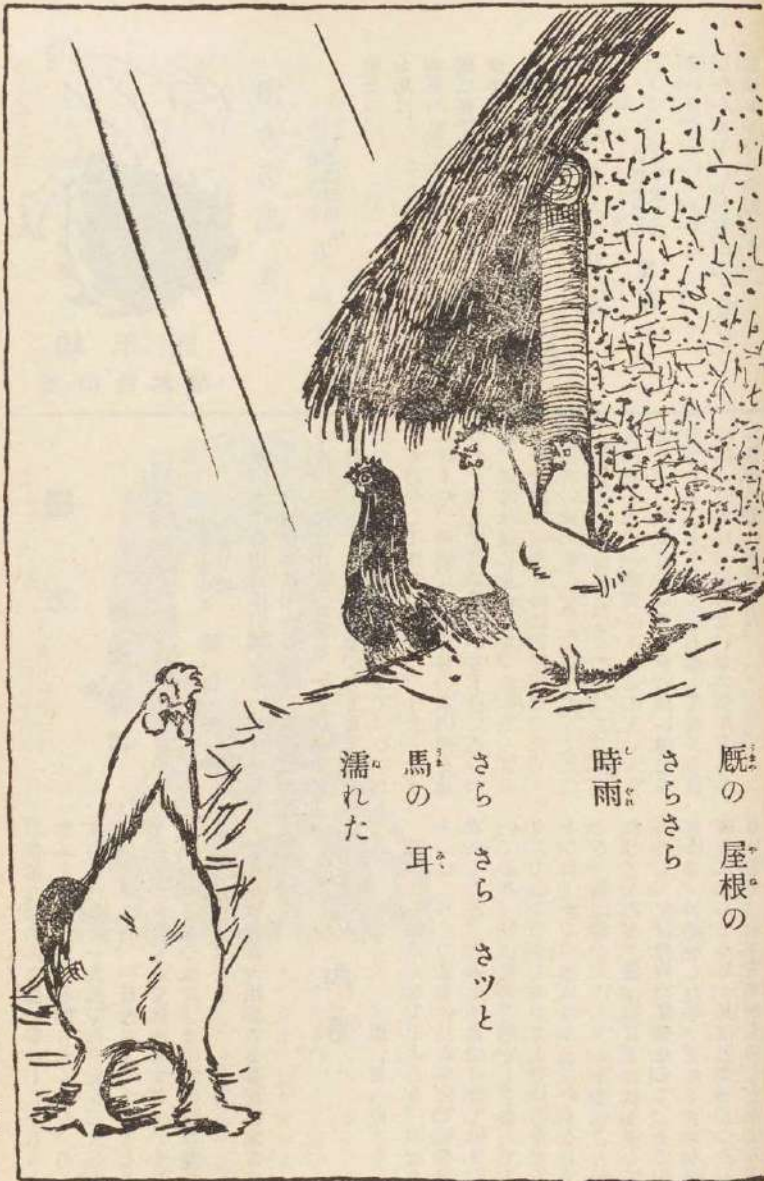
さうして例の通りに宴會を済ますと、狐が

「ちやア今夜も一つ何かめい／＼に面白い話を仕合はうぢやアないか。」と云ひ出しました。

すると、熊が不機嫌な太い聲で

「いや、よさう。去年の秋祭の時俺たちが喋つたことを、誰か人間が聞いたらしい。だから、今年は何もないことにしよう。」と云ひました。

で、そのまゝ、獸たちは、お互に「お休み」を云ひ合ひながら、林の奥へはひつて行つてしまひました。そんな譯で、ウソは何事も聞き出すことが出来ませんでした。(をばり)



厩の屋根の  
 さらさら  
 時雨  
 さら  
 さら  
 さツと  
 濡れた  
 馬の耳



さらさら時雨  
 野口雨情  
 畑の中の  
 さらさら  
 時雨  
 さら  
 さら  
 さツと  
 鶏が頸  
 曲げた



幼年詩 若山牧水選

田舎の馬 (賞)

東京市 石山 正治  
芝區三田 (十四才)

田舎のお馬は  
おしやれのお馬  
頭に帽子をかぶつて  
汗、しやん／＼と鈴もつけてる。

おまつり (賞)

東京市明石 嬰庭喜代子  
小學校尋六

赤い日がさし、かなほうついて  
しやん／＼とあるいて居る  
世はおまつりの面白さ

綴方

編輯部選

引越していった友 (賞)

岐阜市佐久 柴田美緒  
岡野川端 (十四才)

僕の友の篠田君は引越していった。其の二三日前後等は川へ行く時、篠田君をさそつて見たが「用がある。」とか「今いかれん。」とかいつて、ちつとも出てこなかつた。僕等は憎らしくなつて、わざと廻り道をして泳ぎにいつた。今日も泳ぎに行く時、何気なく篠田君の家の前を通つた。何んか白い紙がぶら下けてあつたが、僕等は氣に止めなかつた。さんざん泳いで歸つて来たのは四時頃だつた。「なんや／＼。僕等はそこへ行つた。隣の風呂屋の人が「篠田さんがこしていつたのや。」といつた。「あ。僕は急に淋しくなつた。こして行くなら越して行くと言へばよいのに、知らないものだからあんな意地の悪い事をした。」

私の内 (賞)

岡崎 いち

私のうちはみんなで七人ゐる。おばあさんはころんで足をいためたので毎日奥でねてゐる。末の弟は甘つたれで毎日ないてゐる。妹は私の人形をもち出してあそんでゐる。すぐの弟は大せいの友だちをつれてきて、毎日ねん／＼とさうをすしてゐる。私は弟と大けん／＼をすることがたび／＼ある。母は毎日さいほうをしてゐるし、父は行商小間物をして、そのかたはら、姓をしたり、ライオンを販賣したりしてゐる。父は左の手がつかへないので、右手でそれらのことをどんど

小さい子供のでこまいや  
大きい大人がかさうして  
あるいてくるのが  
見えるだろ  
ばうや あそこを見てごらん  
男の人が人形だいて  
すまし顔して  
しやん／＼あるいて居る  
そつとのぞいてごらんさい  
あるいて居るのが見えるだろ  
評、いかにもお祭りらしく賑かにてよるし。(牧水)

空 (賞)

愛知縣海部郡十四 木全 清一  
山村西部校尋六

水の中の  
空深い  
とんほが一びき  
通つた、

評、實に静かな、好い、寫生 歌です。(牧水)

月見草

愛媛縣松山 加藤 淑子  
市千舟町 (十五才)

引こした私のうちの



初ちゃん (賞)

愛媛縣越智郡 日浅 文代  
富田村字拜志

こはれた鐵郎 (賞)

仙臺市東二番 竹川 久子  
丁小學校尋五

んやる。前のみちをおさうじして居ると、とき／＼道をゆく人が「甚さん、よくやりますね。」とこゑをかける。母をしかるときは世間知らずなどといつて、自分は何でも知つてゐるやうな顔をする。そのくせしらない。私はしかるときは、のろまかつんほ位のものだ。自分のことはたなにあけておいて。  
私のかはいい鐵郎ちゃん(お人形)は石の上におちてこはれてしまひました。この鐵郎ちゃんは、大町のごふくやの前のみせでかつたのです。私はほんたうにかなしゆう／＼ございました。鼻けのわきへうめてやりましたら、ゴゴから毎日すゝめがチユウ／＼とないてゐます。私はあそびにつかれて机につぶしてねてしまひました。すると「久子さん／＼。」とよび見ますと、そこに鐵郎ちゃんかやんがにこ／＼としたかほで私を見てゐました。私は「鐵郎ちゃん」とさけんでだきつかうと思ひましたら……目がさめました。あ、ゆめだつた。私はほんたうに鐵郎ちゃんがるればいなど思ひました。北からくるかぜにボブラの木もかなしさうにゆらゆらと葉をうごかしてゐます。

おとなりは

なくなつた照ちやんの家でした。

黄色い月見草の咲くせとに親子のとかげがをりました。

黄色い月見草の咲くことを知らなうでせう。

評、照ちやんの淋しい顔が月見草の花の蔭に見える様です。(牧水)

### 朝

東京小石川女子 大學附屬女學校 高木しげ子 (十四才)

臺所では お米を

とく音がする 杉の木ではもうせみが 鳴いてゐる

雨戸を 開ける音もする 評、いかにも朝らしいすがすがしい歌。(牧水)

### キリくゝス

兵庫縣美霧郡 志染校尋六 内本ひさ子

金色に光つた草むらで キリくゝ……………チヨン

キリくゝ……………チヨン 涼しい聲でないてる。 評、之はまたいかにも秋の夕方らしい。(牧水)

### 私の家

山形縣山邊 小學校尋四 廣谷なみ

私の家は めちやくちやだ

それで私は 外へ出る 評、何となく恐い様な、お氣の毒の様な、氣がします。あなたはよほどしつかりしてゐなくてはいけない(牧水)

### 片目の金魚

千葉縣山武郡 東命校尋五 吉岡むつ

弟が金魚屋から買つて来た

### 父の心配

北海道函館商 業學校二年生 西塚文雄

夏休みて僕が青森縣の田舎に歸省した時の事であつた。

もう夏休みも大方過ぎ去つて、朝晩等は寒さを覚える様な遅い夏の或る日、今迄一日も仕事を休んだ事の無い父が、其の日は起きて来なかつた。僕や弟達は父が出て来なければ寂しいので、こそこそ朝食を食べて納屋の戸口に席を敷き、朝の目を浴びて腹遣になつて居た。三人共黙つて、音も無く落ちる李の葉を見て居たが、僕は何となく心持が悪いので、「おい、三郎、お父様が何をして居るか見て来い」と言つた。三郎は黙つて下駄を突掛け乍ら家に這入つて行つた。暫らく出て来ない。廣と僕は頬杖して空を眺めた。白い耕雲が浮んで居る。不意に納屋の戸が開いた。

「どうであつた。」

「未だ寝て居た。」三郎は低い聲で言つた。三人は又騒がしく啼く雀の聲を聞き乍らひそ／＼父の事を話して居た。

「本を見ねが。」と廣が言つた。林檎取りにも行き度くはないし、馬にも乗りたくないので、三人は書齋に這入つた。家の中は随分静であつた。兄さんは青森の町に行つたし、妹は祖母様と黒石のお寺に行き、伊助と勝郎は山の島に行つたので、廣い家は伽藍のやうに静であつた。父は起きたらしかつた。母と母屋の方で何かして居る。

僕は古い日本少年と、金の星を出して弟達に見せた。三人は寝轉んで繪を見た。窓の前の林で、蟬がジージーと啼いて居る。弟達は黙つて本を見て居る。僕はそつと立つて父の室の廊下を走つた。突き當りの唐紙の處で少しためらつたが、そつとくりぬき窓の隙間から中を見た。

父は何か書いて居る。不圖筆を置いて後を振り向いたが、又書き出した。漸く少し安心して室に歸つた。

「何うした。」三郎と廣が本から眼を離して聞いた。

「何だか書いて居たよ。一生懸命に。」と言ふと、二人は顔を見合はして首をかしけた。(以下略す)

### よつばらひ

東京市本郷 駒本校尋六 早川巨萬子

私が或日の夕方お使から歸つて来ると町の居酒屋の前が非常な人だかりでした。私は「何だらう」と思つて人々の間からぞいて見ると、一人のよつばらひが大の字になつて寝てゐる。其の頭の所には大きな西瓜が轉つてゐます。何とも云へないいやな臭がぶーんと鼻をつきました。

「何だか書いて居たよ。一生懸命に。」と言ふと、二人は顔を見合はして首をかしけた。(以下略す)



### 仔犬

北海道北見國語 濱川向六級高一 皆川雄二

伯父さん、仔犬有難う御座いました。家中の人達はみな大喜びです。殊に敬夫は「犬、犬」と言つてをばから隠れませんか。戴て来た當座ははしがつて、くんくん鼻

が、何となく恐い様な、お氣の毒の様な、氣がします。あなたはよほどしつかりしてゐなくてはいけない(牧水)

満子さん (賞) 豊橋市高等 女學校一年 梅村登美子 を鳴らして泣いて繰り可

七七

かはい、きん魚  
よく見たら一匹片目の金魚さん  
かあさんにそのこといつたらば  
うそだとつたれど  
よくよく見たら片目の金魚  
少したつたら死んでしまつた  
野、オヤ、かはいさうな金魚(牧水)

あせば

名古屋市 吉本 辨治  
白壁寺四

今年の夏はきびしい暑さ  
僕の頭にあせほが出来て  
しかくくくと  
いとござる  
早くなほしたまへ  
あせほの神  
野、なか、なほさない、もつと痛んで  
毛が抜けてすつからかんに売げちま  
へ。(牧水)

とび火

横浜市屋上 眞川 榮二郎  
町五ノ七七 (十四才)

あつちへいつてはついたり  
こつちへきてはついたり  
お鍋のまはり  
かけつら

いちぢく

和歌山縣海草 高橋 静代  
郡木本校尋六  
おいしさうな  
いちぢくだなあ  
一つ食べよか  
二つ食べよか  
皆食べてしまを

内の庭

福岡縣八幡市 千葉 梯  
前田官舎二號  
内の庭には  
いちぢくの木や  
くはの木や  
柿の木や  
いてふや  
ほほづきなどあつて  
實がなると大きう  
美しいです

顔(賞)

千葉縣東金 田原 ヨシ子  
校尋常六年



酒屋のお祖父さん

埼玉縣南埼玉 關根 しげる  
郡球玉校尋六

愛想なので、お返しをしようかと思ひま  
したが、朝になつて食物をやる時、短い  
尾を振り乍ら喜んで食べるのを見ると、  
可愛らしくて可愛らしくて返す氣が消え  
てしまひます。今はすつかり馴れて夜は  
すやすや眠ります。昨日は日曜だつたの  
で、石油箱をこわして小さい家をこしら  
へてやりました。名前は近所の犬と紛ら  
はしくない様に少しハイカラですがメリ  
ーとつけました。名付け親はお母さんで  
子にしやつせ」と言ひながら新聞紙へく  
るんだ四寸位の長さの物をくれました。  
私は一寸さわつた時鉛筆の葉だと思ひ  
ました。それから家へ歸つてお父さんが  
お茶をのむ時「酒屋でもらつた葉子を出  
せ」と言つたので、ふところから出して  
お父さんにやると、お父さんがあけて見  
て「あれ……」と言つたので、私が「何ん  
だそんなにたまけて」と言ふと、お父さん  
が「さつき酒屋のお祖父さんがくれたの

蛇

愛媛縣越智郡 秋山 乙女  
富田校尋六

は菓子ではないロウソクだ」と笑ひなが  
ら言ひました。私もそれを聞いておもは  
ずをかしくてくすくす笑ひ出しました。  
それとしても、酒屋のお祖父さんは鉛筆  
子とまちがへてくれたんでせうか。それ  
とも、ロウソクなら爲になると思つて知  
つてゐてくれたんでせうか。頭を右にま  
けて考へても、左にまけて考へても、ど  
うしてもわからない、ほんたうに老人は  
しよがないものです。



植木と子供(賞) 小石川區 高田 くに子  
老松町一六

私がゑんであそんで居ると、やまもん  
の木からぱたりと何かしらぬいものがお  
ちました。何かと思つて、それを見まし  
た。木の葉であつたらあないに音はしや  
せまいにふしぎなと思つてゐると、それ  
が細長くなりました。そして、のそりの  
そりとはひだしました。そ  
れをよくよく見るとそれは  
蛇でありました。その時一  
匹の蛙がとびだしました。  
蛇はそれを目かけてぞろぞ  
ろと追ひかけました。蛙は  
びよんびよんとにげだしま  
した。蛇がおひかけてもお  
ひつかれません。蛇はひと  
まつとまつたかと思ふと、  
いきほいをつけて、目をす  
るどくひからせて、首をふ  
つて一しやうけんめいにお  
ひかけました。そのするど

星

エイミー・ガントレット (十四才)

金の星  
銀の星  
青い星  
どの星  
私を見てゐるの

夜道

愛知縣丹羽郡古知野校 大池逸郎

よーさり  
提灯ともして  
歩いて來たら  
あんよの上へ  
蛙が一匹  
飛びのつた

ひよっこ

鳥取市粟谷町校尋六 廣谷珠枝

まつ晝に  
ひよつこの所へ  
餌をやりに行つたら

二匹とも目々をつぶつて  
死んで居た

しゃぼん玉

千葉縣山武郡東金校尋五 川島やす

ふわりくくと  
大空のかすみの中  
きえて行く  
やさしくきれいに  
とんで行く

はこには

東京日本橋區濱町校尋三 小林建次

昨日一日かアかつて  
砂をたくさんかきあつめ  
山と川とをこしらへて  
今日トネルや橋などを  
買つて作ろと思つたが  
ゆうべふつた大雨で  
山も川もめつちやくちや  
ぬかみそみたいなのはこにはだ

土瓶と湯呑 (賞)

秋田市寺町五一 大橋正憲



八〇

そとをのぞくと見ると、私のすぐ弟の義行がねほけてたんすのひきだしをあけておこようしてゐたのでした。「義行なにをしてゐるの……」といふと「あんあ、ん」となきました。をかしかつたのでみんながふきだして大わらひをしました。おもしろかつたことや、つらかつたことはわすれられせん。

僕のいたづら

京都府中郡三重小學校高一 澁谷文明

いいきはひにおそれた蛙は、ちつとそこに小さくなつてしまひました。蛇はそれをくはえようとしてゐたが、石でつんだ所の木のはたでたべてしまひました。

大わらひ

香川縣大川郡濱野シヅ引田校尋四

ある晩、おかあさんやおとうさんとみんながかやの中へはひつて、よこになつてゐました。ふと、ガタンといつたので

しまつて、全速力ではたけめがけて逃げた。そこへ花江さんが通つて、蛇の背を踏んですべつて蛇の上へしりもちをついた。五郎さんの顔は見る／＼青くなつた。花江さんは大きな口をあけて泣いた。

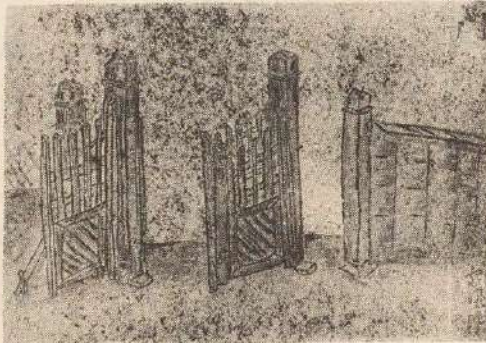
どんなでせう

東京市麹町區城井安子 一ノ五尋四

私は昨日、金の星の七月號を見てゐますと、どくしやだよりに、私の名がでてゐました。一生けんめいによみかへしては、笑ひ、よみかへしては笑ひしてをりましたら、御母様「何がそんなにおもしろいの。」とおつしやいました。それでさつそくお目にかけてよろこんでいたゞきました。御姉様は「どくしやだよりぐらゐだれだつてゐるわよ。」とおつしやつたけれど、もうむちうで東京城井安子のかつばんを見てをりました。今まできがつかなかつたんです。するぶんのんきでせう。それにしても、これだけでもこんななうれしいんですもの、外の綴方や蓋がだしていただけたらどんなにうれしいでせう。どんなにうれしいでせう。

(八月三十日)

門 (賞) 甲府市成田町二七 宮澤誠



私の學校

愛知縣 伊藤正之助

わたしの學校が  
ねんねして  
ボブラにだかれて  
ねんねして  
わたしの學校が  
ゆめみてる  
ボブラのゆめみて  
ねんねして

尻きれ蜻蛉

長野縣 茅野鶏助

尻きれ蜻蛉  
かわいそな蜻蛉  
かじとれなんて  
ひよろひよろまつてつた

七の星

神奈川県 飛田のぼら

かるかやきやうすまきの上  
ちらく光る七つの星が

鼻高さん

(少女自作)

鈴木キク子

高子さんは真によく出来る子でした。中  
も算術さいほう唱歌が一番とくいでありまし  
たので、いつても「私程えらい娘はあるまい」とい  
ふやうな事をいうてゐました。それで友  
達は高子さんの事をかけて「鼻高さん」とよん  
で居りました。  
或る日、高子はまごによりかゝつて、もう  
ぢきしげんだが私などは勉強しなくとも一番  
にきまつてゐると、思ひながらいつかうとう  
とと歌りかけました。  
『高子さん、』とよぶ聲に目がさめました。  
するとへんなおばあさんが銀の杖について立  
つて居ます。『あなたはだあれ』とききすと、  
おばあさんは『高子さん、あなたは太へんな  
にか出来るさうですが、チョット私の家にき  
てくれませんか』と申しました。  
高子はほめられたうれしさに、おばあさん

童謡四篇

大阪府 小林園子  
小林千賀子  
小林章子

暗い野原で  
草をたべてる馬  
空は高いよ  
夕方ひまはり  
お月さんの出てくるのに  
あつちむいて立つてゐる  
あつちを見ても  
こつちを見ても  
ちやんとならんだ  
稲はたけ  
風がさはら さはらと  
来る時に

おほきな星が  
ちひさな星が  
仲よくならんだ

機織りバツタ

横濱市 岩澤秋風

バツタバツタ  
機織れ  
ギツタリバツタリ  
おバツタさん  
反物何反織りました

なぎさ

茨城縣 村山英夫

とんとん 外山に  
鼻が啼いた  
磯の明神様さ  
灯がついた

かはいゝ花

長野縣 河野陽路詩

赤い花が  
のび上つて見てる

の家について行きました。おばあさんのお家  
は、三角の青い家で森の中にあつました。と  
びらをあけると中に三人の女の子が青いきも  
のをきて机に向つて居ました。おばあさんは  
やがて三人の子と高子に向つて「此の算術を  
おやりなさい」と、一枚の紙を高子にくれました。  
三人の子はたちまちの内に答へを出しまし  
たが、高子はむづかしくてやり方さへ分りま  
せん。おばあさんは「そんな算術が出来なくて  
自まんするのばなまいきだよ」といつて銀の  
杖をふり上げて高子をぶらしました。高子はく  
やしさに涙がホロ／＼こぼれました。  
『其れではこれで單衣をぬつてごらん。』と、  
こんどはかたい板のやうな布を出しました。  
高子は指に豆の出るほど一生けんめいにぬひ  
ましたが、どうしても針がとほりません。お  
ばあさんは『其れでお針自まはなまいきだ  
よ。』と云つて、高子の手を針でチク／＼とさ  
しました。其の次は子供と一しよに唱歌を  
歌はせられました。三人の子供の聲の高く  
てよい事は、高子なんぞは足もとにもおひつ

重たさうにした  
稻の實

アメフツツ  
イハサブシキ  
コオバナラエナレバ  
ビイ／＼トナル

あねむり

東京府 青野けい子

花や舟こぎ  
どち行くの  
ゆめの小人に  
つれられて  
花や舟こぎ  
どち行くの

蛙

茨城縣 瀬崎清

たんほの蛙の  
ばかばやし  
お月さんが



何見てる  
洗む夕日を  
のび上つて見てる

お寺の雀

山形市 渡邊 増三

お寺の小雀  
ねんねしな。  
ほんほこ木魚は  
もうならぬ  
さみしい 小雀  
ねんねしな。

日暮らしの唄

東江市 大木はつゆ

今日も亦  
ひぐらしの唄を  
聞かなくて  
かなかなと  
あの子が唄つて  
くれるのよ  
今るれば  
丁度七ツに

なつてたわ  
母さんを  
戀し戀しと  
泣く唄よ

つんやの鳴く夜

鳥取縣 原田 幸則

ツ、ツ、ツンヤ  
ツ、ツ、ツンヤ  
窓から涼しい風が吹く。  
ツ、ツ、ツンヤ  
どつから鳴くの  
窓から鳴くの

ほぼづき

函館市 志村 麗子

青ん坊のほぼづき  
寝てたとき  
母さんのゆめ  
みてたとき  
青ん坊 なみだで  
目がさめりや  
眞つ赤なおべゝを  
着てたとき。

きません。

又ひどいめにあはせられてはと思つて、むちうで解をはり上げました。まり解を出したので血をばいて氣絶してしまひました。と思ふとハツと目がさめました。今のはまつたくゆめであつたのです。  
それから高子は、心を入れかへてひたすら勉強をげました。

紅葉と銀杏と

大塚 好之

或る秋の日の事でした。蠶断はキリギリスキリギリスと鳴いてゐます。  
森の紅葉や銀杏は、今迄の緑の着物を捨てて、紅や黄の美しい着物を着ました。紅葉は銀杏に向つて、  
『銀杏さん私達は、こんな美しい着物を着てゐるのに、お宮の前の松は何時も汚い着物を着てゐるわ。』  
ほんとに變な方、あんな汚い着物を着てゐるんであるなんて。』  
と森の中で大變な評判になりました。  
蠶断は紅葉や銀杏の枝の上で、とくいのキリギリスと歌を唱つて居ました。  
松は此の事を聞いたのが聞かないのか、一向が氣でした。さうする内に段々と過ぎ去つて、寒い北風がヒュー／＼と吹いて來だしました。  
或日『ア／＼』と森の彼處此處に哀れな叫び聲がしました。  
それは銀杏や紅葉でした。  
今迄の美しい葉は、一ひら、二ひらと散つてしまひました。  
また蠶断も秋の時分歌ばかり唄つて遊んでゐたため、凍え死にしました。  
その時お宮の前にある松は、カラ／＼と笑ひながら、  
『お前達は今まででい深をしたから今その報が來たのだ。』  
と申しました。  
銀杏や紅葉が枯れ蠶断が死んでも、松は相變らずお宮の前に立つてゐます。

きいてゐら  
おほしさんと  
きいてゐら

朝

千葉縣 飯田 好周

私がかやから  
出ようとしたら  
だれだか  
ハーモニカふいてゐた

多摩の學校

山梨縣 五味 久春

多摩學校ハイヤンバイ  
ドツカライツチモイヤンバイ  
タダ下小宮ガ  
トホイバカ  
ドツチカラクルニモ  
ハシガアル

やみよのうさぎ

和歌山縣 高井 靜枝

やみよの兎どうしてゐやる

白いべ、きてやすんでゐやる  
青いお星様  
うたつてよ をどつてよ  
たけやぶ

奈良縣 藤熊 トシエ

うちのたけやぶ  
すすめやぶ  
いつもちゆちゆ  
ないてゐる

夕日

長野縣 小林 マサ子

夕方日がさしや  
赤くなる  
鳥が 山へ  
飛んでつた

お菓子

山梨縣 小尾 よし子

菓子屋のたなに  
ならんだお菓子  
赤いお菓子が  
一ばん賣れた。

### ◆野口先生の童謡講演旅行◆

此の月の講演部は野口先生が主に御活動になりました。先生の「童謡教育」に就ての御講演は各地で非常な歓迎を受けました。神戸先生は十月三十日茨城県竹原村小學校を手にはじめに各地で童謡の講演をなさいます。野口先生から講演に就て次の通りの御通信を受けました。

### 野口雨情

◇京橋こども會(東京) 九月廿一日午後六時より、柴田武福、江口雄一郎、佐野正明氏がたよつて設けられました。京橋こども會の發會式が京橋會館で開かれることになりました。私も當夜は「童謡教育の實際効果」についてお話をする約束になつてをりましたから定刻に出かけてまゐりました。

講演者控室には、律動遊戯の大家麴町小學校長の土川五郎先生と日曜學校で名高い高崎龍橋先生のお二人がお見えになつてをりました。土川先生と律動遊戯の事や子供に與へる童謡のことについて、

いろいろなお話をいたしました。又高崎先生は沖野岩三郎先生のお友達で御座います。そして「金の星」を愛してゐて下さるお方で御座います。私はこの夏、沖野先生の信州沓掛千ヶ瀧の別荘で齋藤佐次郎先生と御一緒に楽しい一日をすごしたお話を致しますと高崎先生も、沖野先生の千ヶ瀧の別荘は、後に淺間山があり、遙か向ふに日本アルプスの槍ヶ嶽の連山が見え、軒の下から廣々とした曠原の気分がみなぎつてゐて、ほんたうによい別荘ですと申されました。さうしてゐるうちに會が始まることになり時間の都合か

くれたのであります。私は、郷土童謡を主張して一人ぼつちで今の童謡界に立つてゐるのも、私が生れた故郷の土と自然とが私をさうさせたこと、考へられます



(京橋こども會に於て「金の星」の童謡を歌つてゐる少いさん達)

手賀小學校は、沼の岸の森の中に建てられてある田舎には珍らしい程の立派な校舎であります。大勢の子供さん達は私の姿をみて、ほんたうに喜んでくれました。(十月廿八日手賀小學校にて報告)

ら、土川先生、高崎先生私と云ふ順序で講演を致しました。ヴァイオリンの獨奏だの「金の星」童謡の合奏だのがあつて、盛んな會でありました。(九月廿二日報告)

◇淺草童謡研究会(東京) 淺草童謡研究会は、この春から毎月一回づつ、千束小學校で開かれてをります。十月の例會は二十日の午後三時半から開かれました。この日もお集りになつたのは、同校の校長先生を始めいつもお見えになる先生方がありました。中山吾平先生が「螢」と「黄金蟲」の御自作の二曲を演奏して下さいました。青柳、坂井兩先生から會の報告がありました。各先生方の創作童謡の互選があつて、入選の童謡について私が感想を申し上げました。金の星童謡欄で皆さまもお名前を御存じの筈の同校出身の、柴田けい子さんが、この日も来て下さつたなぞ、ますますこの會は盛んになつてまゐりました。(十月二十一日)

### ▼講演の御招聘に應じます▲

「金の星」講演部は童謡童謡の新しい運動の先頭に立つて目覚ましい活動をつやけて参りました。今後ともいよく活動をつやける覺悟です。講演御希望の方は左記の規定を御覽の上御申越して下さい。

#### ◇金の星講演部規定◇

- ◇「金の星」は新しい時代の童謡と童謡を普及するために講演部を設けてあります。
- ◇講師は、童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり御希望に應じて講師が出張いたします。但し他に講師のある場合はお断りいたします。
- ◇講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく十五日から二十五日までの間に制限いたします。
- ◇講演をお望みの方は、東京市外田端三五金の船社へお申込み下さい。
- ◇講師に對しては、市内ならば車代、市外ならば往復旅費、宿泊を要する場合はその宿泊料を依頼者から御支辨下さい。

◇手賀小學校童謡會(千葉縣、東葛飾郡手賀小學校)に、十月二十八日午前十時より童謡會が開かれました。私は上野驛から成田線の湖北停車場へ着いたのは八時頃でありました。停車場には、手賀校の塾谷先生が迎ひに来てをられました。私は染谷氏と一緒に手賀沼の渡し場から船に乗つて向ふ岸へつきました。沼の秋の静な岸に、翡翠の飛んでゐるのを見て私は、少年の頃、故郷の古沼で菱の實を採つて遊んだことなどを思ひ出して懐かしさを感じました。私の生れた村は、常陸國の東北のはづれの方でありました。家の数が百軒あるかないかの淋しい村でありました。秋になると雁がそろつて渡つて来ます。沼の中の菱の實も色づいて来ます。私は、今でも雁がそろつて渡つてゆくのをみると懐しくて仕様がありません。沼を見るといつも故郷が懐しくなつて来ます。雁や沼は子供の私に一生忘れられない出来事深い、印象を與へて



信 通

自由畫選評

山 本 鼎

△大橋正憲君の『土瓶と湯呑』なかな／＼達者な鉛筆畫だ。形式もまづよい。缺點は調子のない事だ。△宮澤洋君の『門』の形、其の感じがよく描けて居る。しかし右手の扉の處は力が加わってぐ／＼になつてしまつた。△七歳の娘ちゃん、高木のくに子さんの毛筆は面白い。こせつかない筆筆に佳い味があつた。多分姉さんでせうが、しげ子さんの繪は何處も此處も濃く描いて、墨氣といふやうな感じがなつちまふのです。しかし墨繪は小生大いに賛成です。△田原ヨシ子さんの、寫生の肖像なかくよく描けて居ますが、黄色が邪魔になつて居ます。あの黄色が繪を怪奇にしてしまひました。△日本文代さんの『朝ちゃん』印象のすつき

綴方を讀んで

選 者

△賞の第一にあげた『引越して行つた友』は氣持の十分に出てゐる文章だ。だから生き生きとしてゐる。魂の入つてゐる文だといつてもよい。たゞ事柄だけを書いたわけに感じの出でゐないヌケガラのやうな文章の多い中では特に目についた。△『はれた鐵郎』これも魂のある文だ。夢を見るあたり少し作りものゝあとがあるやうな氣もするが、壊れた人形を品に埋めると畫が来てチュー／＼なあたりひどくさう。△『私の家』思ふさま、少しのかざりもなく、ほん／＼書いてゐる處が面白い。お父様の悪口をいふのは感心しない。修身の方からいふとセロといふ點をいづく處であるが、綴方の方からいふと思つたまゝを思ひきり書いてゐるので、賞となる。△『父の心配』長すぎて全部をのせ切れないのが残念だ。『私の家』とちがつて、この方は文章が大變上手だ。上手すぎる位だ。それだけに少年少女に特有の細な巧みが出てゐないが、しかし、これも一つの綴方の書方である。文章ほどの書方が一番いいといふ事は出来な

幼年詩選後

若 山 牧 水

今年はどうしたのか、すつと年のすくないといふ人たちの歌が無かつた。みんな、兄さんか姉さんたちのものばかりであつた。大きい人たちのものもいけれど、ちひさい人たちのものがつと面白い。どん／＼おつくりなさい。私のちひさいなお友だちよ！ 推薦した新津さんの『病氣のをぢさん』はすげえものだ。子供の作とおもへぬ位、よくおつていて詠んで居ます。他に『行者』といふのがあつた。お経をよんで、行者さんの首すぢに、敵が血を吸うてゐる。これもなかな／＼尋常四年の人の作とおもへない。栗原君の『私』は實に氣持のいいものだ。あつさり自分勝手に云ひたいことを云ひながらそれで立派に急所をつかんで歌つてゐる。その人の好きな様に書いていゝのであ

る。農家の庭の静かな景色と、その中で動いてゐる少年達の氣持がよく出てゐる。△『よつばら』見苦しいよつばらひの有様がよく出てゐる。ちつとも無駄な言葉がなくつてよい。この文などは、深山の言葉をつかはないで、巧く書いたものとして推薦することが出来る。△『存犬』は特にすぐれた文章とも思はなかつたが、無難な作です。なだらかなので氣持ちよく讀めます。氣持ちよく讀ませる事も大切なことだ。△『酒屋のお祖父さん』は滑稽味のある面白い文章であつた(齋藤生)

童話選評

齋 藤 佐 次 郎

△今月は二月分の童話が集つてゐるので非常な数がありました。作もなかな／＼ありました。二十五篇の作を挙げます。中で最も目についた作者の名を挙げますと、伊藤温子、土橋力、今岡伸、木村忠一、三谷公臣、牧野眞砂子、伊藤一雄、鹿山映二郎、都外川津、大橋正憲、永橋卓助さんなどで、△『ちんばを』が最も出来がいいと思ひました。童話としての必要な條件をかなり完全に具備してゐると思ひましたので、本月の推薦とし

新しく出た本

八八

◆『世界子守唄集』(小林愛雄先生譯) 獨逸英國兩國日本をはじめ各國の有名な子守唄十九曲を集め一冊ごとに小林先生の名譯になつた唄と曲とを添へた美しい本です。小林先生はこの方面に深い研究を持つてなれる方だけに、集められた曲はどれも立派なものばかりです。この頃深山の曲譜集が出ますが、これ程力が入つたものはないといつていいでせう。音楽に理解のある家庭では是非そなへなければならぬ本です。裝幀は本誌の岡本先生が非常な苦心を以てされましたので、見るからに胸のすく感じがします。(四六判差本三八頁、定價金一圓、東京神田表神保町東光閣書店發行 振替東京一四七九六番)

◆『不思議なぶどう』(遠藤しの女史作) 遠藤女史は面白い童話を書く人として知られてゐます。この本には『不思議なぶどう』をはじめ十一篇の面白いお話が集められてあります。中でも『電氣園旅行』や『春夫の地獄見物』など特に面白いものです。秋田雨雀さんの推薦が添へて面白いです。童話の大好きな太郎さんや花子さんが讀んだら、さぞ大喜びでせう。(四六判二〇七頁、定價金壹圓、東京麻布區新網町竹内書店發行、振替東京一七四四番)

◆『ステイヴンソン子供の詩』(葛原蘭、福原麟太郎共譯) 『金の星』誌上でたび／＼内藤豐雄先生の譯で見たことのある英國のステイヴンソンの童詩集、子供の詩、三十四篇

を全部譯したものです。一々原文の英語が添へてあるので英語の研究者には一層の便利があります。ステイヴンソンの童詩は、殆ど世界の各國に翻譯されてゐる程有名なもので、童話の研究者は是非一度は讀んで置く必要がありませう。子供の心持を歌つたもので、これ程すぐれたものはありません。讀んでみると、大人でも自ら忘れてゐた昔の夢を思い出させられます。裝幀は本誌の岡本第一先生です。(四六判九十五頁、定價金一圓廿錢、東京神田表神保町東光閣書店發行 振替東京一四七九六番)

童話掲載外佳作

△魚の國(今岡伸) △狐の乙姫様(木村忠一) △三人の男(三谷公臣) △鳥の親子(大橋正憲) △迷子の山羊(永橋卓介) △狐の仕返し(牧野眞砂子) △蟬と蝶とが泣く話(伊藤一雄) △桃の塔(鹿山映二郎) △正見さん(都外川津) △龜(直江美智雄) △善哉姫と森姫(岡野千代子) △成る虫の話(江口準一郎) △小風の宿替(花世明政子) △水とゲリヤ(吉田政造) △沼から出たちんばの話(八方易久) △月の國(荒井峰三) △吐金虫(長谷川好延) △オレヤベリな龜(鈴人生) △長者の家(青木武) △生らね枇杷の木(田中ひとし) △意地悪娘(金丸菜子) △蜘蛛退治(北田初子) △靴下と皇子の話(松尾英雄) △笑ひの子(大森花江) △鳥と蝶の話(松下胤信) △赤い花と青い草(高五郎) △きこの化けもの(櫻川春枝) △後悔(動方生) △ミイの女神(高木敏

ました。一體に土着さんは上手で、器用な人だ。上手すぎて失敗して、時々筋だけのつまらないものを書くこともありすが、今度の『ちんぼ雀』は非常に成切してました。『伊藤温子』さんの作は豊かな藝術味を持ってゐる點でいつも注意をひかれてゐます。この人はいつも暗い世界の動物や人間に興味を持つて書いてゐますが、この事だけでも既にこの人の性格に藝術味を感じます。しかし、伊藤さんの書いたものはせつからで、少し亂暴な處があります。男性的にぐんぐんと思ふさま書いてゐる所は如何にも愉快な氣がしますが、童話として見る時には讀者が子供だけに少し丁寧を書く必要がありすが、あれだけで結構ですが。この點に注意されたらきつといふ童話が出来るとは相違ありません。



童話の作者 木喜美子様

△今岡伸さんの『魚の國』はまとまりのあるいゝ作でした。しかし、題材が少しありふれ過ぎてゐる事と、散漫なところが缺點でせうが、兎に角佳作です。

△木村さんの『狐の乙姫様』は前書きだけが餘計物の氣がしました。作者はあれで特に新味を出すつもりなものでせうが、すぐと本文の語

とでは失敗の作だと思はれました。一層の御努力を望みます。

△三谷公臣さんの『三人の男』は極く昔からありふれてゐる話ですが、前半はなかく大きな感を持つてゐる割に後半が非常にあつけないものでした。

△この外、なほいろいろ感想を述べたいので、餘白がないので、これで筆を止めます。

童話の選後に

野口雨情

△詩人でなくては童話の指導が出来ないと云ふ論辯について、本誌前々號の續きを申し上げましよう。

△いつたい、詩人は如何なる人を指すかと云ふに、内容を音楽的旋律の言葉によつて云ひあらばし第三者に傳へることの出来る人

を云ふのであります。又、詩の鑑賞家とは如何なる人を指すかと云ふに、詩としての價値のあるなしを判断することが出来るだけの人を云ふのであります。ですから、鑑賞家は必ずしも詩人であるとは云はれません。つまり童話の指導者は鑑賞家の立ち場であるといひます。詩人でなくともよいので、歌詞のよしあしの見分けさへ出来る人ならどなたでもよいのであります。

△次は、童話は兒童教育上必要がないと云ふ論辯について申してみましよう。時代は藝術教育を要求してなります。倫理教育、修身教育

金の星 誌友募集

「金の星」の誌友には、いろいろの特典が御座います。今や月々非常な勢で増加いたしました居ります。誌友規則は金の船社宛にお申込み下さいますれば、すぐお送りいたします。どうぞ奮つておはひり下さいませ。

では情操陶冶の眞の教育は出来ない、どうしても藝術の力によらねばならないと云ふのであります。藝術の力が大切である限り、私共が主張する童話教育も必要なのであります。童話は兒童教育上おろそかにすることは到底出来ないものであります。何故なれば、童話は、藝術教育の第一歩であり、その全部と見ることが出来るからであります。童話によつて指導方さへ誤らなかつたならば、完全な藝術教育が出来るからであります。童話は教育上不必要だなど云ふのは、根柢のない愚論であり、詭辯であります。

△それから、調律にのみ重きを置く童話は内容が空等であるから藝術的無價値であるといふ論辯について申上げましよう。調律にの重きを置けばどうして内容が空等になるでせう。空等とは、からっぽの意味です。こゝに云ふ調律とは、言葉の音楽的響きのことです。響きそのものは必ず内容を持つてなります。響きによる音の表現は、内容の表現であるので、言葉もそれと同じであります。調律にとりもなふ内容の存在を知らないお方には、童話のお話をした所で無駄ですが、童話は歌ふことが出来るから必要なのです。歌ふには歌

九〇

前から少年少女諸君の自作童話を募集いたしました。八月號からいゝ作のある時には毎號出す事にきめて、新たにその欄をつくりました。奮つて御投稿下さい。記者

少年少女童話募集

▲童話掲載外佳作 ○一部母さんたもと (星野としを) △夕立雨 (岡添信次郎) △みなし子 (熊野まんなる) △演の夕べ (村山英夫) △蜂 (何野陽路詩) △野ぶどう、飛田のぼら △磯のかぞへごと (渡邊三三) △西瓜と蛙 (原田幸則) △母なし狐 (桑原長太郎) △燈の提灯 (西形龍一) △鈴虫 (桑原長太郎) △店屋あそび (川瀬作太郎) △お寺のくるみ (天野貞三郎) △秋の夜 (渡守一) △貝の夢 (桑信男) △星 (遠藤春汀) △朝鮮小牛 (濱田秀雄) △海邊の松籠 (福多眞砂子) △驚のボツボ (杉山たつ子) △お山のきり (鈴木絳國) △かゞし (八方易久) △蝶、井上つよし) △雨の日 (山元秋徳) △風 (鈴木昇) △雀 (岡野千代子) △時計 (藤原義泰) △かたつむり (木村泰次郎) △朝日とお月さま (横垣美枝子) △ウサギサン (鳥村キツ子) △スキー (兒島ハルミ) △鐘 (糸井文作) △タケぐれ (池田

▲自由畫掲載外佳作 △スキップ (今泉力三) △男 (小安三郎) △病人 (長谷川よし子) △僕の時計 (前田孝四郎) △府替住宅の一隅 (片桐五) △静物 (眞川芳男) △風景 (山田明) △はだかの弟 (高橋ひさ誌) △えぞ菊 (失名) △婦女 (黒田猛) △讀書 (鈴木利明) △人物 (高木しげ子) △夜の江戸川邊 (渡守一) △着物をかけてひる影の母 (永井善太郎) △夜の大曲 (渡守一) △姉さん (渡邊恒彦) △猫 (日蓮文代) △鮮女の米搗 (吉田美津子) △御母様 (吉田菊枝) △しすまさん (七種カネチ) △細谷君 (齋藤實) △風景 (三浦英根子) △インキとペン (磯清) △新聞 (牧野忠之) △おとうと (高橋ひさ誌) △アゲキ (齋藤正夫) △私のかげん (伊東郁子) △横濱の文字さんと道子さん (失名) △夏の三保 (山本錦次郎) △てすり (三田好子) △かみかみ向つて見てしゃべりした私とお人形の京子さん (竹川久子) △亡き兄の肖像 (宮代信雄) △初秋の夜 (松尾長太郎) △田舎の景風 (橋本馬太郎) △月 (大橋正憲) △五郎さんのお家 (澁谷文明) △休ケイ室 (横山露草) △なばさん (今井君子) △洗濯 (七種カネチ)

文ではいけません。散文でない限り調律に重きを置くのは必然のことではありませぬか。但し、私共の云ふ調律とは、在来の七五調とか五七調とかの因りれた調子を指すのでありませぬ。ただ、歌ふことが出来得られればよい音楽的旋律を持った言葉な云ふのであります。ですから、私共は、斯様な説辯は、藝術とは如何なるものかさへわきまへぬ人達が考へてゐる童謡観だと思つてをります。

△今が私の一年中で一番忙しい時です。新年號や雙六を一生懸命描いてゐる。真最中で暮れもお正月ももう私の所へは来てゐます。皆様より三月も早くお正月気分になつてゐます。餘り疲弊しますと一寸の間庭へ出ますが、庭には夕顔がまだ咲いてゐます。葉鶏頭もまだ仲々美しく、すゞきの穂も綺麗です。紫菀の花も可成りくたびれてゐますがまだよい秋の感じですよ。今の今までお正月でしたのに急に秋に逆もどりますので變な気分です。

# 新年號豫告

わが金の星は大正十二年の新年號よりいよいよ一大發展を期するため、編輯の面目に大改革を加へました。左記の作家の顔ぶれと題目とを御覽下さい。何れも新年にふさはしい面白い讀物ばかりです。尚、今度の新年號には本誌の誇りたる岡本歸一先生が、全一ヶ月間の不眠の結果になつた特別大附録雙六「おとぎ影畫雙六」を添へます。

○京都の三谷公巨様、毎度御便りを有難う御座います。前に申し上げました様な次第で、御返事も差上げずにありますので不致取御詫び申上げて置きます。何れ仕事が一落つきましたら御返事差上げます。  
○大阪の都外川 淳様、小島純様、御手紙や大毎の名畫展覽會の目錄や印刷物をわざわざ御送り下さいまして、有難う御座います。厚く御禮申上げます。私の所へも招待状が來ました。開けて見ると西洋へでも行つて見なければ見られない名畫ばかりです。と並べて書いてあります。飛び上る程喜んだのですが會場が何所とも書いてなくて大阪毎日新聞社としてあるので、大阪のぢやない大毎の主催で、東京日日新聞だらうと思ひましたが、よく調べて見るとやっぱり大阪です。それでもどうかして見に行きたいと思ひましたが、新年號や雙六が邪魔してゐて、如何しても都合が出来ないので思ひ切つて見に行く事を止めました。残念でなりません。

## 幼年詩掲載外佳作

- △秋のお塗 (佐藤芳郎)
- △お馬の足 (國分重三)
- △おいらんさう (山田秋子)
- △坂道 (半澤友子)
- △學校の雀 (佐川秋四郎)
- △柿の木 (大川千秋)
- △壁の色 (糸川正一)
- △頭 (長山安一)
- △にはとり (花井實子)
- △木の葉 (三宅幸治)
- △物置のれずみ (山脇榮次郎)
- △ナツトヤ (齋藤一郎)
- △月見草 (和田賢二)
- △百姓 (竹原妙治)
- △秋の雨 (本木隆三)
- △飛行機 (菅原外一)
- △金の星 (針生重)
- △大と風 (雨宮初子)
- △川原の扁 (向田俊男)
- △カルロス (鎌田八重子)
- △氣笛 (芝浦修三)
- △お人形さん (逸見芳夫)
- △ゴブラの木 (今川遊)
- △お寺の坊主と鐘木 (三越たけ子)
- △蜘蛛の頭 (山川純一)

- △綴方掲載外佳作
- △大賣出し (公門文子)
- △お盆 (高知尾義滿)
- △白雪 (小澤富惠)
- △私の失敗した事 (伊藤朝)
- △馬やごと (近藤浩)
- △恐れかけた時 (上村賢三)
- △かくれんぼ (澁谷文明)
- △去年のお祭 (宮崎みどり)
- △眠入器 (山中寅松)
- △月見草 (川久保ミツイ)
- △朝起きて (日淺文代)
- △或日の事 (原田シナ)
- △たまたげた時 (西坂ヒサ子)
- △なかしかつた (渡邊キタ子)
- △夏の朝 (小笠原繁)
- △夜明顔 (宮道マサ子)
- △月見草 (松本シヅエ)
- △雪の朝 (矢名)
- △秋野 (武田ハル)
- △うつつ繪 (橋本馬太郎)
- △私のうちのすゝめ (加藤三三)
- △木にいつておよいいた (關口正雄)
- △雨と風 (山ロトメ)
- △おひこ (小美濃ヨネ)
- △先生をむかへに (赤萩和夫)
- △夕立 (齋藤延雄)
- △らいまなつた時 (栗野タレ)
- △竹の子 (栗野タレ)
- △お母ちゃん (栗野タレ)

- 李如松のはなし (童話)..... 沖野岩三郎
- 狐の裁判 (長篇童話)..... 小島政二郎
- 童話..... 西條八十
- 山のお爺さん (童話)..... 豊島興志雄
- 水滸傳 (歴史童話)..... 宮島資夫
- 敵の討てない熊王丸 (歴史童話)..... 霜田史光
- 貝遊び (童話)..... 野口雨情
- 童謡作曲..... 本居長世
- 順禮の願ひ (童話)..... 水谷まさる
- 童話..... 楠山正雄
- 雁が来た (童話)..... 若山牧水
- 釋迦物語 (長篇童話)..... 齋藤佐次郎
- 辨慶の鐘 (名所廻り童話)..... 野口雨情
- 滑稽畫ばなし..... 岡本歸一
- 香爐の行方 (長篇童話)..... 森川一郎

# おとぎ影畫雙六

岡本歸一畫

- 井貞子 △海國民となるには (佐藤房吉)
- 夕方 (玉井孝好) △私の祖母さん (日淺文代)
- △どてに遊びに行った時 (秋山乙女) △大風 (山田明)
- △濱へおよぎに行った日 (小澤朝子)
- △海水浴の日 (岡田スミエ) △しよとおと (別宮雙子)
- △アテルニイサン (宮道マサ)
- △おたんのやれふき (阿部早子) △おちちなとしよう (別宮サスエ)
- △サアシナツヤ (青井久子) △きしやとり (宮道マツエ)
- △海に入るまで (小田信行) △水を流した私 (今井ゆり)
- △秋の夕ぐれ (中島敏子) △思ひで (水落富美子)
- △秋の夜 (田中正一) △おしやうれう様を向ひに行く (山田乙女)
- △金の星誌友 △大阪 海アイ子様 △大阪 丸井重子様 △仙臺 千葉次男様 △仙臺 石川進様 △神戸 兵衛幼年日曜會 △横濱 黒部妙子様 △福岡 岸本武男様 △大阪 井口兼子様 △長野 常栄様 △東京 横手邦隆様 △東京 八重子様 △横濱 川上成多様 △東京 北田初子様 △山口 村上楚山様 △宮城 岩村正夫様 △和歌山 小形治郎様 △高知 上村萬六様 △福島 上野美智子様 △北海道 北川貞夫様 △京都 富士川三郎様 △静岡 一條忠二様 △神奈川 安藤正子様 △長野 小林敬子様 △長野 山崎五郎様 △長野 市岡邦彦様 △大阪 山崎太郎様 △鹿島 廣瀬一藏様 △岡山 遠藤良子様 △宮城 鈴木辰一様 △熊本 平山京子様 △千葉 石川隆太郎様 △千葉 長谷川次郎様 △茨城 望月清三様 △朝鮮 今村とし子様 △朝鮮 高橋在雄様 △滿洲 川田兵太郎様 △長崎 和泉二郎様 △埼玉 野口幸様 (以下次號)



りよだ者讀

▲記者先生、お喜び下さい。私の友達の太田君は私の勤めを容れられて、今度「金の星」の誌友となられました。私はこんな嬉しい事はありません。これから二人でどしどし投書するつもりです。「金の星」も一號と益々立派になって来ましたが、表紙と云ひ、口繪と云ひ、童話と云ひ、童謡と云ひ、昔な詩的なものばかりです。記者先生、先日文部省が統計をとるために全国の中学生がどんな雑誌を読んでいるかと首ふ事を調べた事を知つてなされました。私はその時第一に「金の星」と書いてやりました。ほんたうに私は「金の星」に對して、これといふ程のお願ひはありませんが、童謡の行數を多くしていただきたい事です。まことに失禮ですがどんなものでせうか。是非お願ひしたいと思います。(杉山たつ子)

▲小島政二郎先生と宮島妻夫先生にお尋ねします。これ「金の星」といふのは何處でせうか能登の羽咋郡大宮の海岸に立つて見ると見えたと書いてありますが、それは本當ですか。また宮島先生「石臼の上臺のない村」が日本地圖の下の方にある暖い國にあると書いてありますが、それは何處ですか。私は二つとも是非行つて見たいのです。両先生！是非誌上で御返事下さい。(山梨 山口豊夫)

▲齊藤先生「カラスなぜ啼くの……」や「愛の歌」などの録りやさい。山口先生のお作をお慕ひ申して居る内に、幸福な「金の星」誌友となる事が出来た。淋しい十月——夜は虫が静かです。(病佐藤)

▲毎朝白い霧が流れて但馬路にもすがすがしい秋が訪れて参りました。ながらく沈黙ばかりしてゐた私も、これら一面目に本誌を見つめようと思ひます。とりわけ當地は山深い所であるだけ、純な子供が多く、教育上考へさせられる點がいくつもあり、又それだけ責任あると思はれます。よろしく御指導下さい。(但馬八咫町、森葉)

▲先生、賞品愛の歌「有がたうござい」私の下手なものを「金の星」へお送りしました。上には、こんな立派な御本を戴きまして何んとお禮を申し上げてよいか分りません。「愛の歌」はほんたうに爲になる御本でございまして居ります。(京都 野村蝶子)

▲早速編輯振りを拜見しました。榮れて崇拜する岡本先生、賞品の書及諸大面の面白い童話童謡は、他の毎月取寄せてある雑誌に比べて十倍も二十倍も優れて居ることを始めて知りました。編輯記者諸氏の御熱誠なる努力、汗の結晶なるものを具現して出来たこと、八百餘名の會員達は、「金の星」を慕ふこととせう。(神戸 有一馬生)

▲深山の賞を本日受け取りました。有がたく御禮申し上げます。岡本先生の「青い鳥」は僕が常に欲しいと思つてゐた繪畫書で、見る

其の詩的なのに驚喜しました。満天下の諸君、買つて見給へ。美麗さと藝術味のあることは實に天下第一品です。(北海道 西塚文雄)

▲岡本先生！十一月號の口繪の「牛若丸の舟」は本當に気に入りました。私はきれいな絵が好きですが、あんな面白くても大好きです。畫を見てお話を讀みたくなります。時々かういふ畫を入れて下さい。(信州 山田生)

▲「金の星」のお仲間入りが出来た事を嬉しく思ひます。私の受持つてゐる小供等は、「金の星」の来る日を待ちあぐんで居ります。「金の星」のあらゆるものが、小供の生活や小供の感情にピッタリとあつてゐるのだと思ひます。小供等も此頃は眞假に童話をつくつてゐます。そしてその態度が神々しい程なのです。(長野 山口村小學校 常喜榮)

▲僕の學校でも大へんに童謡がばやり出しました。毎朝早く起きて山へ行き、十五夜お月さん、や「青い目」の人影をうたつたままです。又先生が此間「歸る雁」をうたつたかと思ひます。これが皆「金の星」にうたつたかと思ひます。嬉しくてなりません。神野先生へもどうぞよろしく。(神戸 ひさし)

▲昭和先生、賞品を有難うございました。受取りました時は、私は嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。お父さんは「えらい、えらい」とほめた、先生やお友達まで喜んで下さりました。そしてあの「馬」の中にある武木さんまでうれしうに笑ひました。(東京 鈴木利明)

▲私は昨年田舎から出て来た少年でございませう。田舎より出たので私の眼に、都會の華かな

活動のピラ繪看板などが、どのやうにうつたててゐる。私の心は一日一日とこれらの方にかたむいて参りました。所が野口先生の童話を口ずさむ様になりましたから、私は再び元の純な少年に立ちかへりました。朝に夕に野口先生の童話を歌ひます時、私の心はみ空にかたむいて、金の星のやうに清らかなるのてございませう。(東京 純なる子より)

▲また遊びませう、左様なら  
▲「金のお星」の表紙の繪  
かはい子達の 別れの言葉  
桐の葉は散る 散る、砂丘  
金のお星は西へ出た  
また遊びませう、左様なら  
かはい子達の 別れの言葉  
桐の葉は散る 散る、砂丘  
風はふく、どこまでも  
桐の葉は散る 散る、砂丘  
また遊びませう、左様なら(瀬川路路)

▲記者様、私は「金の星」の特徵や、又実行のよい事を聞かされて、或る私の友達にたのんで、十月號を取つてみました。中では私は「沖で呼ぶ聲」や「馬鹿の三太郎」や「十人お稚子」は五度と六度も讀み直しましたが、少しもあきません。誌友の仲間に入れて下さい。(甲府 保坂八重子)

▲貴社発行の「金の星」は私の學級に於て子供が一番よく読んでゐます。月々出る讀物を持って、私の手もとにこれだけの作品が集りましたから一しよにしてお送り致します。(和歌山 明神校第三學級受持生)

▲大さう涼しくなつてまゐりましたが、皆様は如何にお暮しをおせ下さいませうか。十月號には私の童話をおのつせ下さいまして誠に有がたうございました。皆様のおかげと喜んで居ります。學校を出ましてからしばらく筆をとれませんでしたが、近頃たまに童話が書きたくなつて、一つ二つ書き初めたのでございませう。(東京 北田初子)

▲私は若山先生の童話にすつかり敬服してゐる一人です。私は本當に藝術のわかつてゐられる方だ。先生は先生の童話が一番好きなのです。先生どうか「金の星」で大に奮闘して下さい。(横浜 生)

▲記者様はじめ皆様にはお褒めありませうか。さて私は今度童話雑誌「すみれ」といふものを五六名でやつて居りますが、諸君もどうか投書して下さい。又見本誌の面白い方がありましたら、三錢切手を二枚封入して住所をくはしく書いて送つて下さい。すぐお送りいたしますから、それでは皆様さようなら。(神戸市塚本通四丁目 高橋久藏)

▲「金の星」も月毎に光つて参ります。美しい繪、面白いお話、なつかしい童話を毎月見せていただきますので、私どもは此の上もなかに幸福と思ひます。岡本先生の繪は可愛くて私は大變に好きでございます。これからますますなりませう。記者様方の御健康を祈ります。さうなら。(東京 筒井千枝子)

▲神野先生の「父戀し」を私の家では毎月来るのをおおしと待ち構へて讀んでをります。私の妹などは「ええ姉さん、伊吹子と明治はど

うなるのでせうね。お父さんはどうしたんでせう。あのお父さんはほんたうにいけないお父さんだと思ひますよ。何故居所をもつておつきりといつてよございのでせうか。と不平をいつてをります。私も成る程と思ひます。金く家族の者に心配ばかりかけていけないお父さんだと私も思ひます。記者先生に申し上げます。「父戀し」はいつ本になつて出ますか。お教へ下さい。(東京 千鶴子)

▲「父戀し」は非常な好評を受けましたので、今度神野先生におかひいたしました。面白い面白い後篇を書いていただきます。大急ぎに本になつて参りますから、十二月のはじめには發行いたします。(記者)

▲仙臺の「おてんとさん社」では今度「おてんとさん」の唄を立派に印刷して符を入れた發行されました。皆さんも御承知の通り此の唄は野口先生のお作で、作曲は本居長世先生です。ついでには、今度おてんとさん社の天江登美草様から「金の星」の讀者に限り郵送三錢だけ送れば作曲入りの此の美しい本を下す事になりました。ほしい方は仙臺市八幡町二十九番地おてんとさん社天江登美草様宛にお申込み下さい。(記者)

▲「金の星」の記者御一同様、私は皆さんがどんな顔をした方かといふことは時々雑誌に出る寫眞で知ることが出来ましたが、皆さんがどんな聲をした方かといふ事を知りませんでした。ですから私聞きたくて仕様がなりました。今度電話をかけます。かいたら皆さん是非一人々々電話日に出て下さい。出ないと怒りますよ。(東京 一誌友)

# 懸賞創作募集

## 少年少女の創作

自由畫……………山本 鼎先生選  
 幼年詩……………若山 牧 水先生選  
 綴方……………編輯部 選

〔意注〕

課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は、學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるだけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は十一月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は十二月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の船社。

## 一般讀者の創作

童話……………齋藤 佐次郎 先生選  
 童謡……………野口 雨情 先生選

〔意注〕

童話は二十字詰二百行以内、童謡は十五行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、「入選」の場合は、金の星賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。



(145)

九六

定價 壹冊 參拾錢 送料 壹錢  
 三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢  
 半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢  
 壹ヶ年分十二冊(送料共)參圓六十錢  
 但し四月號九月號は特別號で廿五錢新  
 年號は四十錢ですから、御註文の際は  
 この分だけ必ず加へてお拂込み下さい  
 振替口座東京五九五六番

〔送〕 御註文は必ず前金で御拂込み下さい  
 金 送金は振替が一番便利で御座います  
 の 切手代用は(壹錢切手)一割増しです  
 注 第何巻第何號よりと書いてください  
 意 住所姓名ははつきり書いてください  
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年十二月六日印刷納本(毎月一回)  
 大正十一年三月一日發行(一日發行)

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎  
 印刷所 東京市小石川久堅町百八番地  
 印刷人 大橋 光 吉  
 發行所 金の船社  
 振替口座東京五九五六番  
 電話 小石川五三八七番

人の噂

御手洗の濱に流れ着いた舟が、商造の持舟であるといふ事は、もう疑ふ餘地がありませんでした。けれども其舟に乗つてゐたらしい人の屍體は、何所の國の誰とも解らないまゝに町の共同墓地へ埋葬してしまひました。

後には二つの問題が残されました。それは商造も一緒に、此舟に乗つてゐて同じく溺死したのでは無からうかといふ事と、若し商造が乗つてゐなかつたとすれば、あの濱に打揚げられてゐるに多額の金子は、一體誰の所有であらうかといふ事とでありました。

式江も度々警察署へ喚ばれました。警察署からも度々巡查が来て、種んな事を調べて行きました。

さうする間に町の人達は、想像に想像を加へて、勝手氣儘にいろ／＼の噂を立てました。其の噂を聞くたびに、それが全くの嘘だとは知りながら、矢張り式江も、ひよつとしたら、そんな事では無からうかと思ふ事もありました。

或日の事、伊吹子と明次とは、學校の歸り途を、坊主山といふ小高い丘の方へ迂廻りました。すると、丘の上の小さい榎の樹の下に、十五六人の子供が集つてゐるのを見ました。

「伊吹ちゃん。大木の繁ちゃんが、活動寫眞をやつてゐるよ。御覽！ あの榎の樹に白い布片が吊してあるだらう？」

明次は小聲で囁くやうに言ひました。

『さうネ、繁ちゃん、家のお父様の活動をやるツて、熊本の静ちゃんが言つてゐたワヨ。』



伊吹子は悲しうな顔をしました。

「うん、僕も今日學校でそんな話を聞いた。あれは屹度其の活動に違ひない。行つて見よう！　ね、伊吹ちゃん。」

明次は伊吹子の袖を引張りました。けれども伊吹子は頭を掉つて、

「若しさうだつたら、私達が行つたら、直ぐ廢めるワヨ。屹度……と申しました。」

「さうだなア。」と言つて暫く考へてゐた明次は、はたと小さい手を拍いて、

「裏道から行かう！　あすこの櫛の樹の後の石地藏の所から聞いてやらうよ。」と云ひました。

「さう／＼、さうませう。」

伊吹子も明次の説に賛成しました。そして二人に身體を小屈めて、裏道を走

り登りました。

ビリ／＼……と呼子が鳴ると、今までわア／＼言つてゐた子供達は、びたりと静まりました。

「伊吹ちゃん、始まつたよ。」と言つた明次は石地藏の所から、そうツと首を伸して櫛の樹の所を見ました。伊吹子も明次の肩の後から、恐ろしい物でも見るやうに、櫛の樹の方を覗くと、繁ちやんは風呂敷程の、汚れた白い布片を樹の枝に引懸けて、細い鞭を揮ひながら大きな聲で説明を始めました。

「浦鹽商造は紀州熊野の産れであります。商造が可愛い妻や子供を残して、熊野の土地を旅立ちましたのは今より三年前の事でありました。胸に深い企みのある商造は、妻や子供の事を教會の牧師、熊田先生に頼み置き、一時朝鮮の元山港に落着きまして、ロシアに渡る便船を待つてゐましたが、折よく米國スタ

ンダアド石油會社の船が、浦鹽に参りますので、それにと便乗致しまして、たちとう目的の地に達しましたのは、此の熊野を出立致しまして丁度十ヶ月目でありました……これは汽般長徳丸が、日本海の怒濤を蹴破つて進む所でありま  
す……」

繁ちやんは、樹の枝に懸けた白い布片を、鞭の尖で巧みに波のやうに動かしました。そしてビリ／＼と呼子を吹いて、

『これで第一巻の終り……』と云ひましたが、子供達は本當の活動寫真でも見るやうに、拍手しながら其所に立つたまゝ次の説明を待つてゐました。

ビリ／＼と笛が鳴つて、繁ちやんは又説明を始めました。

『これは露西亞領シベリヤの曠原であります。野越え山越えて、此所までやつて来ました商造は、計らずも此所で金鑛を発見致しました。……これは大變な

ものだ 直様此の事を浦鹽の日本鑛業會社へ通知せねばならぬ と、商造

は直ちに元來た道の方へ引返ししました。……暫くあつて其所へ来ましたのは、シベリヤの忠次と申しまして、全身に數十ヶ所の刀傷を受けてゐる程の惡漢：

……此の忠次、同じ、金鑛のある事を知りまして、(旨い！ 此事を日本鑛業會社へ通知すれば少くとも一萬や二萬の金は貰はれる！)と、にこ／＼笑ひながら

南の方へ急ぎました……此所は浦鹽日本人街なる、大日本鑛業會社事務所の一室……(では社長さん、あの金山掘る事に決定致しましたなら私に何れ

だけの謝禮を下さいますか)(さうだね、實際それが金山であれば、あなたに一萬圓差上げませう)(一萬圓？ それは少い、二萬圓頂戴致したい)(では一

萬五千圓にしよう)(宜しい一萬五千圓で承諾致しませう)……其所で社長は契約書を認めまして商造に渡しました(社長さん、では明日御案内致しますか

ら）（宜しい、本社の事務員を派遣する事に致します。）……商造が事務所を出て行きます時、門の所でばったり行き會つた一人の男がありました。二人は互ひに見返りながら内と外に別れました。……社長が電話をかけて、明日の午前十時までに、シベリヤへ出張させる専門の技師と萬事の打合せをしてゐます所へ、入つて來ましたのが悪漢シベリヤの忠次。……忠次はシベリヤで發見した金山の事を話しますと、社長は氣の毒さうに、（あアそれですか、それなら唯つた今、或人から知らせて戴きました）と申しました。悪漢シベリヤの忠次驚いたの驚かないのツて、（エッ？ それは何所の誰でございますか？）と尋ねましたが、社長は頭を掉つて、（お氣の毒でございしますが、本社では營業上の事は總て秘密に致す事になつて居りますから。）と言ひました。（宜しい、會社の規則とあれば致方ありません。左様なら！）……悪漢忠次は急いで商造の後を追つ

かけました。斯くとは夢にも知らぬ商造は、會社を出まして、自分の下宿へ歸りましたが、偕一萬五千圓のお金が手に入つたなら、其の五千圓を二人の子供の教育費に送り、残る一萬圓で一つ事業を創めて見よう……と考へてゐる所へ女中が一枚の名刺を持つて參りました。（此のお方が、お目にかかりたいと申します。）（さうか、僕はかういふ人の名は、今始めて知つたのだが、一體どんな風采をして居ますか？）（立派な紳士でございします。）（さうか、ではこちらへお通しなさい。）……入つて來たのはシベリヤの忠次（始めてお目にかかります。私は備前岡山の東海忠次と申す者でございします。）（左様でございしますか、私は紀州熊野の狭野商造と申す者でございします。）……二人の挨拶が終りますと、其所へ鐵業會社の使が一通の手紙を持つて參りました。それをちらりと見ました悪漢忠次（さては會社から、實地踏査の期日を通知して來たのに相違ない。）

と、じろく其の手紙を見ておました。可哀さうに商造は敵に秘密を悟られるとは知らず、忠次の居る前で手紙を披いて讀みました。そして使の者に「承知しました。」と言つたのであります。商造が手紙を元の通り疊みます時、日午前十時……といふ文字がちらりと忠次の眼に入りました。さあ、事件はこれより、いよいよ紛糾してまゐります。これが第二巻の終り……」

「面白いく」と一人の男の子は手を拍きながら言ひました。

「今度は三巻から五巻まで休みなしにやつてお呉れ。」

赤ん坊を負ふしてゐる女の子は、身體を揺ぶりながら言ひました。

繁ちゃんといふのは、最う十七歳ではあるが、少しく智慧が足りないのです、何にもしないで毎日々々町の子供達を家の軒下や、山の上の樹蔭に集めて活動辯士の真似をするのが仕事でした。所がどうしたものか、活動辯士の口真似を

させると、智慧の足りない男とは思はれない程上手でした。で、或人の周旋で、町の常設館へ一度辯士に入れてみたが、本當の筋は、そつち除けにして、自分勝手に宜い加減な事を饒舌るので、一晚ツきりで免職になりました。

伊吹子と明次とは、繁ちゃんが此次に、どんな事を言ふだらう？ と熱心に耳を傾けておました。ピリ／＼……と又た呼子が鳴りました。

「えエ、お客様のお望みによりまして、第三巻を飛ばしまして第四巻と第五巻とを簡単に説明致します……浦鹽商造が大日本鑛業會社から契約金一萬五千圓を受取りまして、會社の門を出ますと、其所に待つて居ました悪漢シベリヤの忠次……（おい浦鹽の商造さんちよいと待つて下さい！）（何ですか。）（外でも無い、其の一萬五千圓の半分と言ひたいが、五千圓だけ此方へ戴きませう。）（それは何ういふ理由で？）（實はあの鑛山を見付けたのは僕なんだ。先月十二

日の午前十時に、僕はあの金山を發見して、會社の方へ知らせに來たのであつたが、途中で一寸買物をしてゐて手取つたばかりに、君に先を越されたんだ。もう一時間僕が早く行けば、其の一萬五千圓は僕のものになる所を、後で見付けた君が、會社へ早く行つたばかりで、其の金は君のものになつたのだ。それに嘘も偽りも無い。疑ふなら會社へ行つて訊いて見るが善い。」「社長から其事は聞いてゐます。しかしそれが事實であるなら、何故今までに言つて呉れなかつたのです。君はあの日僕を訪ねて來たではありませんか。僕は男です、君が僅か一時間の相違で、一萬五千圓の賞金を得られなかつたといふ事を、今少し早く知つたなら五千圓でも六千圓でも、分けて與げられるのでした。けれども今になつては、もう駄目です。」「どうして駄目なんだ?」「それは君に言ふ必要は無い。」「よし言はぬなら言はぬでいい、僕には覺悟がある!」「どんな覺悟だ?」

「(こんな覺悟だ!) ……惡漢忠次はポケットから短銃を取出して近寄つて來ました。時は午前十時頃で、大道には多勢の人達が、西に東に機を織るやうに往來して居ます。けれども此の白晝に強盜が出て居ようとは夢にも知らない人達は、忠次と商造が普通の立話をして居るのだとばかり思つてゐました。」「(宜しい、生命にかけても奪らうといふなら、立派に奪られてやらう!)」言ひ捨てて商造は、さつさと歩き出しました。多分打らに來るか、蹴りに來るかするだらうと思つてゐた忠次は、商造が抵抗しないで歩き出したのを見て、何うする事も出来ないで、ぼんやり其の後姿を眺めてゐました。…(こいつ、餘程偉い奴だワイ。)」と思つた忠次は、商造が何うするか、何所まで行くかを見届けると、其後について行きました。心に油斷の無き商造は自動車會社の前に來ますと直ぐ、タクシーを喚んでそれに乗りました。(どちらまで?) (港まで。)(は

ッ！)……自動車は駆け出しました。それ逃しては一大事と、悪漢忠次も同じく自動車を備つて後を追ッかけました。』

繁ちやんは、両手の指を動かしながら、追ッかけの真似を致しました。

『どうなるんでせう？』と明次は小さい聲で心配さうに言ひました。

『馬鹿ね、明ちやん、あれは繁ちやんの作り話よ。』

「作り話だつて、矢張り心配だもの……」

明次が然う言つた時、繁ちやんは大きな聲で次の説明を始めました。

浦鹽ストツクの北、コンカウサの海岸を離れましたる一艘の小舟、紅と紫の繪の具でもつて美事に描きましたる遮那王牛若丸九郎判官源の義經……波間に其の勇ましい姿が見えつ隠れつ……此時又もや一艘の小舟は岸を離れました。漕手は誰あらう露西亞の北海岸で、年が年中密獵船に乗組んで居まする悪漢シ

ベリヤの忠次。商造を逃してなるものかと、必死の奮闘！」

繁ちやんは鞭を高く舉げて、指揮棒を振る樂長の態度で、樂隊の真似をしました。見て居る子供達は皆な知らず／＼、身體を右に左に傾け乍ら波間に見えたり隠れたりする二艘の舟を、さながら寫真を見るやうに想像してゐました。

『二艘の舟は僅かに三町ばかりの間隔を置いて、沖へ／＼と漕ぎ出されました。十二時、一時、二時、三時、五時、七時……もう海の上もはんのりと薄暗くなりましたる頃、遙か沖の彼方より一艘の汽船が波を蹴つて進んで參りました。斯くと見た商造は、(助けて下さい、海賊が追ッかけて來ます……)と呼びました。商造の呼ぶ聲が船にまで達したと見え、汽船は停止しました。商造は急いで舟を漕ぎ着けますと、甲板の所から一條の芋綱がひらり！と投げられました。其の端を掴んだ商造は、其の芋綱で小舟を手早く縛つて置いて、する

少年少女の童話讀本

# 赤い猫

沖野岩三郎先生著

◆岡本歸一先生裝幀及挿畫

- ◇三五判函入類美本◇
- ◇本文二百五十頁餘◇
- ◇口繪三色版外挿畫四頁◇
- ◇定價金壹圓(送料六錢)◇

金の星出版部が一度、少年少女の童話讀本の出版廣告を掲げました處、「金の星」愛讀者の方々をはじめ、各地の學校や圖書館、及び全國の多數の御家庭から驚くほど譯山の御申込みを受けました。係りの者が日々の御註文にまごついでる有様でございます。これを以ても、此の書が如何に強い反響があつたか、知れました。

金の星出版部はこの記念すべき仕事の完成を期するために、引つづいて第二篇「かくれ猫」の印刷にも着手いたしました。十月中旬第一篇「赤い猫」が発賣されると間もなく、この第二篇も發賣になります。

沖野先生のお作は何れも實に面白いものばかりで、そして又實に立派な教訓を含んだものばかりであります。今度、新たに書かれた苦心の長篇傑作「十人の大將」も第一篇の中に掲げられてあります。

## かぐれ

近刊

第二編

東京野上 下谷前 金の星出版部 電話 六八三番 一〇七番

すると猿の如く其の綱を傳はつて甲板の所へ登つて行きました。拾も其時でした、追ッかけて参りました悪漢忠次は、海賊が逃げました。其男は僕の一萬五千圓の大金を奪つて逃げた海賊です、捕へて下さーい。と大聲で呼びました。(貴様は海賊か。)と云つて水夫は商造の胸倉を捉りました。(いゝえ、あれが海賊です。)と商造は答へました。儲、これが如何なりますか、其の詳細は明日續篇にて御覽に供します。

繁ちやんが然う言つた時、伊吹子と明次は子供達に見付からないやうに、橋の方へ降りて行きました。すると向うからニコニコ笑ひながら此方へ走つて来た徳さんといふ若い郵便配達夫は、二人の顔を眺めながら、

「浦鹽から手紙が来ましたよ。浦鹽のお父様から」と云ひました。

「え？ 本當？」伊吹子と明次とは殆ど同時に然う言ひました。

K2A-22

大正十一年十一月十三日 大正十一年十一月九日 印刷部

東京金の船社發行



# お正月のお支度は三越の品



型のよい 値の安い 丈夫な三越の帽子 二月十鐘以上各種 (三階)



二階廿鐘以上種々あります お渡り用は殊に深山ありませ (三階)



坊ちゃん用の帽子も各種あります 三階以上で煩るよいのがありません (三階)



赤きま用帽子いろいろあります、一圓四十鐘以上…… (三階)

◆襦……お嬢様用のお袴も、お坊ちゃん用の袴も出来でます (三階)

◆靴……丈夫で安い靴が深山御座います (三階)

◆スエーター……小児防寒用として経済的でもあり軽く丈夫なのは、スエーターであります、各種深澤に取揃へます (三階)

- ◆歳暮格安品大賞出し (十二月一日)
- ◆孫子板陳列 (前)
- ◆三越歳の市 (前十五日)
- ◆仕立衣裳座蒲團陳列 (前一日)

◆子供洋服……可愛らしくて暖かです、最も理想的な子供洋服を深山取揃へました、値段も手極お安く御座います (三階)

◆三越マーケット 五階の奥にあり、毎日盛況

◆マント……いろんなマントが出来ました、丈夫な品ばかり (三階)

## 三越呉服店

駿河町

東京市

……日五廿月二十…日一十月二十…日五廿月一十…日休定……

(定借金三十銭 送料一銭)